

久宝寺遺跡

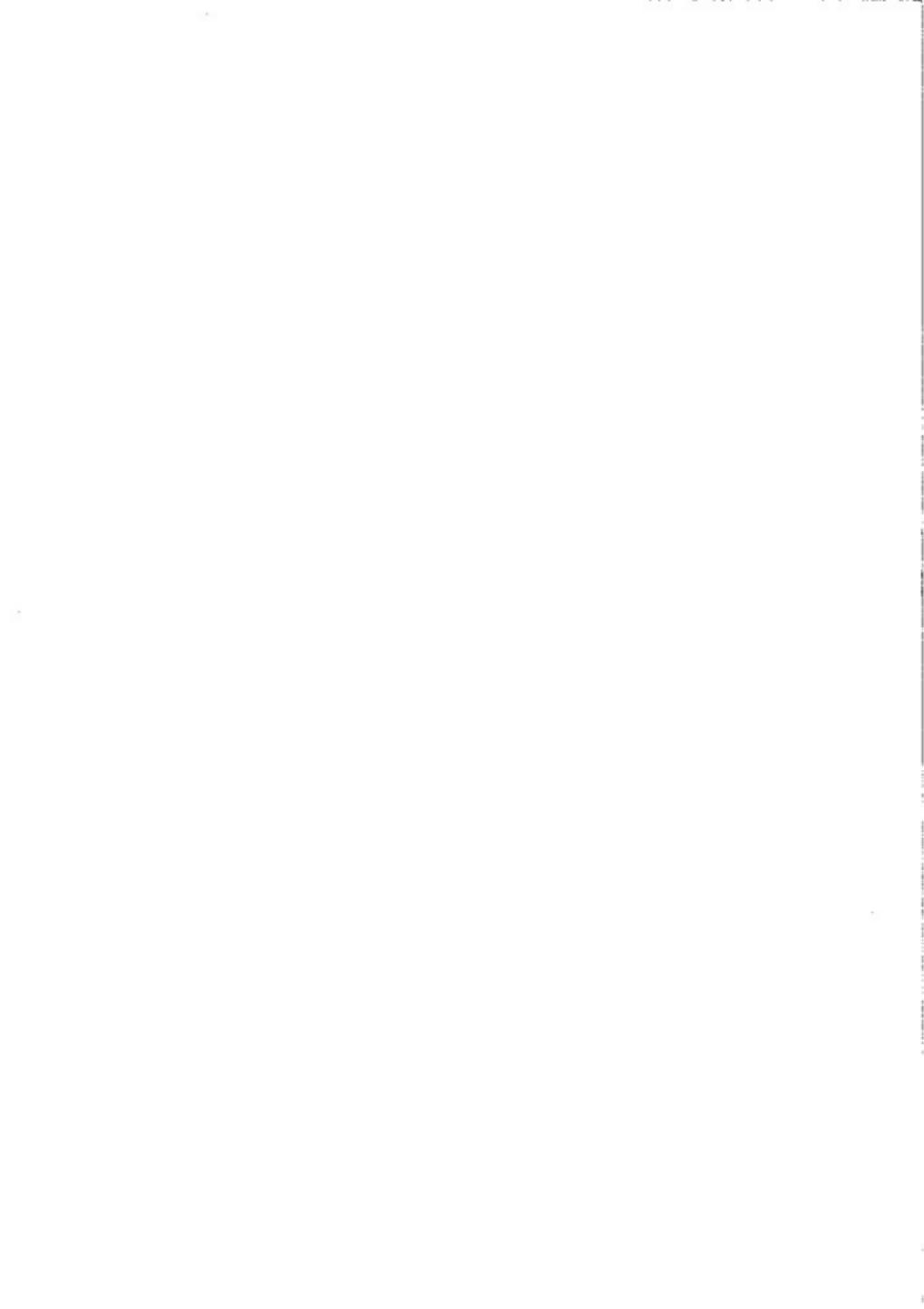
財團法人八尾市文化財調査研究会報告55

I 久宝寺遺跡(第8次調査)

II 久宝寺遺跡(第17次調査)

1997年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



久宝寺遺跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告55

I 久宝寺遺跡(第8次調査)

II 久宝寺遺跡(第17次調査)

1997年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、久宝寺遺跡で実施致しました第8次調査（平成3年度）、第17次調査（平成5年度）の遺物整理等が完了し、これらをまとめて調査報告書を刊行する運びとなりました。久宝寺遺跡は八尾市の西部に位置し、これまでの数多くの発掘調査により、縄文時代晩期から連縄と続く複合遺跡であることが確認されております。今回報告の調査においても、弥生時代後期から近世にわたる重要な成果が得られました。特筆すべきものとして第17次調査では、古墳時代前期の土坑内から紡織具の部材が出上しており、当時の生活様相を究明するうえで貴重な資料を提供してくれました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓發に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山 丈司

序

1. 本書は財團法人八尾市文化財調査研究会が実施した久宝寺遺跡の発掘調査報告書であり、平成3年度の第8次調査（K H91-8）、平成5年度の第17次調査（K H93-17）の報告を集録したものである。
1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成9年3月31日をもって終了した。
1. 本書に集録した発掘調査報告書は各調査員が作成し、文責等は各例旨に記したが、本書をまとめるにあたっては高萩千秋が編集作業を行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1. 本書で用いた方位は、座標北である。
1. 遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居	—S I	井戸	—S E	土坑	—S K
ピット・柱穴・小穴	—S P	溝	—S D	落ち込み	—S O
1. 遺物尖洞図の断面は、木製品を斜線とし、他は白とした。
1. 調査に際しては、写真・尖洞図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

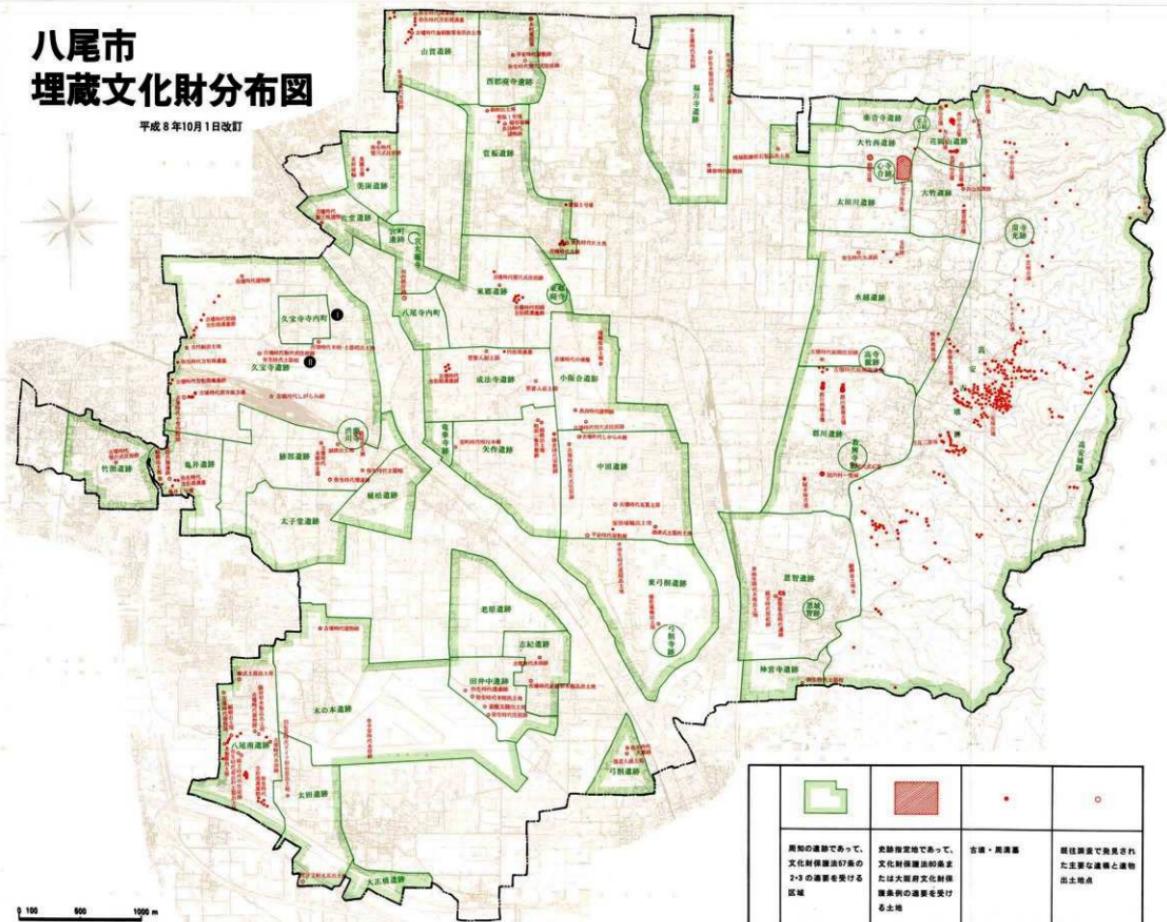
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡（第8次調査）	1
II 久宝寺遺跡（第17次調査）	29

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



I 久宝寺遺跡第8次調査 (KH91-8)

例　　言

1. 本書は、八尾市久宝寺2-2-33で実施した久宝寺遺跡第8次調査（KH91-8）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第104号 平成2年11月26日）に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当し、一部同研究会の高萩千秋・原田昌則・成海佳子がこれを補佐した。
1. 現地調査は、平成3年6月20日に着手し、同年7月27日に終了した。調査面積は約650m²である。
1. 現地調査には、東秀之・荒川和哉・磯上サカエ・沖田純一・坂下学・西田寿・能勢直樹・濱田千年・正木洋二・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加し、現地調査終了後に着して平成9年3月31日をもって終了した。
1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を主に田島が作成した。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査概要.....	3
第1節 調査方法.....	3
第2節 基本層序.....	4
第3節 検出構造と出土遺物.....	4
第3章 出土遺物観察表.....	24
第4章 まとめ.....	28

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000)	2
第2図 地区割図 (S = 1 / 400)	3
第3図 基本層序 (S = 1 / 40)	4
第4図 第1次面平面図 (S = 1 / 200)	5
第5図 S E 102平・断面図 (S = 1 / 10)	6
第6図 第2次面平面図 (S = 1 / 100)	7 ~ 8
第7図 第2次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4)	12
第8図 S I 301平・断面図 (S = 1 / 50)	12
第9図 第3次面平面図 (S = 1 / 100)	13 ~ 14
第10図 S K 303平・断面図 (S = 1 / 50)	15
第11図 第3次面遺構出土遺物① (S = 1 / 4)	16
第12図 S K 305平・断面図 (S = 1 / 50)	17
第13図 S D 301出土遺物① (S = 1 / 4)	18
第14図 S D 301出土遺物② (S = 1 / 4)	19
第15図 S D 301出土遺物③ (S = 1 / 4)	20
第16図 第3次面遺構出土遺物② (S = 1 / 4)	22
第17図 第5・6層出土遺物 (S = 1 / 4)	23

表 目 次

表1 第2次面土坑 (S K 201~207) 法量表	9
表2 第2次面溝 (S D 201~231) 法量表	10
表3 第2次面ピット (S P 201~289) 法量表	11
表4 S D 301出土土器の出土地点	18
表5 第3次面溝 (S D 301~339) 法量表	21
表6 第3次面ピット (S P 301~326) 法量表	22

図版目次

- 図版1 西区第1次面（北から）
東区第1次面（北から）
- 図版2 S E 102曲物（上が東）
S E 102断削り（西から）
- 図版3 西区第2次面（西から）
東区第2次面（北から）
- 図版4 西区第3次面（北から）
東区第3次面（北から）
- 図版5 S I 301（西から）
S D 301東半（北東から）
- 図版6 S D 301西半（西から）
- 図版7 出土遺物（S K 301・S K 302・S K 304・S D 301）
- 図版8 出土遺物（S D 301）
- 図版9 出土遺物（S D 301）
- 図版10 出土遺物（S D 301・第5層・第6層）



久宝寺小学校校門に建てられた石碑

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1～3・久宝寺1～6・西久宝寺・南久宝寺1～3・神武町・亀井・北亀井町1～3・渋川・渋川町1～7がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大阪市域では加美遺跡として調査が実施されているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。そして昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の延長1.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、このほぼ中位に位置する久宝寺遺跡は、北地区・南地区に分割され、昭和55年度から昭和61年度にわたって調査が実施された。また(財)東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても数次の発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成2年、当時の八尾市長山脇悦司氏から、八尾市久宝寺2-2-33に所在する八尾市立久宝寺小学校における屋内運動場建設の届出書が、八尾市教育委員会文化財室(現文化財課)に提出された。これを受けて同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成2年11月15日に遺構確認調査を実施した。その結果、古墳時代前期^{註1}の遺構・遺物包含層が確認され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

久宝寺遺跡内北東部にあたる今回の調査地の近辺では、これまで発掘調査は実施されておらず、遺跡の様相は不明な地域であるといえる。周辺の調査成果をみると、前述した北西約600mの久宝寺遺跡北地区(①)では縄文時代晩期の自然河川・遺物包含層が検出されている。また古墳時代中期では韓式系土器の多量の出土が特筆される。西約500mで実施した当調査研究会第2次調査(②)においては、遺物包含層や奈良時代頃に埋没した河道から、弥生時代後期から飛鳥・奈良時代の土器が出土している。南西約300mの第3次調査(③)では、木棺・土器棺を主体部にもつ古墳時代前期(布留式期古相)^{註2}の方形周溝墓1基の他、平安時代では水田・自然河道が検出されている。この付近では、南西部の第17次調査(④)で弥生時代^{註3}

後期・古墳時代前期（布留式期古相）の遺構が、また南東部の市教委調査地（⑤）でも弥生時代後期の良好な包含層が検出されている。^{注5} なお当調査地の西側には、中世末から近世初頭にかけて、一向宗西証寺（現在の顯証寺）を中心に展開した久宝寺寺内町が隣接している。^{注6}



第1図 調査地位置図 ($S=1/5000$)

第2章 調査概要

第1節 調査方法

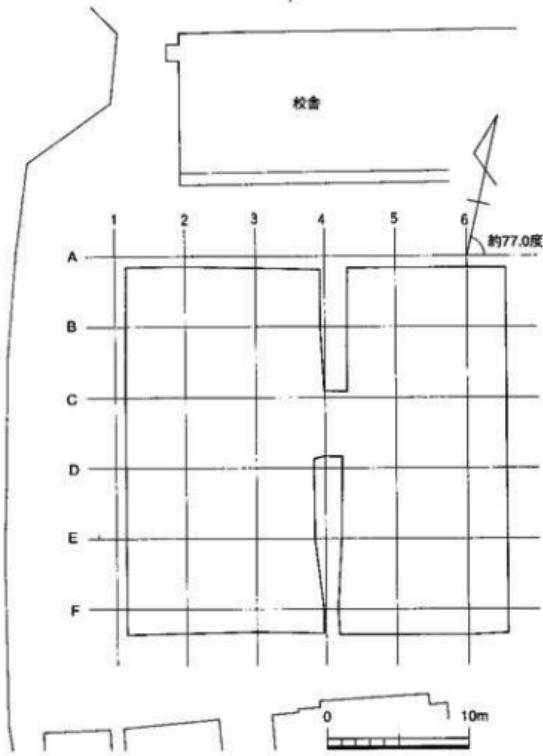
今回の調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第8次調査である。屋内運動場建設に伴う調査で、建物部分を対象としている。

調査にあたり機械掘削を開始したところ、調査地の中央で南北方向の既設水道管の存在が判明した。協議の結果この撤去が困難なことから、調査地を東区・西区に分割して交互に調査を実施することになった。そして、人力掘削に際してのベルトコンベアー設置の都合で、調査地中央で水道管下を掘り抜き、東区と西区を連結させた。なおこの連結部分では、第1次面で曲物井戸 (S E 102) が

検出され、以後はこの部分を残しての調査となつた。

調査では前述の遺構確認調査のデータを参考に、地表下約 2.2 m までを機械掘削とし、以下の約 0.5 m を人力掘削により実施した。

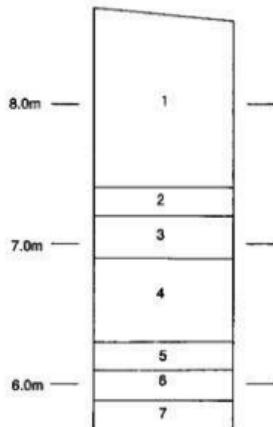
地区割は、調査区平面形に合わせて 5 m 方眼を任意に設定した。そして南北ラインに数字 (西から 1 ~ 6)、東西ラインにアルファベット (北から A ~ F) を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの方眼の南北ラインは、北から西に約 13.0 度振っている。



第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

第2節 基本層序

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第3層は近世の遺物を含んでおり、床土と考えられる。第4層は河川の堆積と考えられ、北西部では暗褐色～灰黄色の砂層・砂礫層が厚く堆積している。古墳時代後期以降の遺物を少量含んでいる。第5層以下はほぼ水平の安定した堆積状況である。第5層は古墳時代後期頃までの遺物を含んでおり、さらに細分が可能である。この上面が第1次面（標高約6.3m）である。第6層は古墳時代前期までの遺物を含んでおり、第5層と同様に細分できる。この上面が第2次面（標高約6.1m）である。第7層がベース面となり、この上面が第3次面（標高約5.9m）である。



1. 盛土
2. 旧耕土
3. 暗青灰色粗砂混じり砂質土
4. 青灰色系粘質シルト～粘土
5. 青灰色～灰色粘土
6. 暗灰青色粘質シルト
7. 錆灰色粘質シルト

第3図 基本層序 (S=1/40)

第3節 検出遺構と出土遺物

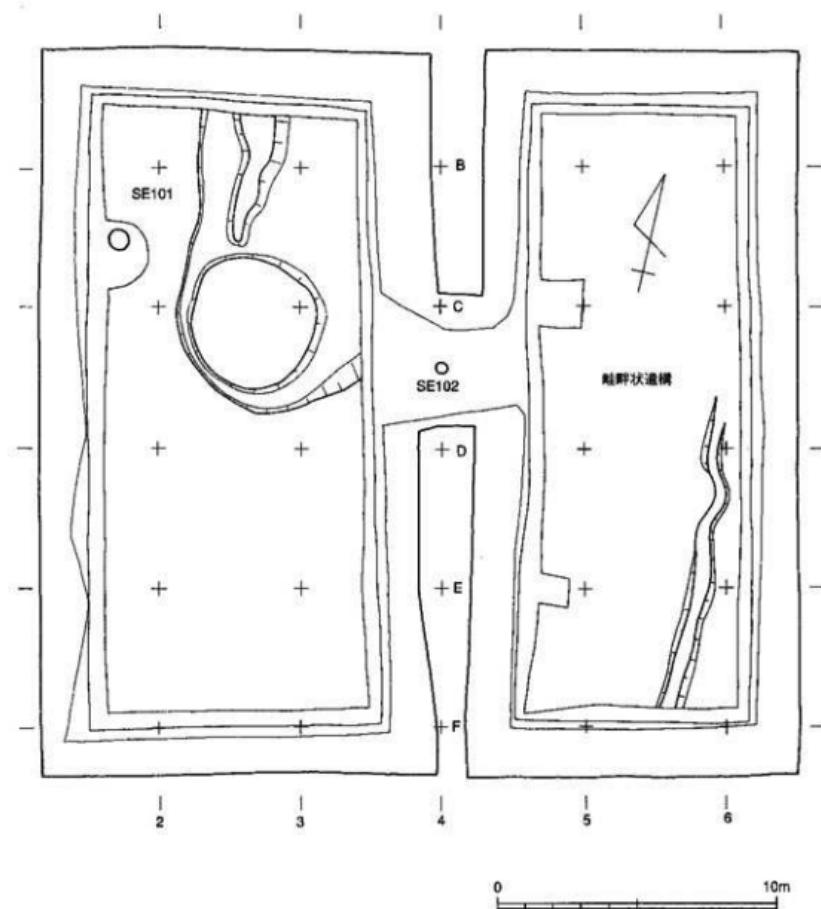
〈第1次面〉

第5層上面で井戸2基（SE101・102）、畦畔状遺構1条を検出した。

この面は第4層の砂層で覆われ、その影響で北西部は起伏がある。西区中央北部では直径約4.5mの円形に、高さ10cm～15cm程度盛り上がる部分が認められた。その周囲の西部～南部は幅0.4m～1.0m・深さ5cm～10cmの溝状を呈し、ここには第4層が落ち込んで灰黄色微砂～粘質シルトの互層が堆積している。これらの形状等からこの部分は、削平された小円墳であるという可能性も考えたが、自然に形成されたものかどうか明確には判断できなかった。

S E101

1B区に位置する井戸で、第3層上面から掘り込まれている。機械掘削の段階で井戸の東半部を検出したが、調査は実施していない。掘方平面形は直径約2.5mの円形を呈し、井戸枠は

第4図 第1次面平面図 ($S=1/200$)

掘方の北寄りに設置されている。井戸枠は直径約70cmを測り、枠構造は上部に井戸枠瓦、下部に桶を使用したものである。近世以降通例にみられる井戸である。

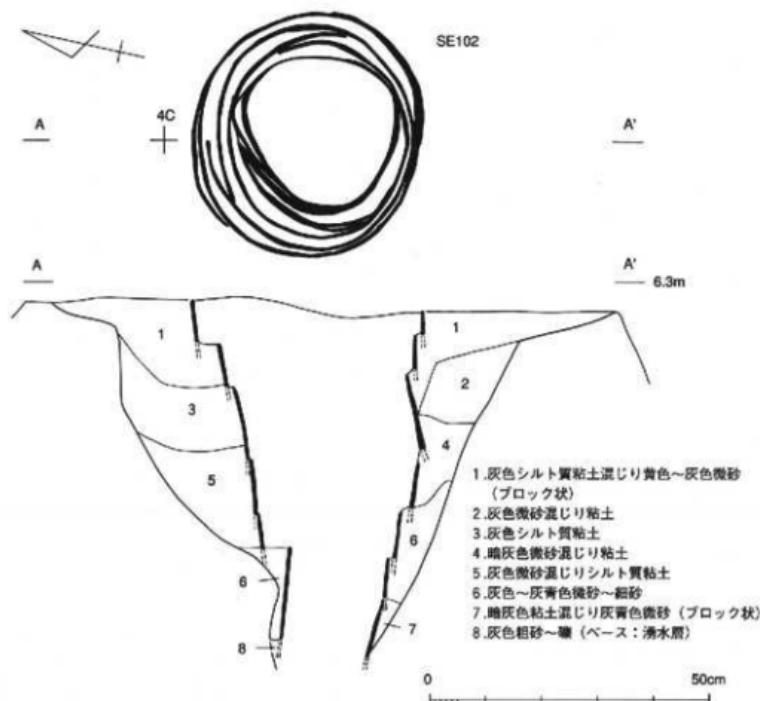
S E102

3～4C区で検出した井戸で、井戸枠には曲物6段を使用している。曲物の直径は最下段が約18cm、最上段が約42cmを測り、徐々に直径の大きな曲物を積み上げている。最下段が湧

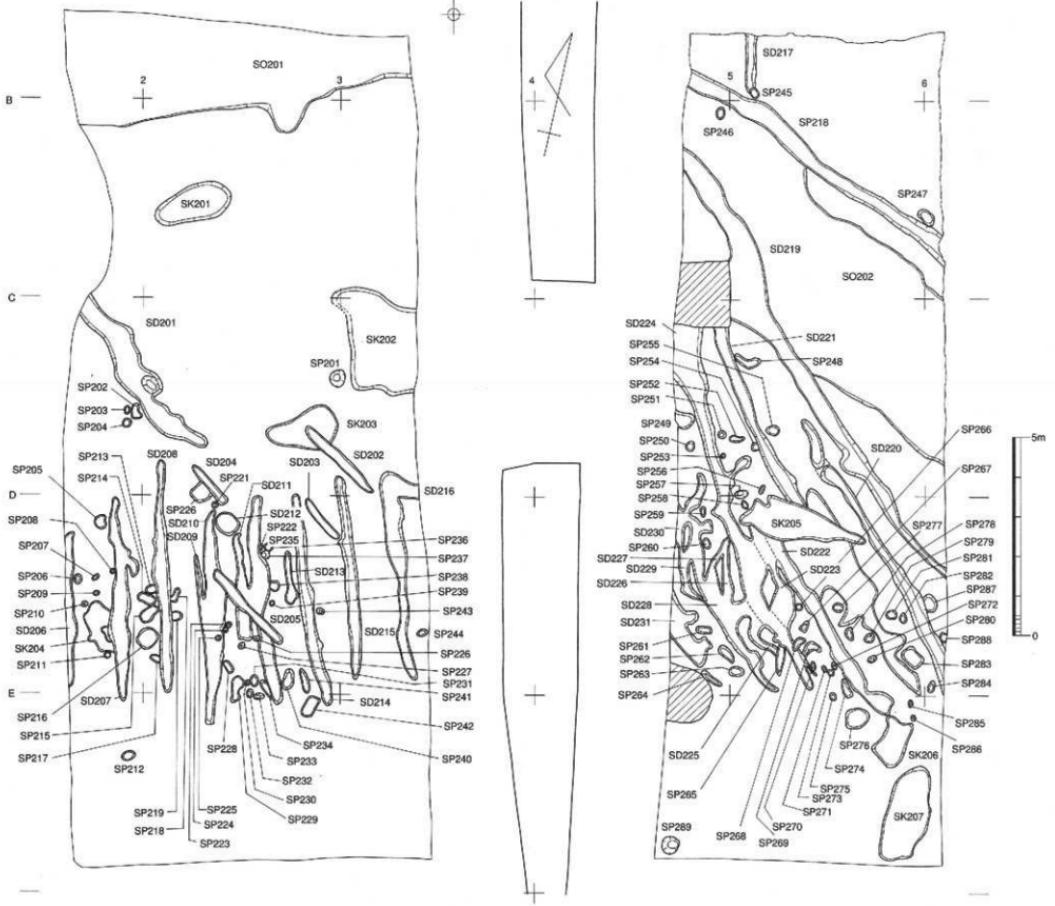
水層に達している。枠内埋土は上から明灰青色粘質シルト・明灰青色細砂混じり粘質シルト・明灰色細砂～粗砂である。掘方は直径約1.0mの円形で、深さ65cm以上を測り、断面は二段掘りの形状を呈する。掘方埋土はおおまかにみて上から黄色～灰色微砂（灰色粘土のブロックを含む）・灰色粘土～粘質シルト・灰色系微砂～細砂である。遺物は全く出土しておらず、時期は明確にはできないが、中世頃のものであろう。

畦畔状遺構

5C～E区で検出した。一部蛇行して南北方向に伸び、検出長約11.3m・上幅約50cm・下幅約90cm・高さ約4cmを測る。断面観察によると、盛土されたものではない。1条のみではあるが水田畦畔である可能性があり、この面全面には砂で埋まった足跡状の窪みも多数認められることからも、第1次面は河川により後世に削平された水田面である可能性がある。時期は第4層出土遺物から、古墳時代後期以降に比定できるものである。



第5図 SE102平・断面図 (S=1/10)



第6図 第2次面平面図 (S=1/100)

<第2次面>

土坑7基 (SK 201~207)、溝31条 (SD 201~231)、落ち込み2基 (SO 201・202)、ピット89個 (SP 201~289)を検出した。遺構出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に比定されるが、これを覆う第5層出土遺物より、古墳時代後期頃まで下る遺構とも考えられる。

土坑 (SK)

いずれも浅い落ち込み状を呈するもので、性格等は不明である。SK 202は南北方向の溝群と同様の埋土であり、同時期に機能していたものと考えられる。出土遺物は小片のみで、固化し得るものはなかった。法量等は表1にまとめた。

S K	地区	平面形	法量	深さ	埋 土	遺 物
201	2 B	長円形	199×91	8	暗褐色粘土～粘質シルト	
202	3 C	方 形	169以上×213	13	暗灰青色粘土～粘質シルト	庄内新
203	2 C	不定形	185×106	13	暗褐色粘土～粘質シルト	V～庄内
204	1 D	不定形	66以上×107	8	暗褐色粘土～粘質シルト	不明
205	5 D	不定形	300×90	7	暗褐色粘質土	
206	5 E	不定形	117×65	21	暗褐色粘質土	庄内?
207	5 E	不定形	257×109	11	暗褐色粘質土	

表1 第2次面土坑 (SK 201~207) 法量表(cm)

溝 (SD)

北西～南東方向の溝 (SD 201~205, 218~231) と南北方向の溝 (SD 206~217) があり、後者の溝は西区で多くみられた。西区では北部と南部は削平されていると考えられ、中央部付近でのみ検出されたが、前者が後者を切っている状況を確認した。

前者の溝は70cm~90cm間隔で規則的に平行して並んでいる。途中で二又に分かれるものもあり (SD 209・210)、SD 216は直角に屈曲している。後者の溝も平行しているが、東区では西部で複雑に絡み合い、また北部で集合しているような状況が窺える。

埋土は前者のうち西区のSD 201~205が暗褐色粘土～粘質シルト、東区のSD 217~231が暗灰青色粘質シルト～暗灰褐色シルト、後者が暗灰青色粘土～粘質シルトである。

法量等は表2にまとめた。

SO 201

西区北端で、東西8.7m以上、南北2.9m以上にわたって南から北に向かって落ち込んでいる。深さは約34cmを測る。埋土は暗灰色粘土である。遺物は出土していない。

SO 202

東区、SD 218とSD 219の間に位置し、両溝には切られている。幅約3.6mの北西～南東方向の溝状を呈する落ち込みで、深さは最大で約18cmを測る浅いものである。断面皿状で、埋土は暗青灰色～暗灰色シルト～粘質シルトである。遺物は出土していない。

S D	地 区	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺 物
201	1 C ~ 2 C	4.74以上	32 ~ 79	14	庄内
202	2 C ~ 3 C	2.34	27	12	庄内新(1)
203	2 D	1.29	19	13	庄内
204	2 C	1.28	18	11	不明
205	2 D	2.52	20	11	
206	1 D	3.82以上	29 以上	11	
207	1 D	5.24	17 ~ 54	16	庄内新~布留古
208	2 C ~ 2 D	5.95	16 ~ 75	20	不明
209	2 D	1.16	11	7	
210	2 D ~ 2 E	5.51	22 ~ 71	13	庄内~布留
211	2 D	2.80	16 ~ 37	9	
212	2 D	5.33	22 ~ 54	18	V様式
213	2 D	1.47	15 ~ 36	10	
214	2 D	5.44	29 ~ 39	10	不明
215	3 C ~ 3 D	5.19	24	17	V様式~庄内(2)
216	3 C ~ 3 D	5.34+0.50以上	20 ~ 52	19	庄内(3)
217	5 A	1.53以上	24	7	
218	4 A ~ 5 B	8.30以上	30 ~ 52	20	
219	4 B ~ 6 D	12.50以上	15 ~ 110 以上	21	
220	5 C ~ 6 D	7.60以上	16 ~ 46	8	不明
221	4 C ~ 5 D	10.62以上	20 ~ 147	15	V様式~庄内
222	5 D ~ 5 E	5.45以上	17 ~ 52	10	
223	5 D	2.09以上	20 ~ 50	7	
224	4 C ~ 5 D	9.94以上	35 ~ 70 以上	15	V様式~庄内(4)
225	5 D	1.10	22	6	
226	4 D	1.20	18	5	
227	4 D	1.34	14 ~ 34	3	
228	4 D ~ 5 D	5.49以上	17 ~ 64	9	
229	4 D	2.00	10 ~ 30	6	
230	4 C ~ 4 D	2.17	12 ~ 36	10	
231	4 D	2.04以上	45	6	

表2 第2次面溝 (S D 201~231)法量表

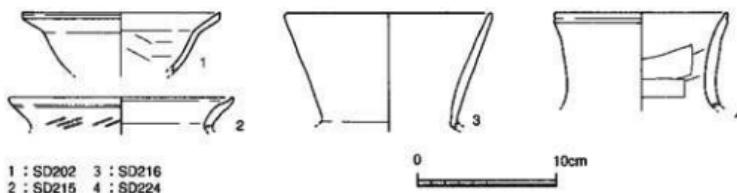
ピット (S P)

主に溝の周辺にみられ、何らかの関連も考えられる。深さ 10 cm 程度の浅いものが多く、また平面不定形なものも多い。建物を構成するような並びは認められなかった。一応ピットとしたが、S P 264・265等はその平面形状から溝の残穴であろうと思われる。埋土は①暗灰色粘土～粘質土・②褐色粘土～粘質シルト・③暗灰青色粘土～粘質シルトの3種類に分類できる。

出土遺物は少量で、図化したものはない。S P 276からは根石と考えられる挙火の石が出土している。法量等は表3にまとめた。

S	P	地区	平面形	法量	深さ	埋土	土器
201	2 C	円形	44×38	33	③		
202	1 C	不定形	40×22	8	②	不明	
203	1 C	楕円形	21×15	12	②		
204	1 C	円形	23×23	10	②	不明	
205	1 D	不定形	38×28	8	②	V様式	
206	1 D	不定形	26×22	12	②		
207	1 D	椭円形	22×14	10	②		
208	1 D	円形	14×13	10	②		
209	1 D	円形	17×14	5	②		
210	1 D	椭円形	17×14	9	②		
211	1 D	椭円形	18×18	12	②		
212	1 E	椭円形	35×24	15	①	不明	
213	2 D	椭円形	19×31以上	5	②		
214	2 D	長方形	48×24	6	②		
215	2 D	不定形	55×29	8	②		
216	2 D	円形	56×50	17	②		
217	2 D	不明	18×27以上	6	②		
218	2 D	不定形	13×36以上	7	②		
219	2 D	不明	21×29以上	7	②	庄内	
220	2 C	不定形	35×46以上	10	③		
221	2 D	円形	18×16	7	③		
222	2 D	不定形	64×61	10	③	庄内新	
223	2 D	円形	17×17	13	②		
224	2 D	円形	16×15	13	②		
225	2 D	椭円形	17×16	6	②		
226	2 D	椭円形	17×16	11	②		
227	2 D	円形	18×18	11	②		
228	2 D	不定形	38×18	11	②		
229	2 D	不定形	68×19	12	②	庄内	
230	2 D	円形	14×14	9	②		
231	2 D	椭円形	31×22	11	②		
232	2 D	椭円形	24×18	9	②		
233	2 D	椭円形	27×15	8	②		
234	2 D	不定形	42×40以上	—	②		
235	2 D	不明	17×11以上	11	②		
236	2 D	円形	23×19	12	②		
237	2 D	円形	16×22以上	13	②	不明	
238	2 D	椭円形	26×24以上	12	②		
239	2 D	椭円形	16×15	10	②		
240	2 D	不定形	55×26	14	②		
241	2 D	椭円形	64×20	13	②		
242	2 E	椭円形	57×33	10	②		
243	2 D	不定形	23×16	11	②		
244	3 D	不定形	29×21	13	②		
245	5 A	不定形	27×21	7	①		
246	4 B	楕円形	38×28	8	①		
247	5 B	不定形	52×27	5	①		
248	5 C	不定形	67×20	—	①	V様式	
249	4 C	不明	50×50以上	17	①		
250	4 C	円形	28×24	8	①		
251	4 C	円形	23×22	10	①	庄内	
252	5 C	不定形	43×15	8	①		
253	4 C	円形	15×13	7	①		
254	5 C	不明	16×20以上	8	①	庄内	
255	5 C	不定形	32×28	6	①		
256	5 C	不定形	25×13	8	①		
257	5 C	椭円形	38×24	8	①		
258	5 D	椭円形	28×16	5	①		
259	4 D	不定形	28×12	3	①		
260	4 D	椭円形	30×20	4	①		
261	4 D	不定形	42×18	6	①		
262	4 D	不定形	53×23	7	①		
263	5 D	椭円形	40×25	9	①		
264	4 D	不定形	60×15	8	①		
265	5 D	不定形	17×74以上	5	①		
266	5 D	円形	22×21	6	①		
267	5 D	不定形	30×16	6	①		
268	5 D	不定形	41×19	11	①		
269	5 D	不定形	12×44以上	9	①		
270	5 D	椭円形	23×13	7	①		
271	5 D	椭円形	19×11	7	①		
272	5 D	椭円形	20×12	6	①		
273	5 D	円形	19×15	7	①		
274	5 D	不定形	53×19	6	①	庄内	
275	5 D	椭円形	23×17	7	①	不明	
276	5 E	不定形	60×54	9	①	根石	
277	5 D	円形	31×27	5	①		
278	5 D	不定形	35×19	2	①		
279	5 D	不定形	28×27	7	①		
280	5 D	椭円形	25×16	8	①		
281	5 D	椭円形	30×24	6	①		
282	5 D	椭円形	26×18	4	①		
283	5 D	長方形	56×37	6	①		
284	6 D	椭円形	33×19	6	①		
285	5 E	椭円形	18×13	6	①		
286	5 E	円形	16×13	4	①		
287	6 D	不明	33×31以上	7	①		
288	6 D	不明	23×18以上	5	①		
289	4 E	不定形	45×44	9	①	庄内	

表3 第2次面ビット (S P 201~289)法量表



第7図 第2次面遺構出土遺物 (S=1/4)

<第3次面>

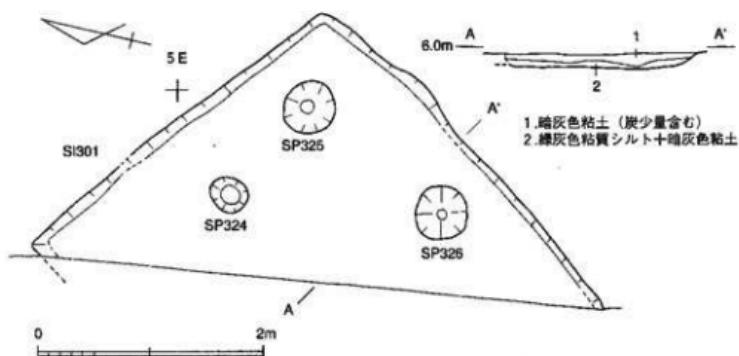
竪穴住居1棟(SI301)、土坑5基(SK301~305)、溝39条(SD301~339)、ピット26個(SP301~326)を検出した。

SI301

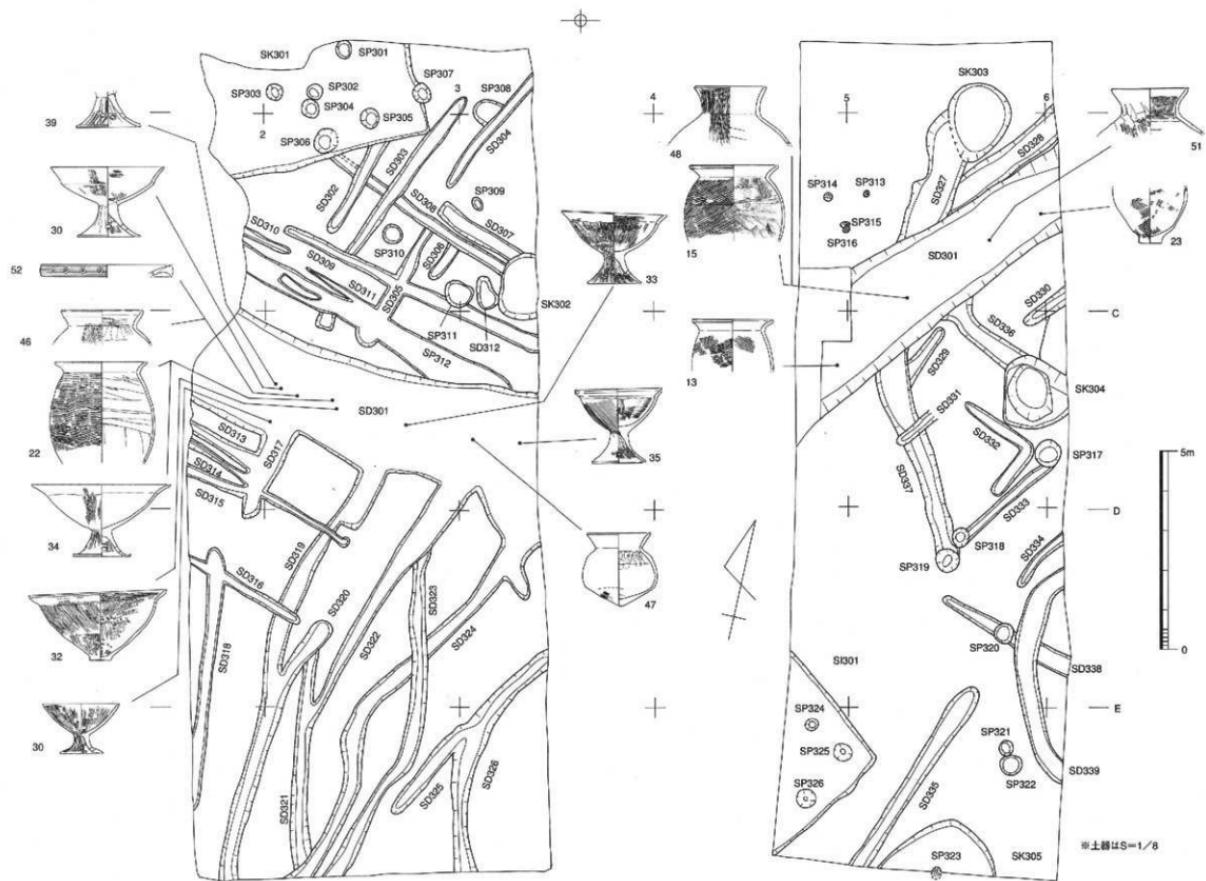
4~5D~E区で竪穴住居の東側部分を検出した。東西辺約3.3m、南北辺は3.6m以上を測り、平面長方形を呈すると考えられ、主軸は北から東に約32度振っている。深さ約15cmを測り、埋土は上層が暗灰色粘土(炭少量含む)、下層が緑灰色粘質シルト+暗灰色粘土である。底部では直径31cm~48cmを測るピット3個(SP324~326)が検出され、これらは柱穴となる可能性がある。壁溝は平面及び断面でも認められなかった。

出土遺物には庄内式期新段階頃に比定される土器片があるが、固化できるものはなかった。

なお当竪穴住居の北部は前述の遺構確認調査における南グリッドと重複する位置関係があり、この調査の際、二個体の庄内壺が押しつぶされた状況で出土している。2点共に、外面左上がりの平行タタキ後下半にハケを施すもので、庄内式期新段階に比定されるものである。
31



第8図 SI301平・断面図 (S=1/50)



第9図 第3次平面図 (S=1/100)
—13・14—

SK301

1～2 A～B区で検出した。平面形は、東西辺5.2m以上・南北辺2.3m以上を測る方形の角部の様相を呈しており、深さは5cm～21cmを測る。SD302・308を切っている。底部から肩部で直径40cm～50cmのピット7個(SP301～307)を検出したが、当土坑は平面形状からみてこれらを柱穴とする方形の堅穴住居である可能性がある。

出土遺物は弥生時代後期末から庄内式期に比定されるが、手焙形土器(5)の他は小片のみである。5はほぼ全容が知れる資料で、器高18.3cm・体部径17.3mを測る。体部～底部間には刻み目を施した突帯を巡らせ、覆部は口縁部の中位に接合している。調整は外面ナデ、底体部内面ハケで、覆部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。体部～底部間の外面に黒斑を有する。時期は弥生時代後期末に比定される。

SK302

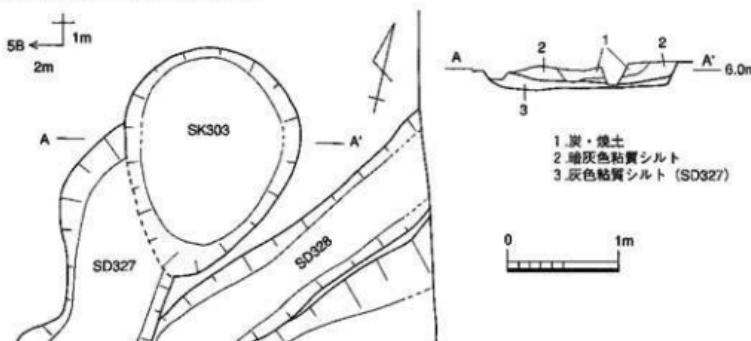
3B～C区で検出したが、東部は調査区外に統一平面形は不明である。規模は約1.7m×1.0m以上、深さ34cmを測る。SD307・308を切っている。

出土遺物には庄内式期古相～新相の土器があり、固化した甕(6・7)は庄内式期新相に比定されるものである。

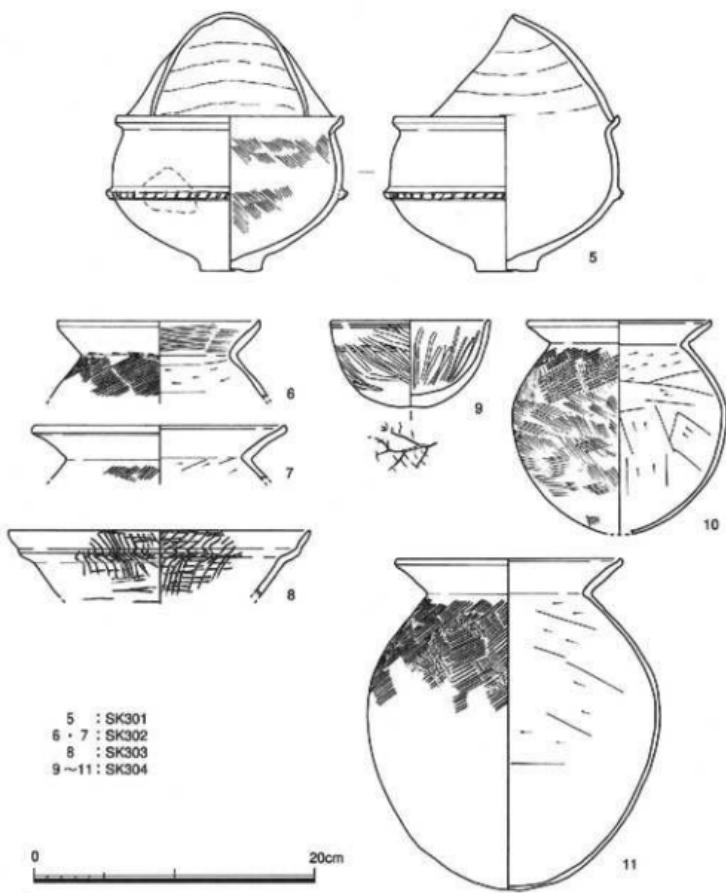
SK303

5A～B区に位置し、平面形は南北約2.0m・東西約1.6mの偏円形を呈している。断面皿状を呈し、深さ約27cmを測り、埋土は上層が炭・焼土層、下層が暗灰色粘質シルトである。南西部で連続しているSD327との関係は明確にはできなかったが、同時に機能していたか、これを切っているようである。

出土遺物には弥生時代後期末から布留式期の少量の土器がある。固化した有段鉢(8)は布留式期古相に比定されるものである。



第10図 SK303平・断面図 (S=1/50)



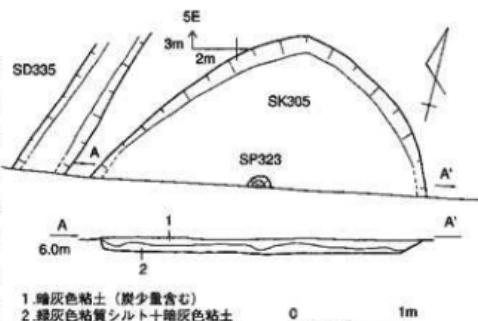
第11図 第3次面遺構出土遺物 (S=1/4)

SK304

5～6C区に位置し、SD336を切っている。平面不定形で、規模は1.6m以上×1.9m、深さ36cmを測る。遺物は庄内式期新相に比定される土器(9～11)が出土している。鉢(9)は内外面ヘラミガキで、底部外面には葉脈痕が遺存している。

SK 305

5E区で検出され、南は調査区外に続いている。規模は一辺2.0m以上、深さ約10cmを測り、平面方形のコーナー部とも考えられる。埋土の状況はS 1301と同様である。上面でSP 323が検出されており、これを柱穴とする竪穴住居である可能性がある。出土遺物は細片のみであるが、時期は庄内式期と考えられる。



第12図 SK 305平・断面図 (S = 1/50)

SD 301

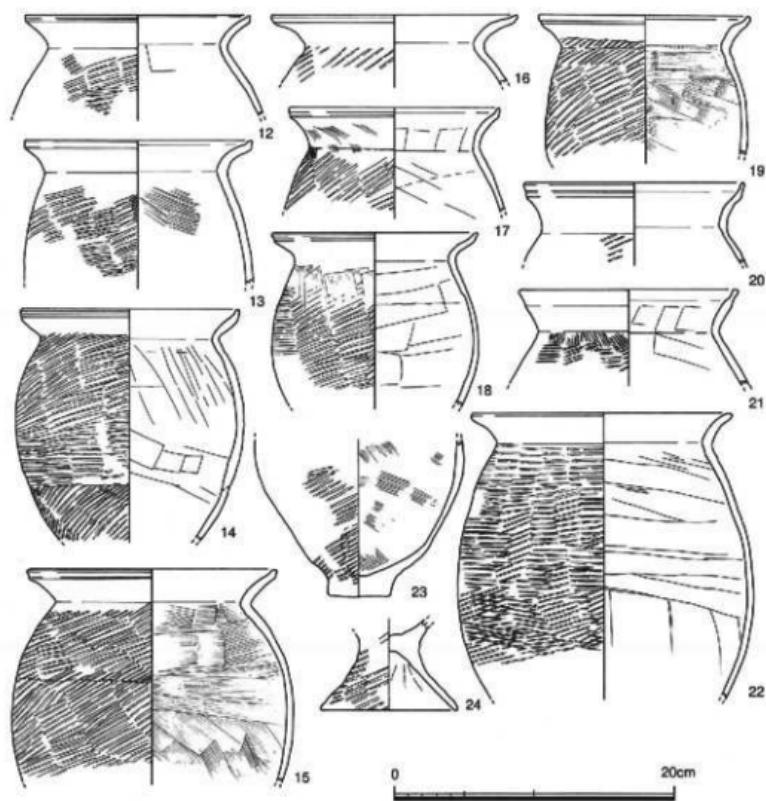
調査区を横断する溝で、西区ではわずかに弧状を呈して東西方向に伸び、調査区中央付近で屈曲すると考えられ、東区では南西-北東方向に直線的に伸びている。西区ではSD 319・322等が接続し、SD 312を切っている。東区ではSD 327・336等を切っている。

規模は検出長約23m・幅1.8m~2.6m・深さ10cm~36cmを測り、断面圓状を呈する。埋土は上層が青灰色粘土混じりシルト、下層が暗灰色粘土混じり細砂である。

土器(12~55)は主に西区から出土している。器種は多岐にわたり、完形品に近いものも数点ある。時期は弥生時代後期末に比定されるものである。これらのうち残存状態の良好な土器の出土状況をみると、溝の中央に等間隔に並べられたような状況で、何らかの祭祀等、意図的なものも想定できる。

壺は口縁端部をつまみあげるものが多くを占め、外反して端部が丸く収まるものは1点である(22)。調整は外面平行タタキで、後に肩部にハケを施すものが2点ある(17・18)。内面はハケ・ナデ・板ナデがあり、ヘラケズリを施すものはない。

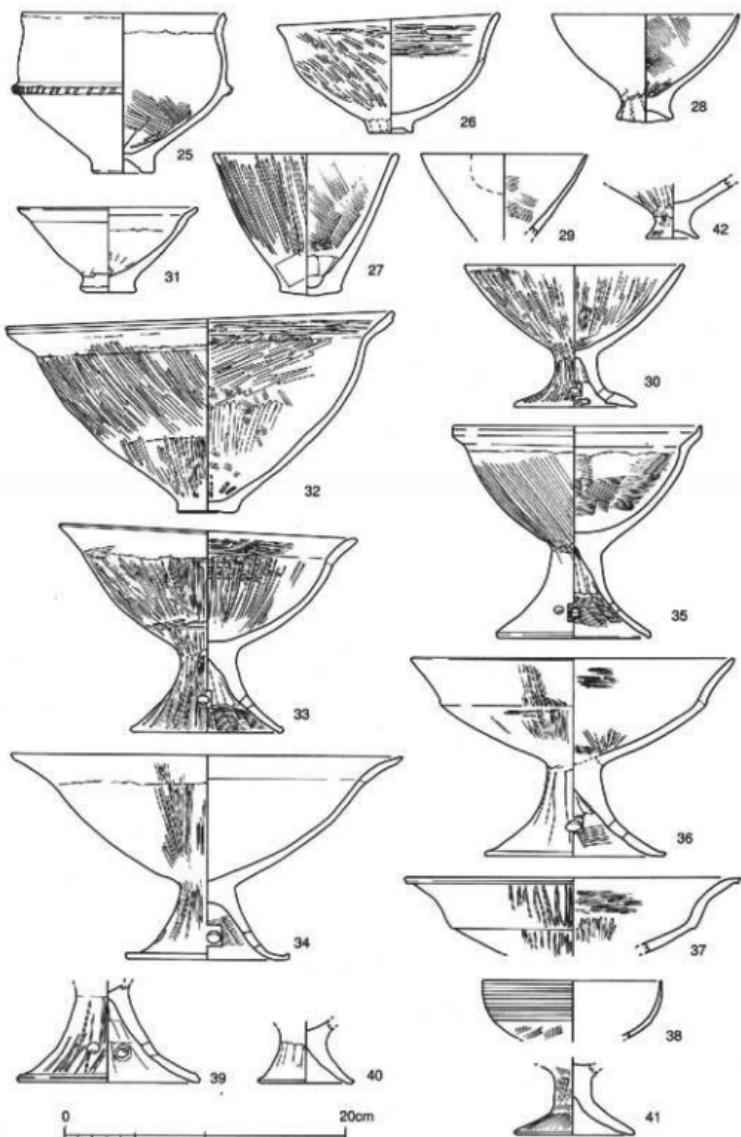
鉢は形態で四種類に分類できる。A: 体部から上方に屈曲して口縁部に至るもの(25・26)。B: 底部~口縁部が直線的に上外方に伸びるもの(27)。C: 体部~口縁部が全体に内湾するもの(28~30)。D: 内湾する体部から口縁部が外反するもの(31~35)。Aのうち25は底部~体部間に刻み目を施した突帯を廻らせるもので、形態的に覆部の欠損した手焼形土器である可能性がある。C・Dには台付きのものがあり、いずれも台部に四方向の円孔を有する。Dの口縁端部には、壺と同様つまみあげるもの(32・35)と丸く収まるものがある。38は口縁部外面に櫛描直線文を施すもので、高杯であろう。40は台付き壺かもしれない。



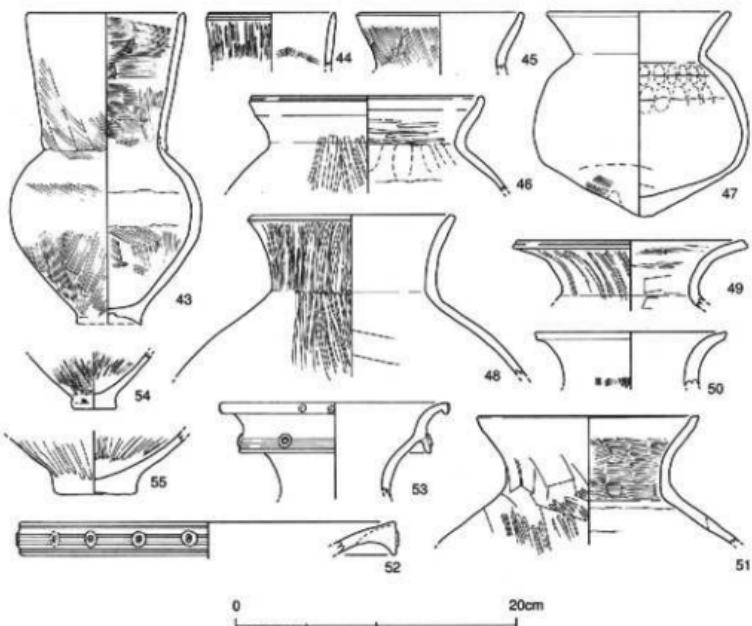
第13図 SD 301出土遺物① (S = 1 / 4)

	西 区	東 区
甕	12・16・17・19・20・21・22・24	13・14・15・18・23
鉢	25・26・27・28・29・30・32・33・34・35・39・40	31
高杯	36・38・41	37
壺	43・44・45・46・47・49・50・52・53・54・55	48・51

表4 SD 301出土土器の出土地点



第14図 SD 301出土遺物② (S = 1/4)



第15図 SD 301出土遺物③ (S=1/4)

壺には長頸壺(43)・短頸壺(44~48)・広口壺(49~52)・複合口縁壺(53)がある。52・53は口縁部外面に獣描直線文及び竹管円形浮文を施している。

出土土器の器種構成をみると、台付き鉢の多いことが特徴といえる(30・33~35)。そして高杯とした36も脚高の低いもので、脚部の形態は他の台付き鉢のものに類似している。また37も高杯であろうが、この時期の典型的な高杯が少ないということが指摘できよう。このことが単なる偶然によるものか、あるいは何らかの背景が存在するのかは不明であるが、意図的とも思える出土状況とも合わせて検討を要する。なお器種別の出土地点をみると、鉢類・壺類のほとんどが西区から、甕は均等に出土している。

当溝の東区西端部分は、遺構確認調査の北グリッドと重複する位置関係にあるが、この調査では『地表下約2.6mで、平面橢円形を呈すると思われる炭化物を多く含む炉状遺構』が検出されている。これは当溝の埋土とは様相が異なり、ここに前記のSK 303と同様の遺構が存在したのかもしれない。

S D 302~339

調査区北西部では、北東-南西方向の溝（S D 302~306）と、これに直交する溝（S D 307~316）があり、南西部では蛇行する溝（S D 317~326）がみられる。

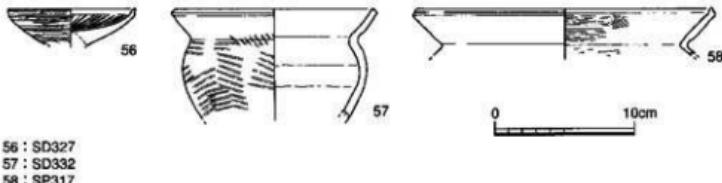
5 C 区に位置する S D 332は、ほぼ直角に屈曲している。また隣接する S D 333の両端にはピット（S P 317・318）が位置している。この状況から、これらの遺構は聚穴住居の残欠である可能性がある。また弧状を呈する S D 339も竪穴住居の壁溝かもしれない。

S D 327とS D 337は連続すると考えられる。各溝の法量等は表5にまとめた。

出土遺物のうち図化できたのはS D 327からの小型器台（56）、S D 332からのV様式系小型壺（57）である。56は庄内式期新相～布留式期古相に比定されるものである。

S D	地区	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺物
301	1 C ~ 6 B	23.00	180 ~ 260	36	V様式
302	2 B	2.48	27	10	
303	2 B ~ 3 A	4.98	37	11	
304	2 B ~ 3 A	3.47	27	8	
305	2 B ~ 2 C	2.50	23 ~ 47	18	
306	2 B	1.01	28	9	不明
307	2 B ~ 3 B	2.27	35	11	庄内
308	2 B ~ 3 B	5.13	28	8	V様式～庄内
309	2 B ~ 3 C	7.09	33	12	V様式
310	1 B ~ 2 B	1.29	17	8	
311	2 B	1.47	13	5	
312	1 B ~ 3 C	7.75	5.7 ~ 8.6	8	V様式～庄内
313	1 C	1.95	31	13	
314	1 C	1.75	14 ~ 24	9	
315	1 C ~ 2 D	4.58	24	8	
316	1 D ~ 2 D	3.23	25	8	
317	1 D ~ 2 C	2.27	62	13	
318	1 D ~ 1 E	6.62	30	13	
319	1 E ~ 2 C	11.00	26 ~ 65	15	
320	2 D	1.76	41	15	
321	2 D ~ 2 E	5.56	35	19	
322	2 E ~ 3 C	6.82	22 ~ 79	10	
323	2 D ~ 2 E	8.60	36	17	
324	2 E ~ 3 D	10.10	44	17	
325	2 E	2.58	39	13	
326	2 E ~ 3 D	6.05	38 ~ 64	18	
327	5 B	2.90	83	33	庄内新、(56)
328	5 B ~ 6 B	3.60	61	20	
329	5 C	1.44	31	8	
330	5 C ~ 6 B	1.37	35	7	
331	5 C	1.22	28	7	
332	5 C	1.96+1.45	35	7	V様式～庄内、(57)
333	5 D ~ 6 C	2.55	24	7	V様式
334	5 D ~ 6 D	1.80	18	6	
335	5 D ~ 5 E	5.48	40	12	庄内新
336	5 B ~ 5 C	1.99	51	24	
337	5 C ~ 5 D	5.15	53	6	V様式～庄内
338	5 D ~ 6 D	3.68	39	9	
339	6 D ~ 6 E	5.45	52	6	

表5 第3次面溝 (S D 301~339) 法量表



第16図 第3次面遺構出土遺物② (S = 1/4)

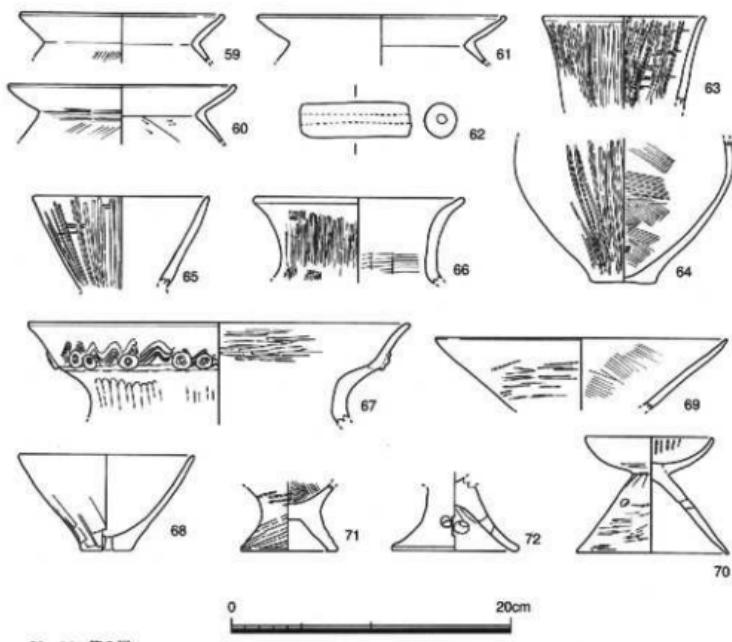
ピット (SP)

堅穴住居に伴うと考えられるもの以外は密度が低く、第2次面とは様相が異なるといえる。調査区の南西部、つまり西区の S D301 南側の蛇行する溝群 (S D317~326) 周辺では全くみられない。各ピットの法量等は表6にまとめた。

出土遺物は少量で、図化したのは S P317からの庄内甕 (58) 1点のみである。庄内式期新相に比定されよう。

S P	地区	平面形	法量	深さ	遺物
301	2 A	椭円形	47×41以上	13	
302	2 A	円 形	43×42	35	
303	2 A	円 形	44×43	16	
304	2 A	円 形	51×44	41	
305	2 B	円 形	51×46	29	
306	2 B	椭円形	45×54以上	27	
307	2 A	椭円形	51×43	24	
308	3 A	不 明	72×48以上	13	
309	3 B	椭円形	37×25	17	
310	2 B	椭円形	53×50	31	
311	2 B	不定形	72×71	12	
312	3 B	不定形	86×46	9	
313	5 B	円 形	17×16	9	
314	4 B	円 形	24×23	9	
315	4 B	椭円形	26×24以上	11	不明
316	4 B	円 形	17×16	9	
317	5 C	円 形	67×66	25	庄内 (58)
318	5 D	円 形	49×41	7	
319	5 D	円 形	61×59	12	
320	5 D	円 形	50×47	43	庄内
321	5 E	円 形	40×33	7	
322	5 E	円 形	54×53	10	
323	5 E	不 明	22×10以上	10	
324	4 E	椭円形	35×31	11	
325	4 E	円 形	47×46	21	
326	4 E	円 形	48×48	14	

表6 第3次面ピット (S P 301~326) 法量表 (cm)



59~64: 第5層
65~72: 第6層

第17図 第5・6層出土遺物 (S=1/4)

包含層出土遺物

第2次面を覆う第5層からは弥生時代後期末～古墳時代後期頃、第3次面を覆う第6層からは弥生時代後期末～古墳時代前期（布留式期古相）の土器が出土している。第5層の古墳時代後期のものは少ない。図化したものは第5層: 59~64、第6層: 65~72である。

63は長頸壺口縁部で、底体部の64は色調・胎土等からこれと同一個体と思われる。複合口縁壺（67）は、口縁部外面に櫛描波状文のち竹管円形浮文を施す。

第3章 出土遺物観察表

遺物番号 国際登録番号	器種	出土地點	法長(cm) (厘米値)	口径 直徑	色調 外 内	胎 土	構成	被膜・附着等の特徴	備考 欄
1 斧 頭		SD 202	(14.2)	茶褐色	密 0.5~1.5mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナダ。体部ナダ。	反転
2 斧 頭		SD 215	(16.1)	褐褐色	密 0.5~2.0mm の砂粒含む	良好		口縁部外周ヨコナダ、内面ナダ。体部外周タタキ。	1/4 反転
3 七脚器 頭		SD 216	(15.0)	淡赤褐色	密 0.5~4.0mm の砂粒含む	やや 不良		口縁部外周ヨコナダ、内面ナダ。	極小 反転
4 斧 頭		SD 224	(12.4)	灰褐色	密 0.5~3.0mm の砂粒含む	良好		口縁部外周~底部ヨコナダ、内面ナダ。	反転
5 斧 頭		SK 301	(16.3) 18.4	深茶色	やや粗	良好		腹部ナダ。口縁部~底部外周ヨコナダ。底部外 面ナダ。体部~底部内面ナダ。	一部反転
7 手捺形土器		底片	4.4					体部最大径(17.4)	2/3
6 土師器		SK 302	(14.7)	灰褐色	密 0.5~2.0mm の砂粒含む	良好		口縁部外周~底部ヨコナダ、内面ハケ。肩部外 周タタキ後ハケ、内面ヘラケズリ。外周漆付着。	反転
7 更		SK 302	(18.4)	黑褐色	密 0.5~2.0mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナダ。肩部外周タタキ後ハケ、内面 ヘラケズリ。外周漆付着。	極小
7 土師器 更		SK 302	(17.4)	黑褐色	密 0.5~2.0mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナダ。肩部外周タタキ後ハケ、内面 ヘラケズリ。外周漆付着。	反転
8 土師器 体		SK 303	(21.8)	淡灰褐色	密 0.5mm以下の 淡系褐色	良好		内外面ヨコ後タタキ方向ヘラミガキ。	反転
9 土師器		SK 304	(11.6) 6.2	淡灰褐色	密 0.5~1.5mm の砂粒含む	良好		体部ナダ。口縁部ヨコナダ後。内外面ヘラミガ キ。底部外周に蠟膜斑。	一部反転
7 鉢		SK 304	(15.5)	暗茶色	密	良好			1/2
10 土師器		SK 304	(13.4)	暗茶色	密 0.5~1.0mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナダ。肩部外周タタキ後ハケ。底 部外周ハケ後底周外周ナダ。内面ヘラケズリ。	反転
7 更		体部解	(15.5)						1/2
11 土師器		SK 304	16.4	密	良好			口縁部ヨコナダ。底外部外面上半タタキ後ハ ケ、下平ナダ。内面ヘラケズリ。外周漆付着。	一部反転
7 更		SK 304	23.6	褐褐色	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好			4/5
7 土 生		体部解	21.1						
12 土 生		SD 301	(16.2)	密 褐褐色	0.5~2.0mm の砂粒含む	やや 不良		口縁部ナダ。体部外周タタキ。内面ナダ。	反転
13 土 生		SD 301	16.4	淡灰褐色	やや粗	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ、内面ナダ。	一部反転
7 更		SD 301	(15.7)	灰褐色	やや粗	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ、内面ナダ。 口縁部~底部外周漆付着。	反転
7 更		SD 301	(16.4)						1/2
15 土 生		SD 301	17.9	淡褐色	やや粗	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ、内面ハケ。	一部反転
8 更		SD 301	(20.1)						1/2
16 土 生		SD 301	(17.8)	暗茶色	やや粗	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ、内面ナダ。	反転
8 更		SD 301	(15.2)	淡褐灰色	0.5~2.0mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ後、口縁部~ 体部外周ハケ。体部内面ナダ。	1/4
17 土 生		SD 301	(14.8)	淡乳茶色	密	良好		口縁部ヨコナダ。体部外周タタキ後、肩部張子 ナダ。体部内面ナダ。	反転
8 更		SD 301							1/6

遺物番号 国故番号	品種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 底面	色調 外 内	胎土	地紋	技術・形態等の特徴	参考 既存 存
19	茶生		15.3		暗赤色	密	良好	口縁部ヨコナギ。体部外壁タキ、内面ハケ。 外壁横付管。	一部反転
8	灰	SD301	(16.0)	灰發色	密	良好		山縁部ヨコナギ。体部外壁タキ強ヨコナギ。 作筋内面ナゲ。	2/3
20	茶生	SD301	(15.9)	茶發色	0.5~1.5mm の砂粒含む	良好		口縁部外面~腹部ヨコナギ。肩部外壁タキ、 内面ナゲ。	反転
21	茶 裏	SD301	(15.9)	茶發色	0.5~2.5mm の砂粒含む	良好		口縁部外面~腹部ヨコナギ。肩部外壁タキ、 内面ナゲ。	反転
22	灰生		18.7					口縁部ヨコナギ。体部外壁タキ、内面板ナゲ。	一部反転
8	裏	SD301	体部径 21.1	淡灰茶色	密	良好		外壁横付管。	U1B1/2
23	茶生 裏	SD301	底径 4.6 体部径(15.0)	暗灰褐色 の砂粒含む	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好		体部外面タキ、内面ハケ。底部外壁ナゲ。	一部反転
24	灰生	SD301	底径 9.9	灰灰茶色 の砂粒含む	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好		白腰部外面タキ、内面ナゲ。底部内面ナゲ。	一部反転
8	台付裏		(14.3)					口縁部~休部外壁ヨコナギ。底部外壁ナゲ、内 面ハケ。手捻紹土器である可能性がある。	1/3
25	灰中 鉢	SD301	11.4 底径 4.5	黄茶色	密	良好			一部反転
8	鉢	SD301	16.0 底径 4.5	灰乳茶色	密	良好		外壁~口縁部内面ヘラミガキ。底部外壁ユビオ サエ。	1/3
26	灰牛		(13.3)						は未定形
8	鉢	SD301	11.0 底径 4.6	茶褐色 の砂粒含む	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好		口縁部~休部外壁ヘラミガキ、内面ハケ。底部 ナゲ。	は未定形
28	灰牛	SD301	(13.4)	茶褐色	密	良好		内面ハケ。口縁部外壁ナゲ。体部外壁下位に工 具痕。底部外壁ユビオサエ。底面ナゲ。	一部反転
9	鉢	SD301	7.7 底径 4.1	0.5~1.0mm の砂粒含む	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好			1/2
29	灰生 鉢	SD301	(11.8)	淡灰茶色 の砂粒含む	0.5~1.0mm の砂粒含む	良好		外壁ナゲ。内面ハケ。口縁部外壁黒斑。	反転
30	休中 台付休 灰牛	SD301	(15.6) 底径 8.8	乳茶色	密	良好		口縁部ヨコナギ。休部ヘラミガキ。脚部外 面ヘラミガキ、内面しりり目。脚部ヨコナギ。 脚部四方孔。	一部反転
9	台付休 灰牛	SD301	12.9 底径 6.1	暗灰茶色	密	良好		内面ナゲ。	3/4
9	鉢		3.9						2/3
32	休牛	SD301	27.8 底径 4.4	13.8 乳茶色	密	良好		口縁部外面~腹部ヨコナギ。内面ヘラミガキ。 休部ヘラミガキで、内面ハケ残る。黒斑あり。	4/5
9	鉢	SD301	21.3 底径 10.8	14.4 暗灰茶色	密	良好		口縁部外面~腹部ヨコナギ。内面ヘラミガキ。 休部ヘラミガキで、内面ハケ残る。黒斑あり。	一部反転
34	休牛 台付休	SD301	(26.0)	14.5 乳茶色	やや密	良好		休部外壁ヘラミガキ。脚部外壁ヘラミガキ、内 面ハケで、脚部ヨコナギ。脚部四方孔。	一部反転
9	台付休	SD301	11.7	0.5~1.5mm の砂粒含む	0.5~1.5mm の砂粒含む	良好			2/3
35	休牛 台付休	SD301	(17.8) 底径 11.0	15.1 淡灰茶色	0.5~1.5mm の砂粒含む	良好		口縁部ヨコナギ。体部ハケ。脚部外壁ナゲ、内 面上部しりり目、下皮ノク。脚部ヨコナギ。脚 部四方孔。	一部反転
9	台付休	SD301	(23.0)	14.1 淡茶色	密	良好		脚部ヘラミガキ。脚部外壁ナゲ。内面下位ナ ゲ、下位ハケ。脚部ヨコナギ。脚部四方孔。	は未定形
9	高杯	SD301	12.8						2/3

遺物番号 国庫番号	器種	出土地点	直進(cm) (復元値)	口径 深さ	色調 外 内	地土	構成	技法・形態等の特徴	備考 残存
37	弥生	SD 301	(23.9)	基盤部 黄褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	外縁ハラミガキ	反転
38	西杯	SD 301	(12.8)	素灰色 暗灰茶色	密 0.5~1.0mm の砂粒含む	良好	好	口縁部外周上部帶底直線文、下位ハケ、内面ナ ダ。	口縁1/8 反転
9	東杯	SD 301		茶褐色	密 0.5~1.5mm	良好	好	脚部外周ハラミガキ、内面ナダ。脚部四方孔。	1/6
39	弥生	SD 301		茶褐色	密 0.5~1.5mm の砂粒含む	良好	好	脚部外周ハラミガキ、内面ナダ。脚部四方孔。	脚部ほぼ 完形
40	弥生	底径	13.1	茶褐色	密 0.5~1.5mm	良好	好	脚部外周ハラミガキ、内面ナダ。脚部ヨコナデ。一部反転	一部反転
9	脚部	SD 301	底径 (7.0)	茶褐色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	脚部外周ハケ。片面ナダ。	脚部1/3
41	弥生	SD 301	底径 (8.6)	浅乳茶色 淡灰褐色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	脚部外周ハケ。片面ナダ。	一部反転
9	脚部	SD 301	底径 (3.8)	茶褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	外周ハラミガキ、内面ナダ。	脚部1/4
43	弥生	SD 301	(11.4)	乳茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部ヨコナデ。口縁部ハケ後外周上位ナダ。 体部ハケ後内底上位ナダ。	一部反転
10	長颈型		22.3	乳茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	体部直大坪(13.6)	2/3
44	弥生	SD 301	底径 (9.0)	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部外周ハラミガキ、瓶部~内面ヨコナデ、内面下 位ナダ。	反転
	短颈型			乳茶色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部外周ハラミガキ、内面ナダ。	口縁1/4
45	弥生	SD 301	(12.0)	乳茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部外周ハケ、瓶部~内面ヨコナデ、内面下 位ナダ。	反転
	短颈型	SD 301	(16.8)	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部外周~瓶部ヨコナデ、内面ハラミガキ。	口縁1/4
	短颈型	SD 301	(11.4)	乳茶色 淡灰褐色	密 0.5~1.0mm の砂粒含む	良好	好	体部外周ハラミガキ、内面ナダ。	極小
47	弥生	SD 301	(13.1)	乳茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部ヨコナデ。体部外周上位ナダ、下位ハケ、 内面上位ヨビオサエ、下位ナダ。体部外墨斑。	一部反転
10	短颈型	SD 301	14.7	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	内面下位ナダ。	1/2
48	弥生	SD 301	14.9	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	外周ハラミガキ、内面ナダ。	一部反転
	短颈型	SD 301	(16.8)	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	外周ハラミガキ、内面ナダ。	1/3
49	弥生	SD 301	(16.8)	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部ハラミガキ。	反転
	広口壺		(13.6)	乳茶色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部ヨコナデで、外周下位ハケ。	口縁1/8
50	弥生	SD 301	(15.7)	乳茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部ヨコナデ。口縁部外周板ナダ、内面ハ ケ。肩部外周取ナダ後ハラミガキ、内面ナダ。	反転
	広口壺	SD 301	(26.9)	淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部落拂痕底深文後竹管円形浮文、口縁部ヨ コナデ。	口縁1/3
10	広口壺	SD 301		淡灰褐色	密 0.5~1.0mm	良好	好	口縁部竹管円形浮文。(1腰重下部外周 拂痕底文後竹管円形浮文。	極小
03	弥生	SD 301	(16.3)	淡茶色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	脚部ハラミガキで、外周ハケ残る。	反転
10	複合口縁型	SD 301		淡茶色	やや粗 0.5~1.0mm	良好	好	脚部ハラミガキで、外周ハケ残る。	極小
54	弥生	SD 301	底径 3.2	黃茶色	密 0.5~1.0mm	良好	好	底部定在	底部定在

植物番号 固有番号	種 類	生土地点	高さ(cm) (原形態)	口径 基準	色調 外 内	胎 土	熟成	性状・形態等の特徴	参考 資料
55 アサガホ	SD301	底様 5.9	暗乳茶色	やや粗	良好	体部ヘラミガキ。底部外側ナダ。		一部反転	一葉反転
56 土解器	SD327	(9.2)	乳茶色	密	良好	軸部外側ヘラミガキで下位にヘラケズり残る。 内面ヘラミガキ。口端部内面ヨコナダ。		一部反転	底部元存
57 アサガホ	SD332	(14.7)	暗乳茶色	やや粗	良好	口端部ヨコナダ。本部外側ヨコナダ、内面ナダ。		軸部1/2	反転
58 アサガホ	SD317	(21.7)	更	0.5~2.0mm の砂粒含む	良好	口端部外側~瘤部ヨコナダ。内面ハケ。瘤部外 面ヨコナダ。体部内面ヘラケズり。		反転	葉小
59 アサガホ	第5層 西 区	(14.8)	灰褐色	密	良好	口端部ヨコナダ。側部外側ハケ、内面ナダ。		反転	山野1/4
60 土解器	第5層 西 区	(16.5)	暗乳茶色	密	良好	口端部ヨコナダ。頭部外側ハケ。肩部外側タキ キ、内面ヘラケズり。		反転	葉小
61 アサガホ	第5層 西 区	(18.0)	暗茶色	密	良好	口端部ヨコナダ。側部内面ナダ。		反転	山野1/8
62 アサガホ	第5層 西 区	表辯 8.0 裏辯 2.5	暗乳茶色 0.5~1.0mm の砂粒含む	密	良好	ナダ:			
63 アサガホ	西 区	(11.8)	暗褐色	密	0.5~2.0mm の砂粒含む	良好	口端部外側ハケ後ヘラミガキ。内面ヨコタキ のヘラミガキ。		反転
64 アサガホ	第5層 西 区	体部最大径 (15.8)	暗乳茶色 0.5~2.0mm の砂粒含む	密	良好	64と同一軸体 体部外側ヘラミガキ、内面ハケ。		一部反転	1/5
65 土解器	東 区	(12.8)	暗褐色 0.5~2.0mm の砂粒含む	密	やや 不良	63と同一軸体 口端部外側ヨコタキのヘラミガキ。		一部反転 口端4付 完存	1/5
66 アサガホ	第6層 東 区	(15.3)	灰茶色	やや粗	良好	山野薄部~内面上位ヨコナダ。口端部外側ハケ ヨカキ、内面下位ハケ。		反転	山野1/6
67 土解器	東 区	(27.6)	乳茶色	やや粗	良好	口端部外側枝状突起箇円形浮文、内面ヘラ ミガキ。根部外側ヘラミガキ。内面ナダ。		反転	山野1/8
68 アサガホ	第6層 東 区	(12.6)	暗茶褐色 0.5~2.5mm の砂粒含む	密	良好	外表面ナダ、内面ナダ。底面ナダ。底部に焼成 前の摩耗。		一部反転	
69 土解器	東 区	(21.0)	淡乳茶色 0.5~1.0mm の砂粒含む	密	良好	口端部外側ヘラミガキ、内面ハケ後ナダ。		反転	山野1/4
70 土解器	東 区	(9.1)	乳茶色	密	良好	外部ヘラミガキ。軸部外側ヘラミガキ、内面ナ ダ。脚部二方孔。		一部反転	
71 アサガホ	第6層 東 区	8.3 (10.9)	乳茶色	密	良好	体部外側タキキ、内面ハケ。軸部外側タキキ、 内面ナダ。		一部反転	山野1/2
72 アサガホ	第6層 東 区	7.0	茶褐色	密	良好	脚部ナダ。脚部ヨコナダ。脚部四方孔。		一部反転	
73 アサガホ	第6層 東 区	(9.2)	茶褐色 0.5~1.0mm の砂粒含む	密	良好			脚部1/2	

第4章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から近世の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構は非常に密度の高いものであり、調査を行った2面中に少なくとも3時期の遺構の切り合い関係が確認できる。

弥生時代後期末では、溝S D301から多量の土器が出土しており、完形に近いものも含まれている。のことからも、この時期の居住域が当調査区周辺に存在することが予想されよう。この北側で検出された同時期のS K301を竪穴住居と考えるならば、S D301の北側に当該期の居住域が広がる可能性がある。なおS D301の遺物出土状況は、意図的とも捉えられるもので検討を要する。また当調査地の南西約350mで確認されている集落域との関係が注目される。ちなみに北西約600mの久宝寺遺跡北地区調査地は、当該期の集落域からははずれないと考えられている。^{註5}

古墳時代前期では竪穴住居S I 301が検出され、当地が庄内式期新相の居住域であることが確認できた。第2・3次面で検出された溝群は耕作溝と考えられるものである。第2次面の時期については古墳時代後期頃の可能性があるものの、明確にはしえなかった。西約1kmの久宝寺遺跡南地区において検出された庄内式期の『多數の交錯する溝』は『畑状遺構』として捉えられている。今回検出の溝群にも共通する点があり、同様の性格の遺構かもしれない。また第1次面では曲物井戸S E102や近世井戸S E101が検出されており、古墳時代後期～中世以降は、当地は生産域となっていた可能性が高い。^{註6}

なお今回の調査地は、中世末以降発展する久宝寺寺内町の東端に位置し、その成立段階における環濠部分に想定される地点であったが、これに関する遺構等の検出はなかった。^{註7}

註

- 註1 金光正裕・他 1987『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター
- 註2 調査 1991『6.久宝寺遺跡(90-11)の調査』『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市教育委員会
- 註3 関沢 紘 1988『23.久宝寺遺跡(第2次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』財團法人八尾市文化財調査研究会
- 註4 西村公助 1989『6.久宝寺遺跡(第3次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』財團法人八尾市文化財調査研究会
- 註5 本齊徳城『II久宝寺遺跡(第17次調査)』
- 註6 清 廉 1992『I.久宝寺遺跡(90-566)の調査』『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会
- 註7 前掲書 註2
- 註8 前掲書 註5・6
- 註9 前掲書 註1
- 註10 松岡良豊・他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター
- 註11 八尾市教育委員会『寺内町の基本計画に関する研究』昭和63年

図 版



西区 第1次面（北から）



東区 第1次面（北から）

図版2



S E 102曲物（上が東）



S E 102断割り（西から）



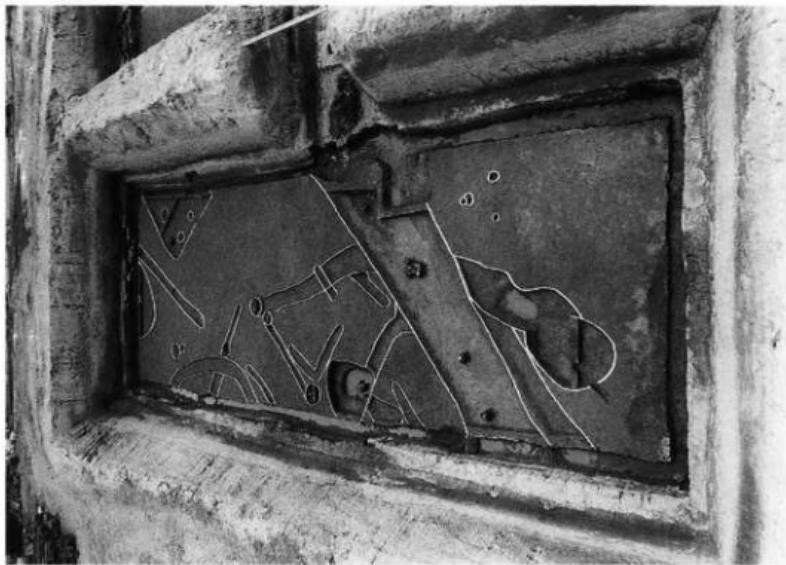
西区 第2次面（西から）



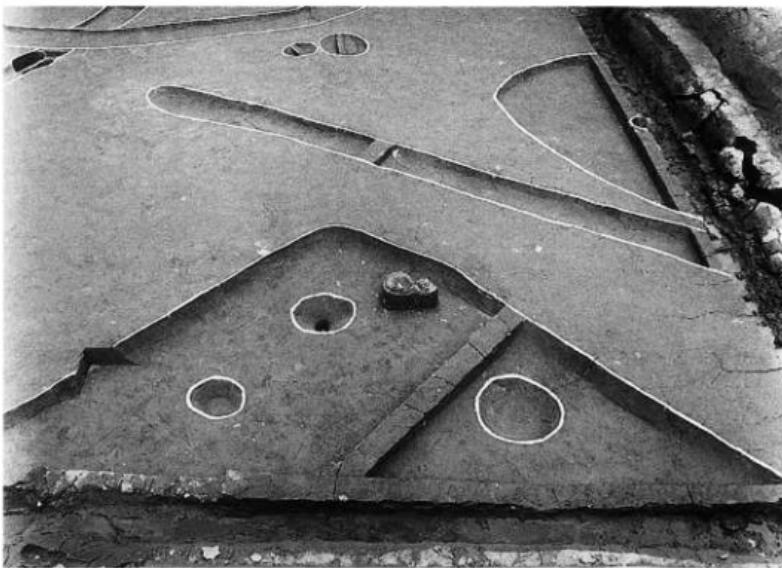
東区 第2次面（北から）



西区 第3次面（北から）



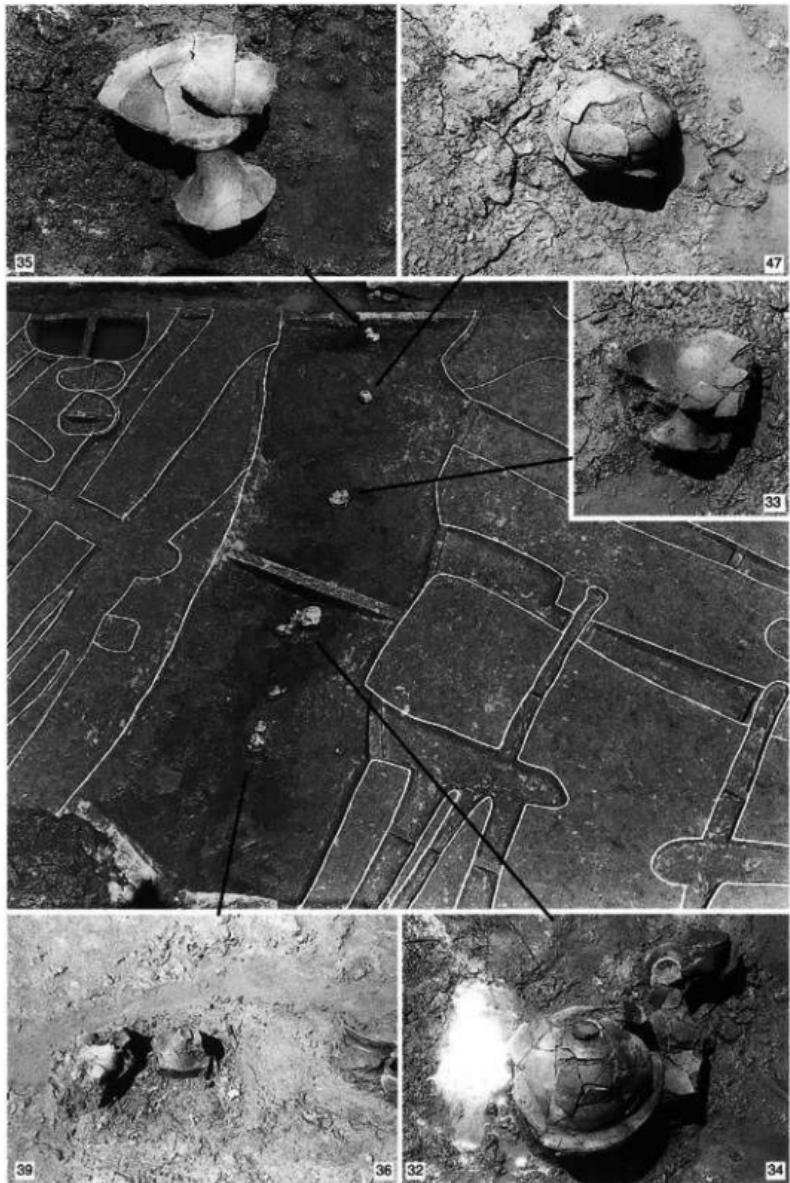
東区 第3次面（北から）



S I 301 (西から)



S D 301 東半 (北東から)



S D 301西半（西から）



S K301 (5), S K302 (6), S K304 (9~11), S D301 (14)



15



19



17



22



24



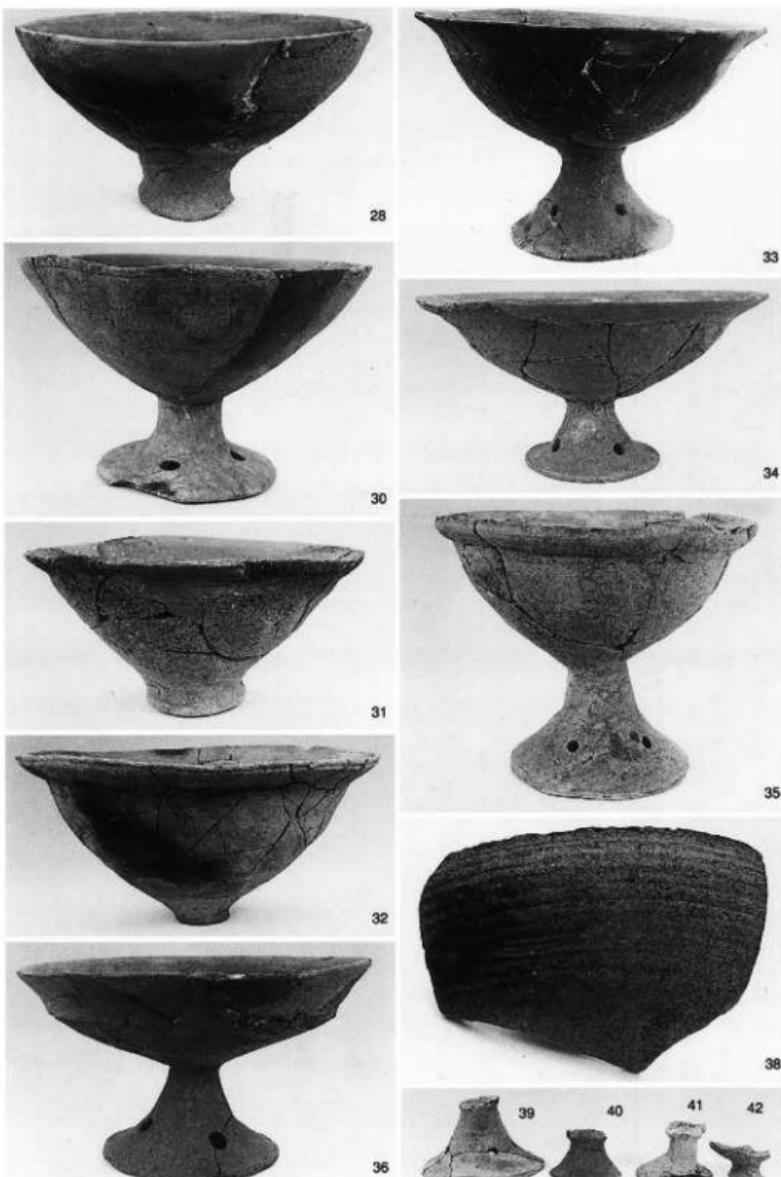
26



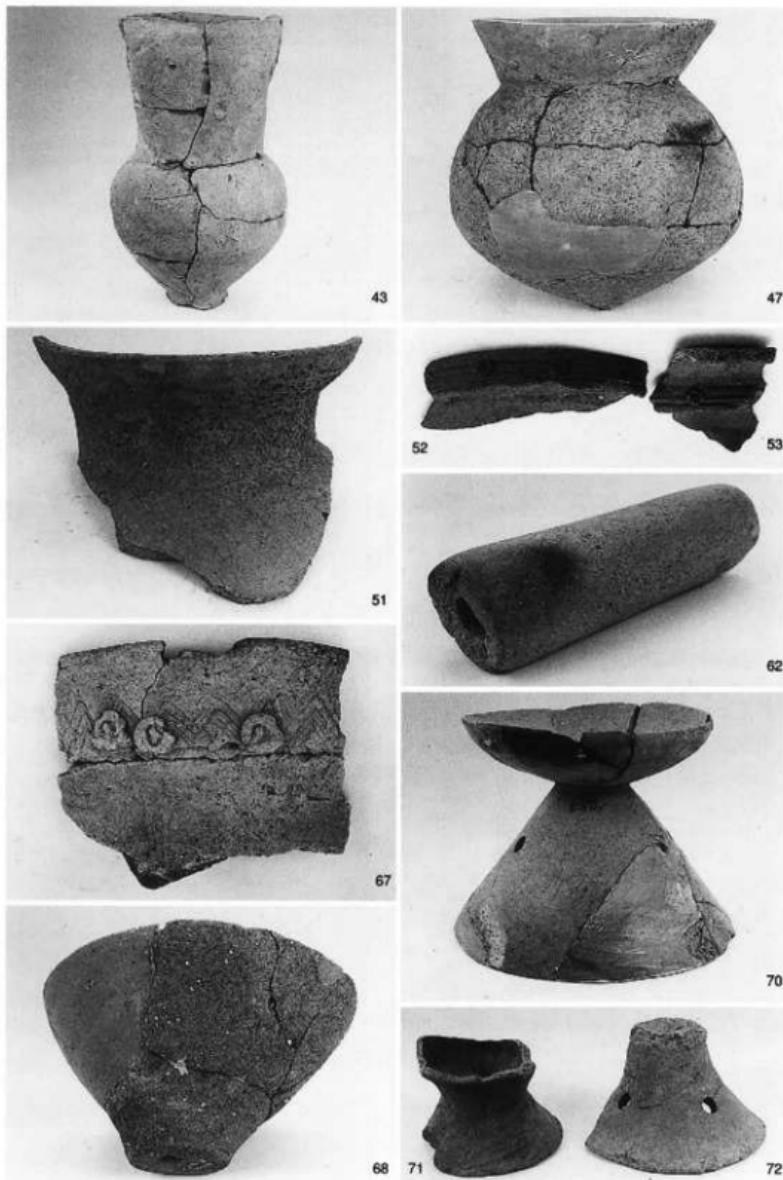
25



27



S D 301



S D 301 (43~53)、第5層 (62)、第6層 (67~72)

II 久宝寺遺跡第17次調査 (KH93-17)

例　　言

1. 本書は、八尾市西久宝寺1丁目40番地で実施した遊戯場および駐車場建設工事に伴なう発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第17次調査（KH 93-17）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋44号 平成5年7月12日付）に基づき、坂本興産株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成5年7月19日～平成5年7月30日（実働10日間）にかけて岡田清一を調査担当者として実施した。調査面積は、約142m²を測る。なお、調査においては瀬尾泰大・朝田要・大見康裕が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－内山千栄子・吉田由美恵、図面トレース－北原清子、遺物写真撮影－岡田が行なった。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行なった。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	29
第2章 調査概要.....	30
第1節 調査の方法と経過.....	30
第2節 基本層序.....	31
第3節 検出遺構と出土遺物.....	33
第4節 出土遺物観察表.....	54
第3章 まとめ.....	60

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	29
第2図 調査区設定図	31
第3図 基本層序模式図	32
第4図 第1調査区 中世井戸掘方東壁面図	34
第5図 第1調査区 中世井戸埋土内出土遺物実測図	34
第6図 第1調査区 檜山遺構平面図	35
第7図 第1調査区 SK-101・102、SD-101遺構断面図	36
第8図 第1調査区 SK-201遺構断面図	36
第9図 第1調査区 SK-201出土遺物実測図	37
第10図 第1調査区 第8層内出土遺物実測図	38
第11図 第1調査区 第9層内出土遺物実測図	39
第12図 第2調査区 檜山遺構平面図〈古墳時代前期〉	40
第13図 第2調査区 SK-103遺構断面図	41
第14図 第2調査区 SK-103出土遺物（土器）実測図	42
第15図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図I	44
第16図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図II	45
第17図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図III	46
第18図 第2調査区 SK-104～106、SP-102・103遺構断面図	47
第19図 第2調査区 SK-104出土遺物実測図	47
第20図 第2調査区 SK-105出土遺物実測図	48
第21図 第2調査区 SK-106出土遺物実測図	48
第22図 第2調査区 SP-101遺構断面実測図（左）・柱根実測図（右）	49
第23図 第2調査区 第8層内出土遺物実測図	50
第24図 第2調査区 第9層内出土遺物実測図I	51
第25図 第2調査区 第9層内出土遺物実測図II	52

写 真 目 次

写真1 第1調査区 中世井戸東壁面状況（西から）	34
写真2 第2調査区 SK-103遺構断面（東から）	40
写真3 第2調査区 SK-103木製品出土状況（南から）	43
写真4 第2調査区 発掘風景（南東から）	53

図 版 目 次

図版一 第1調査区 第1遺構面（北から）	
第1調査区 第1遺構面 SK-101〈下〉、SK-102〈上〉（北から）	
図版二 第1調査区 第1遺構面 SD-101（北から）	
第1調査区 第2遺構面（北から）	
図版三 第2調査区 古墳時代前期遺構面（西から）	
第2調査区 SK-103内木製品出土状況（北から）	
図版四 第1調査区 中世井戸、SK-201出土遺物	
図版五 第1調査区 SK-201、第8層、第9層出土遺物	
図版六 第1調査区 第9層、第2調査区 SK-103出土遺物	
図版七 第2調査区 SK-103、SK-105出土遺物	
図版八 第2調査区 SK-105、SK-106、第8層、第9層出土遺物	
図版九 第2調査区 第9層出土遺物	
図版一〇 第2調査区 第9層出土遺物	
図版一一 第2調査区 第9層出土遺物	
図版一二 第1調査区 中世井戸、第2調査区 SK-103出土遺物	
図版一二 第2調査区 SK-103出土遺物	
図版一四 第2調査区 SK-103、SP-101出土遺物	
第1調査区 南壁（東から）、第2調査区 西壁（北から）	
第2調査区 西柴側下層状況（東から）	

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の低位沖積地にあたる縄文時代晚期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。遺跡の推定範囲は、東西約1.8km・南北約1.3kmを測る。現在の行政区画では八尾市の西部に位置し、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井・渋川町・跡部北の町がその範囲にあたる。周辺に隣接する遺跡では、南に亀井遺跡・跡部遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町・成法寺遺跡があり、八尾市域外では、北に東大阪市の弥刀遺跡、西に大阪市の加美遺跡がある。

当遺跡は、昭和57年から58年にかけて大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって実施された近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査^(注1)において、縄文時代晚期の自然河川、弥生時代中期～後期の掘立柱建物・方形周溝墓、古墳時代前期の「準構造船」、奈良



第1図 調査地周辺図

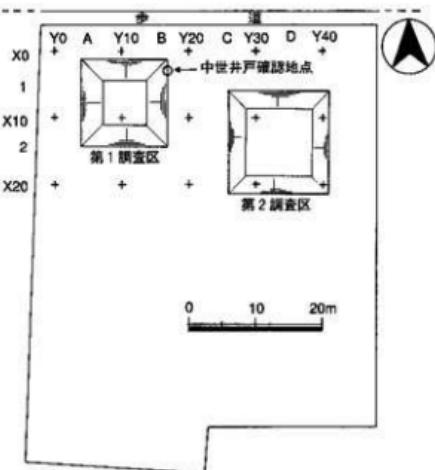
～平安時代の水田遺構等々多岐にわたる遺構・遺物が検出された。なかでも3世紀末～4世紀の古墳時代前期に比定される準構造船の検出は、当該期における朝鮮半島との交流を考えるうえで貴重な資料として特筆すべきである。平成3年度に当調査研究会が北龜井3丁目のシャープ株式会社敷地内で実施した工場建設工事に伴なう第9次調査^(注2)では、古墳時代初頭の堅穴住居から小型仿製鏡が出土し、さらに古墳時代前期に比定される前方後円墳が検出された。前方後円墳については墳丘長約35mを測る付近一帯では最大規模の古墳であり、在地の首長クラスの墳墓と考えられる。平成6年度に当調査研究会が神武町143他で実施した配達センター建設工事に伴なう第18次調査^(注3)では、古墳時代前期初頭（3世紀後半）の所産と考えられる朝鮮半島系の土器2点が出土した。この2点の土器は胎土分析から、当地に移住して来た渡来人が在地の上を用いて「軟質陶耳壺」・「炉形土器」を模倣したものと判明、これまでに日本国内においては出土例のないもので前述の準構造船同様、考古学史上に新たな知見を加えることとなった。また、西接する大阪市側の加美遺跡では、(財)大阪市文化財協会が昭和59年度に実施した加美東3丁目の第1次調査^(注4)で、古墳時代初頭～前期（庄内式期～布留式期）に比定される46基の方形周溝墓が検出されている。周知のように本来久宝寺遺跡西部との一体化が考えられることから今後付近の調査を踏まえて、両遺跡間の有機的関係に興味がもたれる。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は遊戯場および駐車場建設工事に伴なうもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第17次調査にあたる。今回調査対象となった地点は、市教委の遺構確認調査の結果、敷地内北部の建物基礎工事部分にある東西2箇所である。各調査区の規模は、西側の第1調査区が $6.5\text{m} \times 6.5\text{m}$ 、東側の第2調査区が $10\text{m} \times 10\text{m}$ の総面積約 142m^2 を測る。なお、盛土・擾乱部分にある表土の悪質条件の為、現地表面での掘削規模を第1調査区では $13\text{m} \times 13\text{m}$ ・第2調査区では $15\text{m} \times 15\text{m}$ とし、今回の調査対象となる現地表下 2.0m 前後の古墳時代前期の遺物を含む堆積層まで法（のり）面をつけて掘削することになった。地区割りについては、敷地内北西部に任意の基準点を設定し、10m区画で南北方向は算用数字（北から1・2）、東西方向はアルファベット（西からA～D）で表示、地区名を1 A区～2 D区と呼称した。掘削は、八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を参考に現地表（T.P.+8.4m前後）から $0.4\text{m} \sim 0.9\text{m}$ の現代の整地層・旧耕土・床土を重機により排除した後、以下 $1.0\sim 1.5\text{m}$ の中・近世にあたる土層を遺構・遺物の確認を行いながら重機と人力を併用して掘

削、以下 0.7 m 前後の弥生時代後期～古墳時代前期の土層については人力のみで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は両地区とも調査区中央部において、1辺 2 m 四方・深さ 1 m 前後の規模で下層確認調査を実施した。調査の結果、第1調査区では平安時代後期頃の井戸 1基を東壁面内で確認、古墳時代前期（布留式古柏）の土坑 2基（SK-101・SK-102）、溝 1条（SD-101）・弥生時代後期末の土坑 1基（SK-201）、第2調査区では古墳時代前期（布留式古柏）の土坑 4基（SK-103～SK-106）、柱穴 1個（SP-101）・小穴 2個（SP-102・SP-103）を検出した。



第2図 調査区設定図

第2節 基本層序

調査区内でみる限りにおいて、2調査区とも中世以降現代までの堆積層がほぼフラットな状況を示すことから、その時間について比較的安定した土地条件であったことが推測される。また、第1調査区では標高 7.0 m 前後で平安時代末頃の河川の氾濫を示唆する砂層の堆積がみられたが、第2調査区では近接しているがらもそれと対応する堆積層はみられなかった。下層確認で検出した第11層の厚い砂の堆積層については、周辺における調査資料から弥生時代中期～後期前半頃の埋没河川と考えられる。以下、両地区内で普遍的に検出できた12層について列記する。

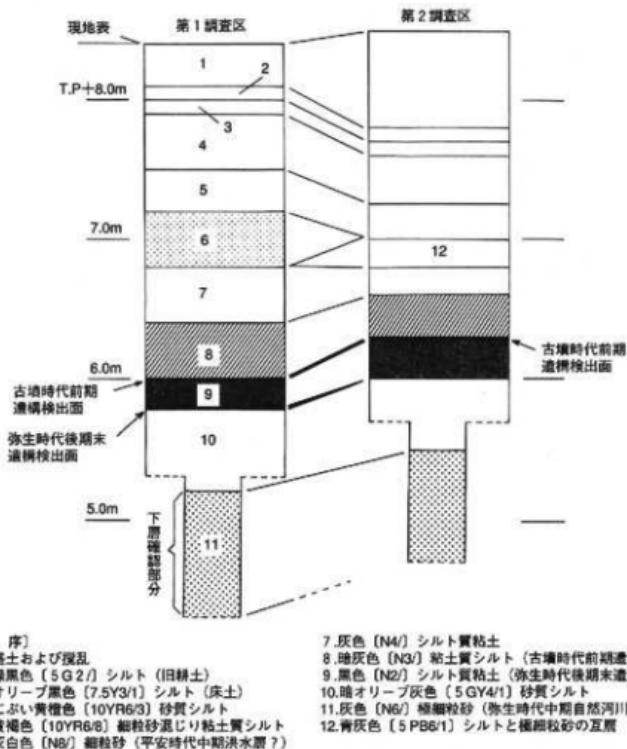
第1層：盛土および搅乱（層厚 30～70 cm）。現代の造成に伴なう整地層である。

第2層：緑黒色 [5G 2/] シルト（層厚 10 cm 前後）。旧耕土にあたる。

第3層：オリーブ黒色 [7.5Y 3/1] シルト（層厚 10 cm 前後）。床土にあたる。

第4層：にぶい黄褐色 [10YR 6/3] 砂質シルト（層厚 40 cm 前後）。中世の土師器および瓦器の破片を少量含む。

第5層：黄褐色 [10YR 6/8] 細粒砂混じり粘土質シルト（層厚 30 cm 前後）。平安時代後期に比定される土師器・瓦器を含む。第1調査区北東部の東壁面で本層上面から



第3図 基本層序模式図

切り込まれる井戸を1基確認した。埋土内の土器から平安時代後期頃に廃絶したものと思われるが、今回の調査では面的に遺構を捉えることはできなかった。

第6層：灰白色 [N8/1] 細粒砂（層厚20～40cm）。本層内の土器片および層位関係から平安時代中期頃に当地を襲った河川の洪水層と考えられる。本層からの湧水は著しい。既述したように第2調査区では存在しない。

第7層：灰色 [N4/1] シルト質粘土（層厚20～40cm）。今回の調査では湧水を含む上下層の土壤の悪条件から面的に捉えることができなかつたが、本層上部にみられる畦畔らしき起伏や人の足跡から、第1調査区の第6層を勘案すれば平安時代中期頃に河川の洪水によって埋没した水田耕土の可能性が高い。

第8層：暗灰色 [N3/] 粘土質シルト（層厚30～40cm）。弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物を含む。

第9層：黒色 [N2/] シルト質粘土（層厚20cm前後）。弥生時代後期末の遺物を含む。本層上面が古墳時代前期（布留式古棺）の遺構検出面になる。標高は第1調査区がT.P.+6.0m前後、第2調査区がT.P.+6.3m前後を測る。

第10層：暗オリーブ灰色 [5GY 4/1] 砂質シルト（層厚20～30cm）。第1調査区では本層上面が弥生時代後期末の遺構検出面になる。標高はT.P.+5.8m前後を測る。

第11層：灰色 [N6/] 極細粒砂（層厚100cm以上）。下層確認調査で摘出した堆積層である。部分的にシルト質のラミナがみられ、若干の植物遺体が混入する。層内に遺物はみられなかつたが、周辺における調査結果から弥生時代中期～後期前半頃の埋没河川と考えられる。湧水が著しい。

第12層：青灰色 [5PB 6/1] シルトと極細粒砂の互層（層厚20cm前後）。既述した第1調査区第6層の平安時代中期頃の河川の洪水層に起因する堆積層ではないかと思われる。第1調査区内にはみられない。

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1調査区〉

〔平安時代後期〕

井戸側に曲物を使用した井戸で、調査区北東部の東塙面で確認した（※地点については第2図参照）。壁面で確認できた規模については、掘方上面径0.82m・深さ1.1m前後を測る。埋土は上から第1層灰褐色 [5YR 4/2] 蕎麦じり砂質シルト・第2層黒褐色 [5YR 3/1] シルト・第3層青灰色 [10BG 6/1] シルト質粘土の3層に分層できる。井戸側となる曲物は、最深部で1段確認できた。遺物は第3層内から平安時代後期頃の所産とみられる土師器・瓦器が出上した。そのなかで岡化できたものは、土師器皿2点（1・2）・瓦器碗5点（3～7）・曲物底板（8・9）の9点である。（1）の土師器皿は扁平な底部からやや内輪気味に伸びる口縁部が付く。（2）の深みのある中皿は、胎土色調が淡い乳灰色を呈する。瓦器碗は（4・7）の外側のヘラミガキが体部上半にみられるものや見込み部の格子状ヘラミガキがみられるもの（6）、すべての高台の断面が三角形を呈し、しっかりしている等の特徴から尾上編年 (es) のII-1期頃に比定されよう。（9）の曲物底板は片半部のみでその一端には、もう一方の底板を繋ぎ合わせていたことを示す桟皮紐と紐孔が確認できた。蒸器の一部としても転用されたものであろうか。法量は厚さ0.8cm・全体の推定復原径34cm前後を測る。

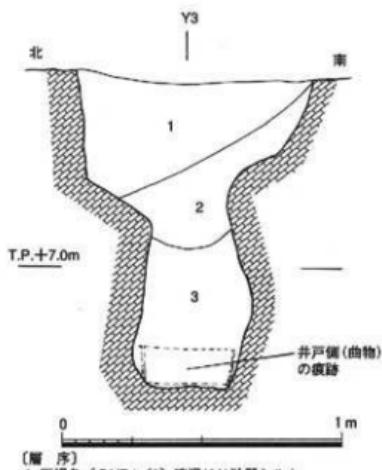
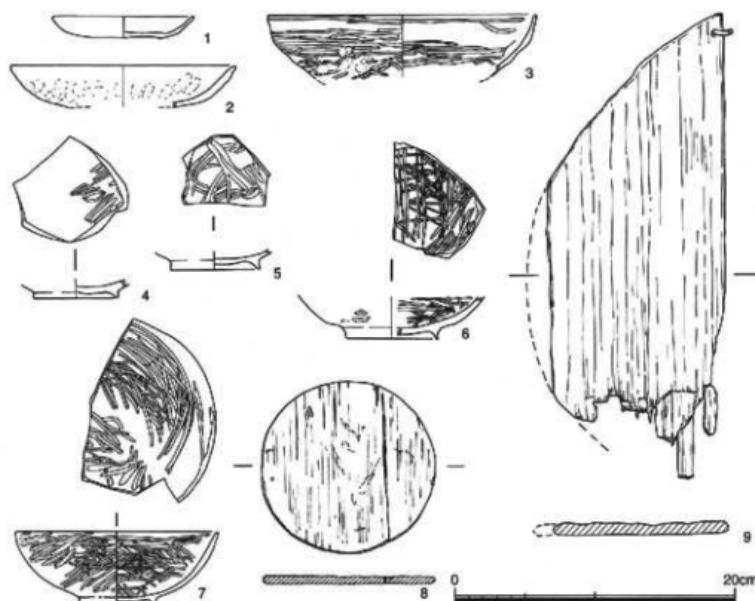
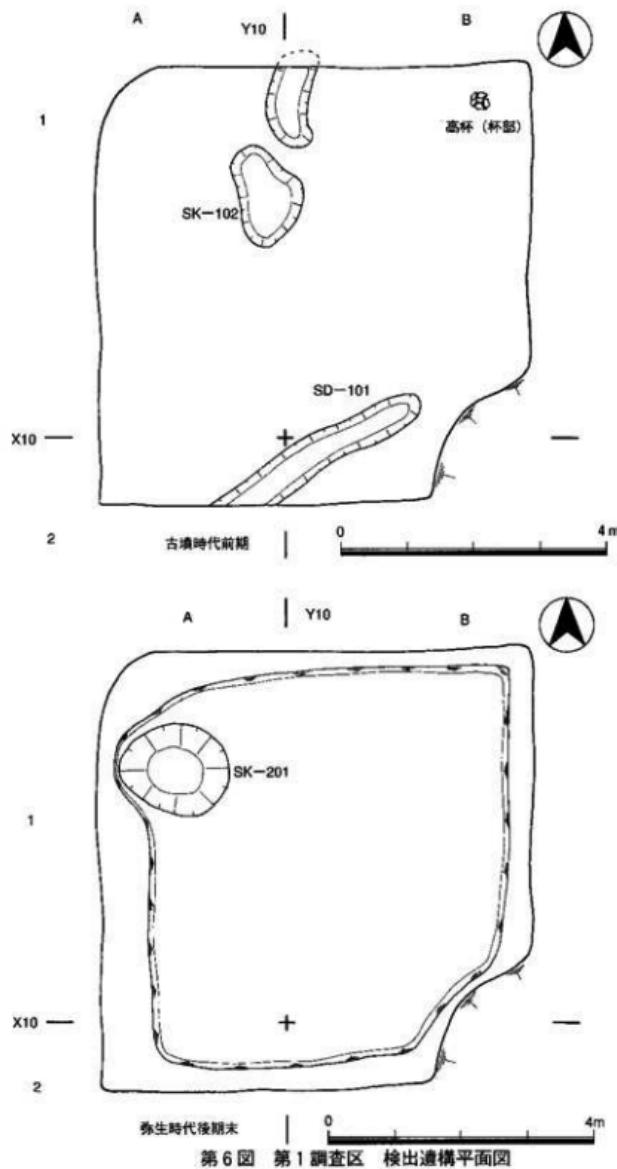


写真1 第1調査区 中世井戸東壁面状況
(西から)

第4図 第1調査区 中世井戸掘方東壁面図



第5図 第1調査区 中世井戸埋土内出土遺物実測図

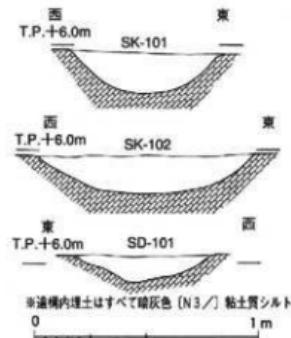


[古墳時代前期]

土坑 (SK)

SK-101

1 A 区の調査区北端で検出した。造構の北部は側溝によって削平してしまったが、平面の検出状況からみて南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は検出長 1.2 m・幅 0.5 ~ 0.7 m・深さ 0.1 8 m を測る。東西方向で断ち割った断面形は楕形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 粘土質シルトで、内部から古式土師器の破片が少量出土した。



第7図 第1調査区
SK-101・102、
SD-101造構断面図

SK-102

SK-101の南側で検出した。平面形状は不定形を呈する。規模は南北長 1.5 5 m・東西長 0.9 5 m・深さ 0. 1 7 m を測る。東西方向で断ち割った断面形は皿形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 粘土質シルトで、内部から甕・鉢の破片が出土した。

溝 (SD)

SD-101

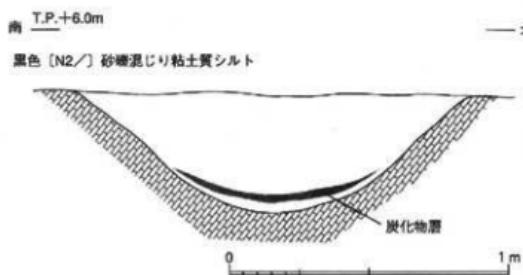
1 B 区~ 2 A 区の調査区南部で検出した。北東~南西方向に伸びる溝で北東部は途中で消滅、南西部は調査区外に至る。規模は検出長 3.0 m・幅 0.5 m 前後・深さ 0.1 m 前後を測る。断面形は浅い楕形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。

[弥生時代後期末]

土坑 (SK)

SK-201

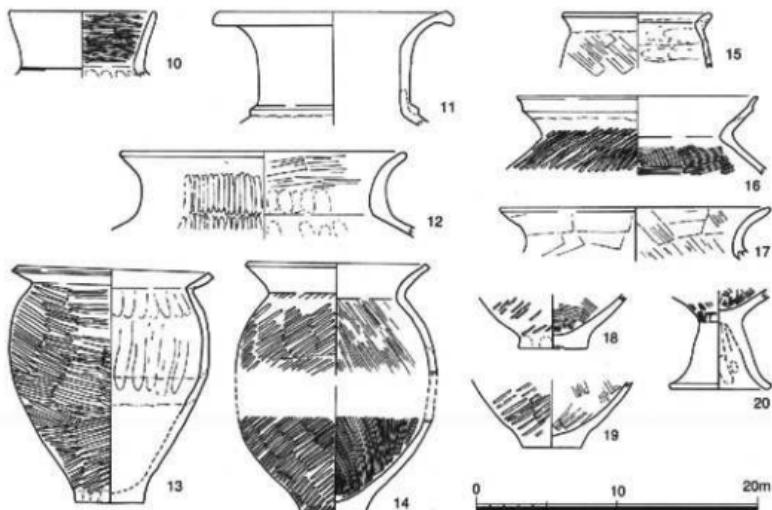
1 A 区の調査区北西部で検出した。平面形は東西にやや長い卵形を呈する。規模は東西長 1.6 5 m・南北長 1. 4 m・深さ 0.3 8 m を測る。南北方向で断ち割った断面形は楕形を呈する。埋土は黒色



第8図 第1調査区 SK-201造構断面図

[N 2/] 砂疊混じり粘土質シルトで、下層部にはレンズ状に薄く炭化物層が堆積する。内部からは壺3点(10~12)・甕7点(13~19)・高杯1点(20)が出土した。

出土した土器は、すべて弥生時代後期の寺沢・森井編年(BE5)にみる河内VI様式に比定されるものである。短頸壺(10)は口縁部のみなので断定できないが、器種別では小型長頸壺の可能性もある。(11)の広口壺の頭部に巡らされる貼付け突帯は、以前のV様式までの加飾性を残すものである。広口壺(12)は粗雑な作りである。甕は本様式では(14)のように胴部最大径が中位にあるのが主流であるが、(13)のように肩の張ったものも混在するようである。圓化できた甕の口縁部をみると、すべて頸部に接合痕を明瞭に残しているのが窺われる。また、口縁端部の形態では(16)の受け口状を呈するものもみられる。(20)の小型化する高杯は、本様式の特徴と言える。



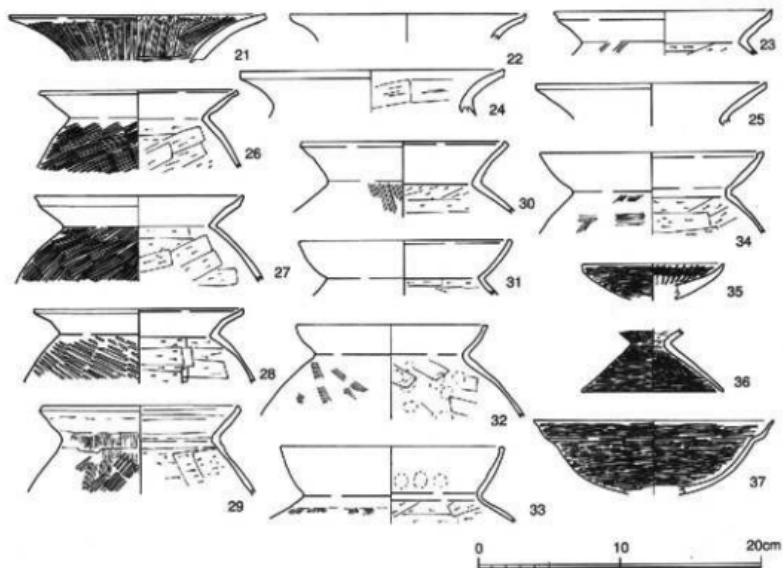
第9図 第1調査区 SK-201出土遺物実測図

[遺構に伴なわない出土遺物]

・弥生時代後期～古墳時代前期(第8層内)

圓化できたものは、高杯1点(21)・甕13点(22~34)・器台2点(35・36)・鉢1点(37)の17点である。各遺物の形態および時期的位置付けは、原田分類(当調査研究会報告37 1993年)によると。(21)の高杯については弥生時代後期からの混入品であり、内外面共に密なヘラミガキが施されるうえに外面にはさらに放射状のヘラミガキが施される。胎土色調

は鮮やかな明褐色を呈する。(22~27) はいわゆる河内型庄内式壺であるが、(28) の壺のみ外面左上がりタタキが施される大和型庄内式壺で、胎土も白っぽい。(22~25) は庄内式新相~布留式古相の範疇と思われるが、口縁部のみなので詳細は不明である。(26~27) は外面右上がりの連続螺旋状タタキが施される壺B₂で、庄内式古相にみられる。(29~30) は布留式影響の庄内式壺で壺Dにあたるもので、体部外面がハケナデ調整される。(31~32) は壺Eにあたる布留式傾向、布留式壺の属性の一部をもつものである。(33~34) は、いわゆる布留式壺で壺F₁にあたる。(29~34) はすべて布留式古相にみられる。器台(35~36) のうち(35) は、皿状の受部を持つ受部が脚部に貫通しない小型のものである。一方の(36) は、屈曲部に段を持たないいわゆる鼓形器台と呼ばれ、くびれ部内は貫通する。(37) は、半球形の底部に二段に屈曲する口縁部が付く精製品の小型鉢である。器台・小型鉢共に布留式期古相に位置付けられる。

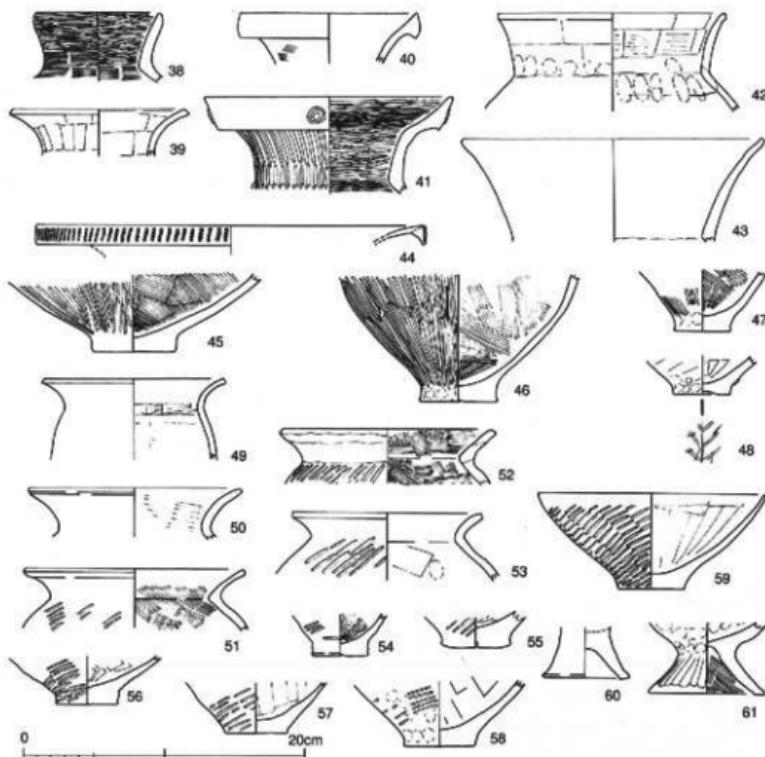


第10図 第1調査区 第8層内出土遺物実測図

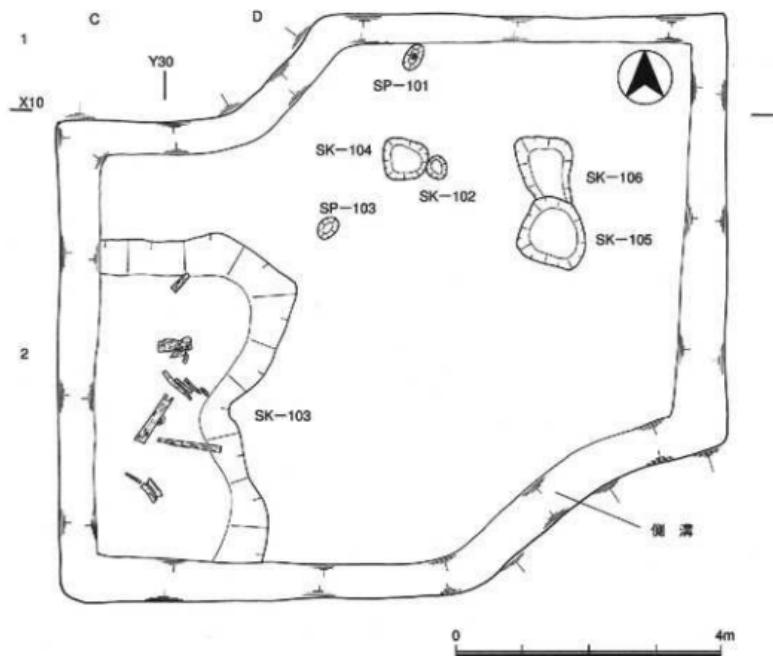
・弥生時代後期末（第9層内）

岡化できたものは、壺11点（38~48）・壺10点（47~58）・鉢3点（59~61）の24点である。短頸壺（38）はSK-201内出土の短頸壺（10）と同種であるが、頸部外面に2条の凹

線を巡らす。(39・43)は、口縁部が大きく外反する広口壺である。(42)の口縁端部がやや肥厚する短頸壺は作りが粗雑である。(40・41・44)の複合口縁壺はいずれも口縁端部が肥厚して面をもつもので、その面には(41)は竹管浮文、(44)は列点文が加飾される。壺については、図化できなかった破片も含めて形態的には(39・43)にみる広口壺が主流をなし、当該期を特徴付ける。壺は肩の張らない小型のもの(49)や(52)のような肩部～口縁部まで幾重もの接合痕を残す粗製のものがある。(60・61)は台付壺または台付鉢の脚部であろう。



第11図 第1調査区 第9層内出土遺物実測図



第12図 第2調査区 検出遺構平面図〈古墳時代前期〉



写真2 第2調査区 SK-103
遺構断面（東から）

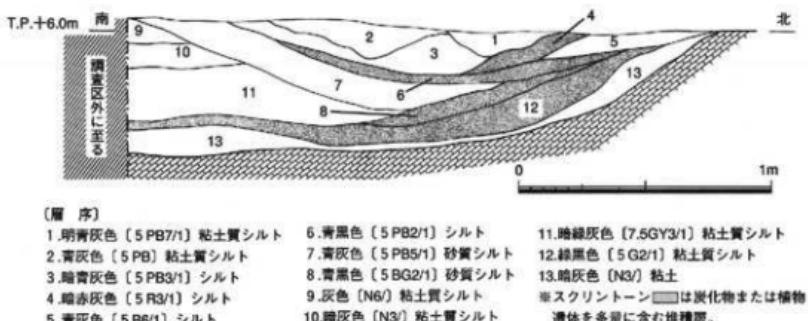
〈第2調査区〉

[古墳時代前期]

土坑（SK）

SK-103

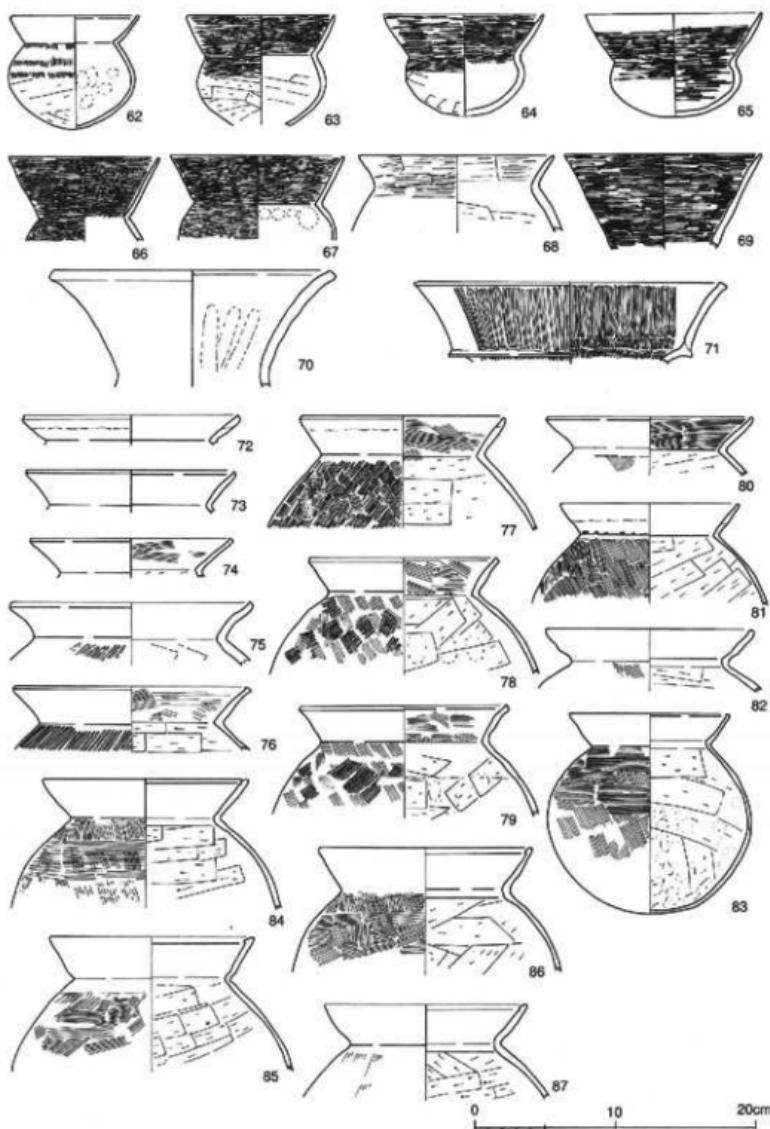
2C区～2D区の調査区南西部で検出した。遺構の西部および南部が調査区外に至っている為、全容は不明である。検出部での規模は、南北長4.9m・東西長2.0～3.0m・深さ0.3～0.55mを測る大型の土坑である。埋土は検出できた部分でみると上層が青灰色系シルト・下層が暗灰色系シルト質



第13図 第2調査区 SK-103 遺構断面図

粘土の2層に大きく分けられ、細分すると全体で13層に分層できる（第13図参照）。遺構内遺物のほとんどは炭化物を多量に含む下層から出土した。それらの遺物出土状況や堆積状況から2次的に埋没した様相が窺われる。遺物には土器以外に多数の木製部材があり、それらは破損して原形を止めない断片や炭化したものが多く、図化できるものは少ない。また、床面にはほぼ全域に植物遺体が付着していることからもともと池状遺構を呈していたものが、のち使用不能となった生活用具を処分するための廐棄坑として利用された可能性が強い。

出土遺物から図化できたものは、土器では壺10点（62～71）・甕16点（72～87）、木製部材10点（88～97）の総数36点を数える。小型壺（62～67）はいわゆる小型丸底壺と呼ばれるもので、（62）を除くとすべて内外面上半部は密なヘラミガキによって調整される。形態的に原田分類でみると（63）は口径が体部最大径を凌駕するB₁、（64～67）は半球形の体部に大きく開く口縁部が付くB₂でいずれも布留式古相にあたる。（62）は口径と体部最大径がほぼ等しいB₃になるが、体部外面がハケナデ調整されるのは当該期では類例が少ない。（68）の短頸壺は壺と見極めの困難な器種で粗製である。（69・70）の直口壺は胎土が褐色系の色調を呈する生駒西龍産で、分類では（69）が精製品の直口壺A₁、（70）が大型直口壺Aにあたり、庄内式新相～布留式古相にみる。（71）の複合口縁壺は、口縁部・頸部とも外反するもので山陰・北陸地方の影響をもつもので、布留式古相にみられる。甕（72～76）は庄内式新相の範疇と思われるが、詳細は不明である。甕（77～79）は分類では幅の狭いタキメがハケナデによって消される壺B₄にあたる。甕（80・81）は形的には壺B₄と同様であるが、体部外面がハケナデ調整される布留式影響の庄内式甕Dになる。甕（82～87）はいわゆる布留式甕で分類は甕Fにあたり、分類をさらに細分すると（82・83）は甕F₁で、口縁屈曲部の弯曲化と口縁端部が丸味をもって肥厚するほか、ケズリが屈曲部に及ばない。さらに（82）は、体部外面上位



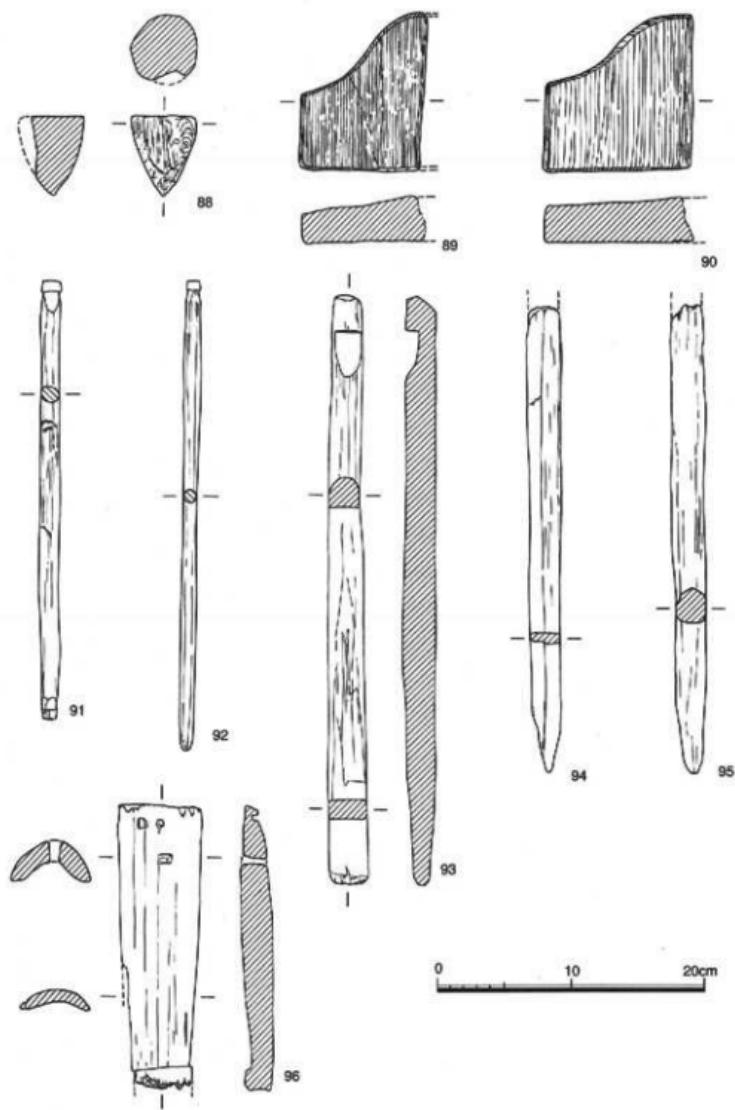
第14図 第2調査区 SK-103出土遺物(土器)実測図Ⅰ

の水平方向のハケナデに特徴をもち、内底面に指頭圧痕を残す。(84~87) は口縁端部が内傾し、面を持つ甕^フになる。甕(76~87) は布留式古相の範疇である。

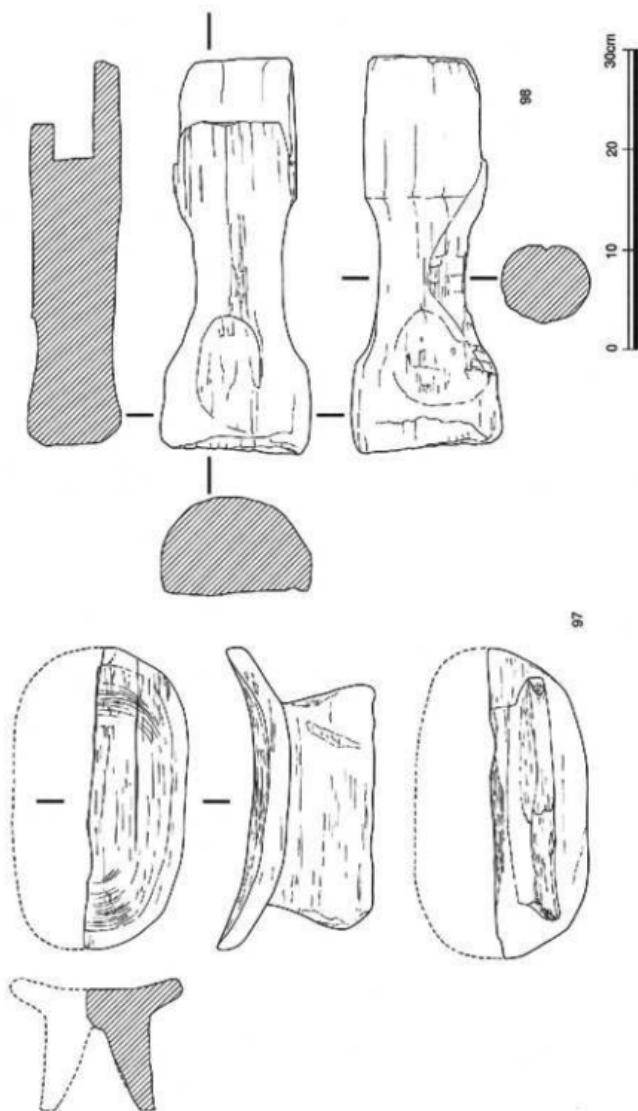
次に木製遺物で図化できたものについて概説する。(88) は独楽で、径 5 cm 前後の平坦な面を残し、それより先端に向けて弾丸状に削りあげ、先端を乳頭状にやや突出させている。全長 6.0 cm・径 5 cm 前後。(89・90) は不定形板状木製品で、これらも用途的には不明である。法量は(89) が残存長 9.0 cm・最大幅 9.3 cm・最大厚 3.4 cm、(90) が残存長 10.8 cm・最大幅 11.5 cm・最大厚 3.4 cm を測る。(91~93) は紡織具の一部で、棒状をした布巻具または糸巻具と思われる。(91) の両端には、紡織機の各部材を引っ張るために紐を結ぶために削り込まれた瘤状の隆起がみられる。全長 33.0 cm・長径 1.5 cm・短径 1.0 cm。(92) についても一端は破損しているが(92) と同種のものと思われる。残存長 35.2 cm・長径 1.2 cm・短径 0.9 cm。(93) は(91・92) より大型のもので、一端は破損しているがそこにもやはり対称に抉りを有するものと思われる。残存長 43.9 cm・長径 3.0 cm・短径 2.3 cm。(94) はヘラ状のもので、用途は不明であるが全面が丁寧に削られ、整形されている。残存長 34.8 cm・幅 2.4 cm・厚さ 0.6 cm。(95) は杭で、残存長 35.2 cm・径 2 cm 前後を測る。(96) は石剣等の武器を納める鞘とみられるもので、2 枚の板を組み合わせたうちの片方と考えられる。一端には 2 枚の板を組み合わせる際に穿たれた棒紐孔および鞘を腰に吊り下げるために穿たれたであろう紐孔が 3箇所みられる。残存長 21.5 cm・最大幅 6.1 cm・最大厚 1.6 cm。(97) は破損しているが類例から復原すると、中央が凹む曲面を呈する座板の下に「ハ」の字形の脚部を削り出した腰掛けと考えられる。推定復元長 30 cm 前後・推定復元幅 17 cm 前後・脚部高 9.5 cm・部材の厚さ 2.0 ~ 3.5 cm。(98) は、一端にはぞ穴を有する部材で、中央部分は削られて細まりくびれる。この部材は福岡市雀居(ささい)遺跡出土の大型組合式机の四本脚^(注9)に類似する。残存長 39.2 cm・長径 13.0 cm・短(くびれ部) 径 8.5 cm。(99) は、大阪府友井東遺跡に出土例をみると代踏み・施肥に用いる「大足」^(注10)の足板と同種のものと思われる。両端の突き出た長軸部分には梯子形の方形枠を取り付けるための緒通し孔が数箇所みられ、さらに片面には縞状に横木の痕跡が確認される。残存長 39.0 cm・最大幅 10.7 cm・最大厚 1.0 cm、長軸部の残存長 3.5 ~ 4.5 cm・最大幅 2.0 cm。(100) は建築部材の断片と思われるもので、両面共に整形され、片面には凹状の切り込み溝がみられる。長さ 25.5 cm・幅 18 cm 前後・厚さ 5 ~ 8 cm。(101~103) の 3 点の角材も建築部材の一部と考えられるが詳細は不明である。各々の法量は(101) - 長さ 30.5 cm・幅 6.5 cm・厚さ 4.5 cm、(102) - 長さ 37.5 cm・幅 6.5 cm・厚さ 3.7 cm、(103) - 長さ 31.8 cm・幅 5.7 cm・厚さ 4.2 cm である。



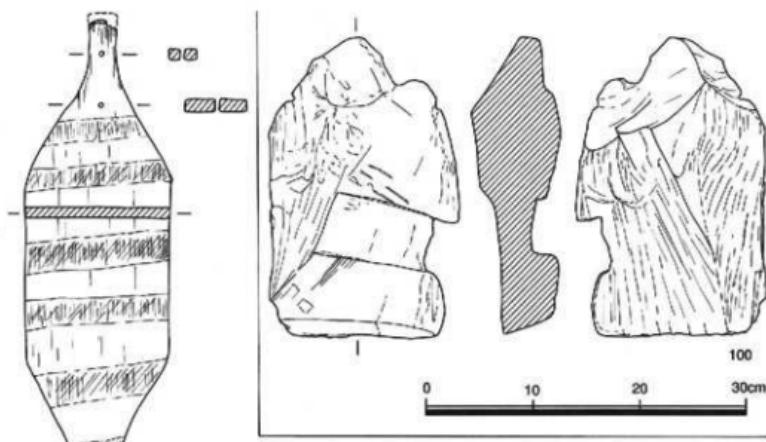
写真3 第2調査区 SK-103
木製品出土状況 (南から)



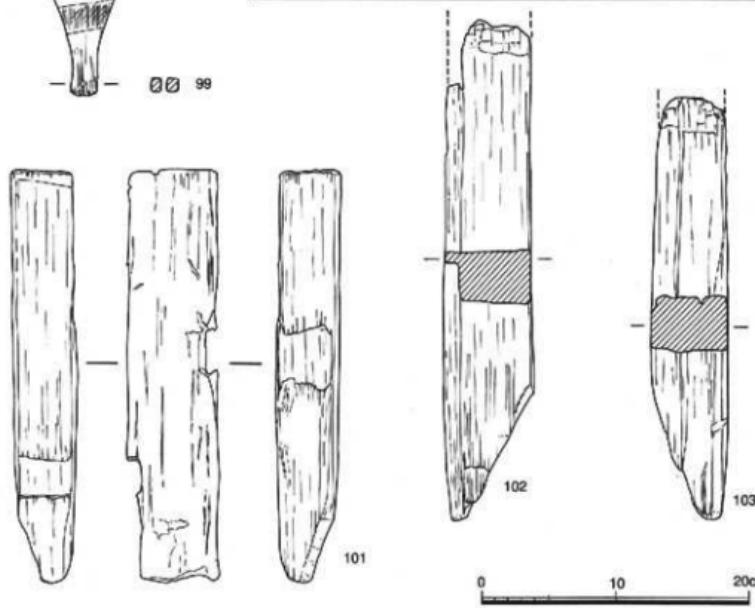
第15図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図Ⅰ



第16図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図Ⅲ（※S=1/5）

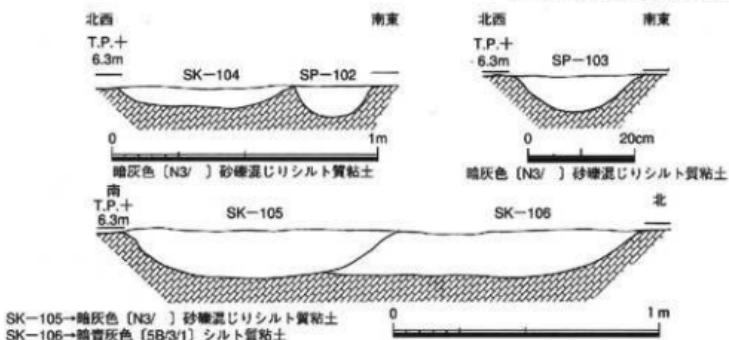


0 10 20 30cm



0 10 20cm

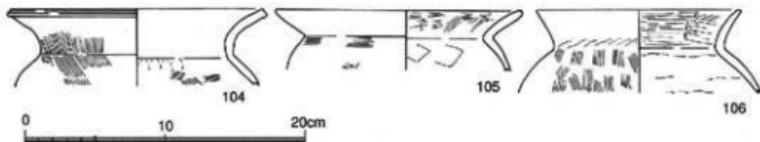
第17図 第2調査区 SK-103出土遺物（木製品）実測図IV



第18図 第2調査区 SK-104~106, SP-102・103 遺構断面図

SK-104

1D区の調査区北部中央で検出した。平面形状はやや隅丸方形を呈する。規模は径0.7m前後・深さ0.08mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は暗灰色〔N3/〕砂礫混じリシルト質粘土で、内部からは壺1点(104)・壺2点(105・106)が出土した。一見壺と見間違える壺(104)の口縁部は、体部から大きく屈曲外反し、その端部面には1条の沈線が巡らされる。壺(105)の頸部外面には接合痕を消去した際のタタキ目が明瞭に残る。壺(106)の口縁部は、体部から「く」の字に鋭く屈曲する。時期的に(104)の壺は口縁部の形態が特異で、在地ではあまりみられないもので搬入品の可能性が強い。壺はいずれも体部内面の調整がヘラケズリではなくヘラナデあるいはユビナデによるもので、時期的に弥生時代後期末からの混入品であろう。

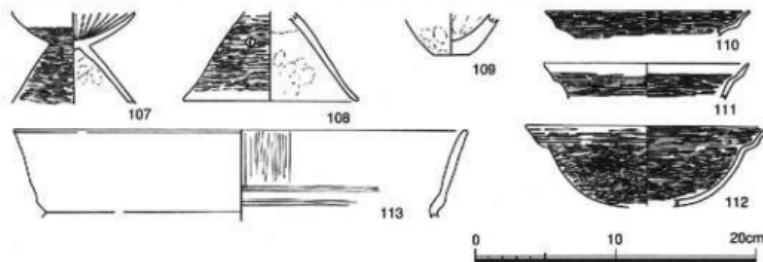


第19図 第2調査区 SK-104出土遺物実測図

SK-105

1D区の調査区北東部で検出した。平面形状は不定形を呈する。規模は径1.0m前後・深さ0.18mを測る。断面の形状は浅い椀形を呈する。埋土は暗灰色〔N3/〕砂礫混じリシルト質粘土である。内部からは布留式古棺に比定される土器が出土し、その中から図化できたものは器台2点(107・108)・鉢5点(109~110)の7点である。(107)の器台は貫通しない皿状の受部を持つもので、内面には放射状のヘラミガキが施される。もう一方の器台(108)

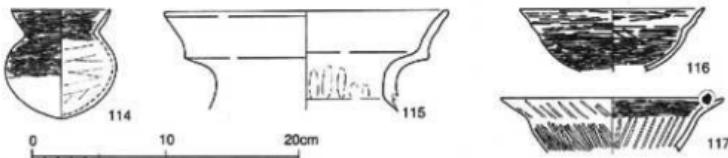
は受部が破損しているが、脚部が貫通するいわゆる鼓形器台と呼ばれるもので、脚裾部上位に透孔を有する。小型鉢（109）の底部は平坦で、全体が手づくねによる粗製である。（110～112）の小型鉢は、半球形の体部に二段に屈曲する口縁部がつく小型有段鉢とも呼ばれる精製品である。（113）の大型鉢も二段に屈曲する口縁部がつくものであるが、この大型鉢については山陰地方に多くみられる。以上の土器類は庄内式新相～布留式古相に比定されよう。



第20図 第2調査区 SK-105出土遺物実測図

SK-106

SK-105の北側で検出した。遺構の南部がSK-105によって切られる為、全容は不明である。規模は検出部で、長径0.9m・短径0.6m・深さ0.19mを測る。埋土は暗青灰色（5B3/1）シルト質粘土である。内部からの出土遺物で固化できたものは、壺2点（114・115）、鉢2点（116・117）の4点である。（114）の小型壺は、球形の体部に比較的短く内寄気味に伸びる口縁部が付く。（115）の複合口縁壺は、口縁部・頸部ともに外反するもので山陰系と思われる。小型鉢（116・117）のうち（116）はSK-105出土（110～112）の小型鉢と同種であるが、（117）の屈曲しない口縁部を持つ小型鉢については、その色調・胎土・調整から弥生時代後期～後期末の所産で、あきらかに混入品である。この（117）の鉢を除いてすべてSK-105出土遺物と同時期である。

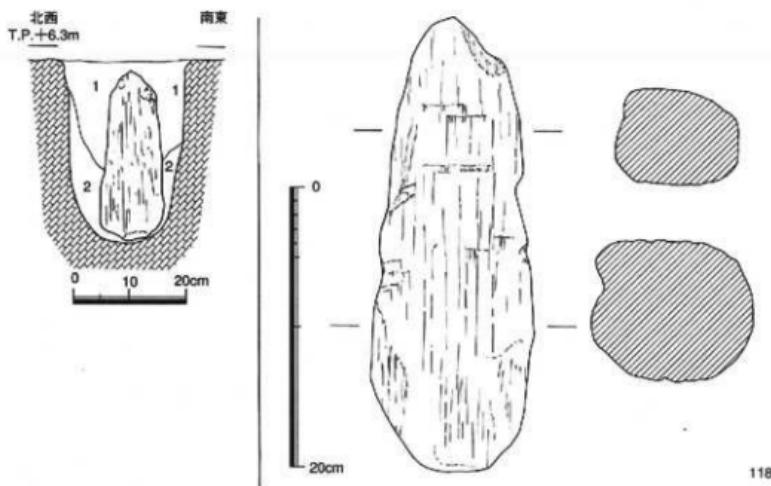


第21図 第2調査区 SK-106出土遺物実測図

柱穴および小穴（SP）

SP-101

1D区の調査区北端部中央で検出した。柱根(118)が遺存する柱穴で、平面形状はやや北東-南西方向に長い梢円形を呈する。規模は長径0.4m・短径0.24m・深さ0.64mを測る。北西-南東方向で断ち割った断面形状は、U字形を呈する。埋土は上層暗灰色(N 3/1)砂礫混じりシルト質粘土、下層青黒色(N 5B 2/1)シルト質粘土の2層に分類できる。遺物は上層から古式土師器の小破片が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。柱根の法量は残存長32.5cm・最大径11.4cmを測る。



第22図 第2調査区 S P-101 遺構断面実測図(左)・柱根実測図(右)

S P-102

S K-104の東側で検出した。平面形状はほぼ円形を呈する。規模は径0.3m前後・深さ0.11mを測る。断面形状は半円形を呈する。埋土は暗灰色(N 3/1)砂礫混じりシルト質粘土で、内部からの出土遺物はなかった。

S P-103

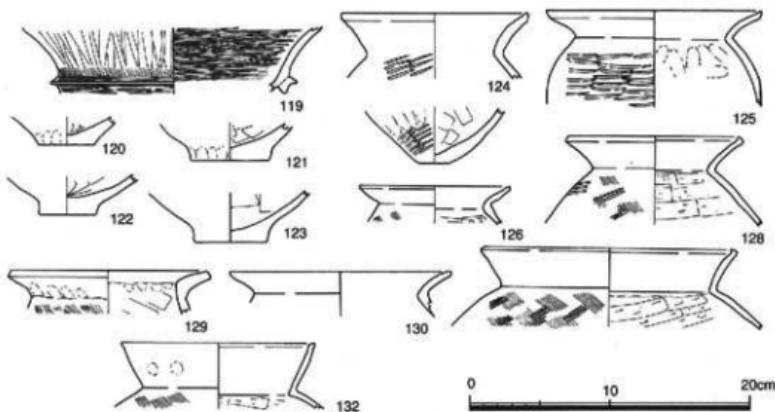
2D区のS K-103の北東側で検出した。平面形状は北東-南西方向にやや長い梢円形を呈する。規模は長径0.35m・短径0.25m・深さ0.13mを測る。断面形状は楕円形を呈する。埋土は暗灰色(N 3/1)砂礫混じりシルト質粘土で、内部からの出土遺物はなかった。

〔遺構に伴なわない出土遺物〕

- ・弥生時代後期末～古墳時代前期(第8層内)

出土遺物のうち図化できたものは、壺5点(119～123)・壺9点(124～132)の14点で

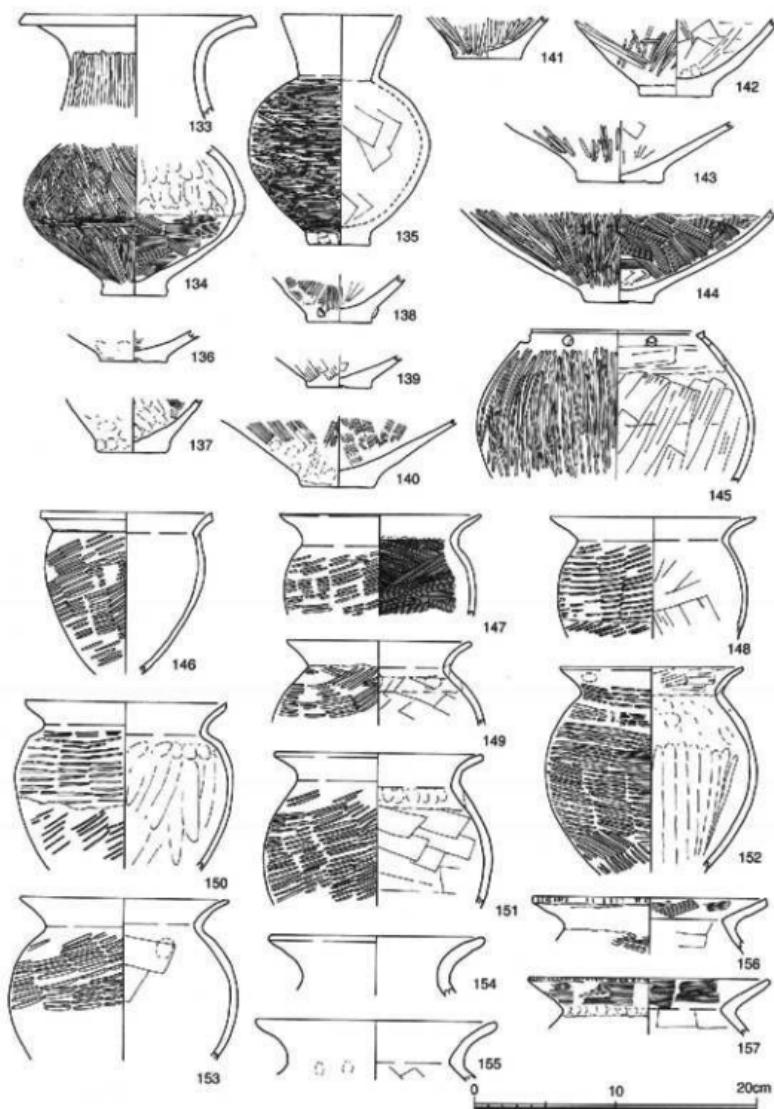
ある。(119) の複合口縁壺は、口縁部と擬口縁部との接合点が突帯状に張り出すもので、河内VI-2様式に比定されよう。(124-126) の3点の壺もその成形・技法から(119)の壺とはほぼ同時期であろう。(124・125)の壺は大きさが異なるが、いずれも体部外面上位の極縄のタタキメがハケナデによって消去される壺B₁に比定される。(129)の壺は、肩の張らない体部に器壁が厚く短い口縁部が2度にわたって接合され、全体的に作りが粗雑である。(132)はいわゆる布留式壺で、口縁端部の内部肥厚が内傾し面を持つ壺F₁にあたる。図化不能な遺物も含めると、第2調査区の第8層には以上のように、第1調査区に比べ弥生時代後期末の遺物が古墳時代前期（布留式古相）の堆積層内に混在する割合が高い。



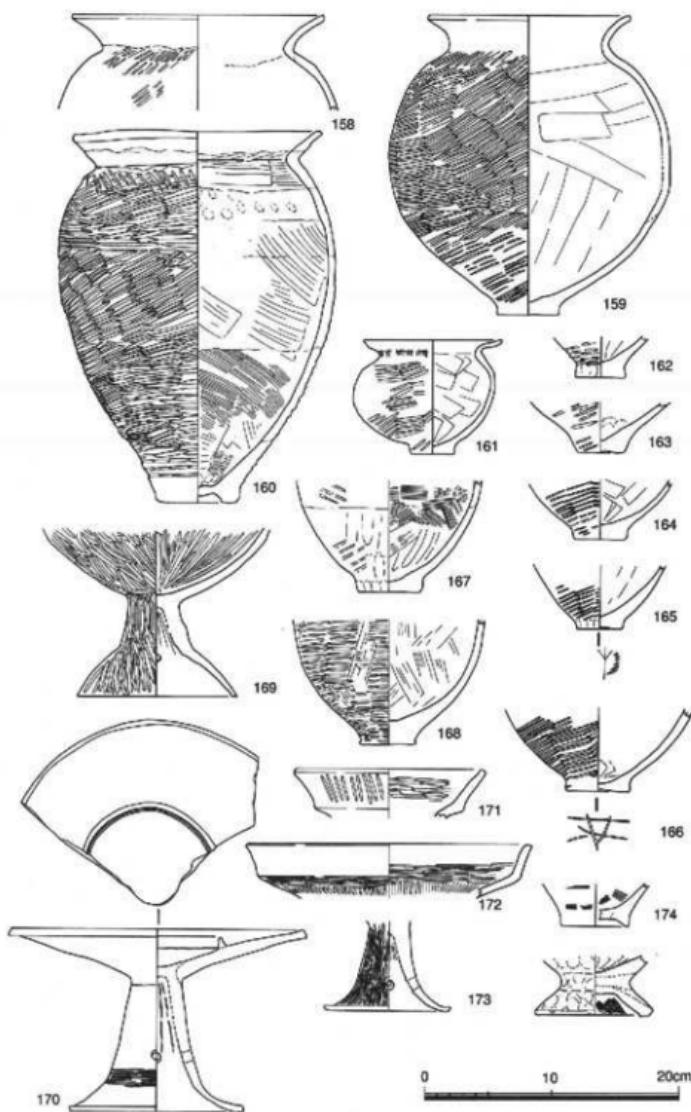
第23図 第2調査区 第8層内出土遺物実測図

・弥生時代後期末（第9層内）

第2調査区では、当該期の遺構が検出されなかった割りには、弥生時代後期末いわゆる河内VI様式に比定される遺物が多量に出土した。また、器種別では出土遺物全体の8割が壺である。次いで壺になるが、壺に関する限りは壺に比べて底部以外に口縁部や体部から図化できる残存率の良いものは少ない。以下、図化できた土器類を概観する。内容は壺13点(133-145)・壺23点(146-168)・高杯5点(169-173)・鉢2点(174・175)の総数43点である。(133)は比較的長めの頸部に大きく外反する口縁部が付く広口壺で、頸部外面は継方向のヘラミガキ調整が施される。(134・135)はいわゆる長頸壺でいずれも体部最大径を中位にもつ。しかし、体部外面のヘラミガキをみると(134)の乱雑な不正方向に対して、(135)の方はすべて横方向に丁寧にしかも緻密に施され、双方に調整技法の相違が窺われる。図化した壺底部



第24図 第2調査区 第9層内出土遺物実測図Ⅰ



第24図 第2調査区 第9層内出土遺物実測図Ⅱ

の調整には、ユビオサエ (136・137)・ハケナデ (138・140)・ヘラナデ (139)・ヘラミガキ (141~144) の4タイプがある。無頸壺 (145) については極めて当該期に類例が少なく、一時期古い河内V様式からの混入品の可能性が高い。体部はほぼ球形を呈し、口縁部に蓋用の紐孔が穿たれる。壺はそのほとんどが小型で球磨化した当該期の特徴を示す。しかし、なかに (158・160) のように大型で体部最大径を上位にもつ形態の古い河内V様式からの混入品とみられるものも散見される。他に当該期の壺の特徴の一つに、口縁部を別に付加した痕跡（接合痕）と明瞭なくびれを残すことが挙げられるが、(152) のような頸部の接合痕をタタキメによって消去しようとする気風のものもみられる。また、(156・157) の口縁端部面にみられるヘラキザミの施文は、加飾性の無い当該期にあって目立つ存在である。形態の不格好な粗製のミニチュア壺 (164) は、口縁部がやや水平に伸び口状を呈する。(165・166) の壺の底部には、ヘラ状工具による木の葉文のような線刻がみられる。深い楕円形の杯部を持つとみられる高杯 (169) は、脚部内面以外すべてヘラミガキ調整される。また、脚部が (173) のような外反屈曲して伸びる据部が主流の当該期にあって、(169) の椀を伏せたような形態を持つ脚部は類例が少ない。(170) の盤状の杯部内面に、断面三角形の突起状の隆起をもつ高杯はさらに類例の少ないもので、河内では「長原遺跡SB-01」(註9) に1点類例を見る。この高杯は寺沢・森井編年によれば河内V-2様式に位置付けられることから一時期古い混入品と思われる。当該期の高杯は、今回図化できなかったものを含めて (171) のようにV様式までのものに比べてやや小型化するのが一般的と考える。台付鉢 (174・175) の高台は (174) がつまみ出し、(175) は継ぎ足し（接合）によるもの成形および技法である。



写真4 第2調査区 発掘風景 (南東から)

第4節 出土遺物観察表

第1調査区

遺物番号 団断番号	器種 出土地点	口径 直徑 高さ 深さ	調整・手法	色調 外側 内側	地 土	性 質	調 度	備考	
								内面 外側	内面 外側
1	皿 (土器)	10.0 1.5	内外面共にヨコナデ、ユビナデ	淡褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	ほぼ光 沢		
2	皿 上	16.0 —	内外面共にヨコナデ、ユビナデ	乳白色	密	良好	口縁部 1/3		
3	碗 (瓦 瓶) 中生井戸内	19.3 —	外側：ユビナデ後ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	暗赤色	密	良好	口縁部 1/6		
4	皿 上	— 高台高 6.7 高台径 6.1	外側：ナデ 内側：ヘラミガキ	灰褐色	密	良好	底部 1/3		
5	皿 上	— 高台高 0.5 高台径 5.8	—	暗灰色	密	良好	底部の み		
6	皿 上	— 高台高 0.8 高台径 6.6	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ、底記録有軌跡文	灰色	密	良好	底部 1/2		
7	皿 上	14.4 5.2	内外面共にヘラミガキ	灰色	密	良好	1/3		
8	高台高 0.9 高台径 5.6								
9	壺 (底生上巻) SK-201	10.2 —	外側：ヨコナデ、ヘラナデ 内側：ヘラミガキ、ユビオサエ	淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
10	壺 (底生上巻) SK-201	16.2 —	外側：ヨコナデ、直底に貼付突起1本。 内側：ヨコナデ、ヘラナデ	淡灰色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 2/3		
11	壺 (底生上巻) SK-201	20.0 —	外側：ヨコナデ、ヘラナデ 内側：ヨコナデ、ユビオサエ	淡灰色	5mm以下の砂 粒を含む (茎付)	良好	口縁部 1/6		
12	高台 底生上巻	13.4 16.7 14.0 4.8	外側：ヨコナデ、タキ (3本/cm)、 ユビオサエ、縦合板 (巻部) 1条 内側：ヨコナデ、タキ (3本/cm)、 ユビナデ、ハケナデ、ハケナデ (10本/cm)、 縦合板 (巻部) 2条	黑色 淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む (茎、石)	良好	1/4		外側に茎付苔
13	壺 (底生上巻) SK-201	12.6 —	外側：ヨコナデ、タキ (4本/cm)、 縦合板 (全体) 1条	淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む (茎)	良好	1/3		
14	高台 底生上巻	4.6 —	内側：ヨコナデ、タキ (10本/cm)	淡灰色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6		
15	高台 底生上巻	10.4 —	外側：ヨコナデ、ハナデ、縦合板 (巻部) 1条 内側：ヨコナデ、ユビナデ、縦合板 (巻 部) 3条	淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6		
16	高台 底生上巻	16.6 —	外側：ヨコナデ、タキ (3本/cm)、 縦合板 (山形縫) 1条 内側：ヨコナデ、ハナデ (10本/cm)	淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む (茎)	良好	口縁部 1/6		
17	高台 底生上巻	19.0 —	内外面共にヘラナデ	淡灰色	3mm以下の砂 粒を含む (茎)	良好	口縁部 1/6		
18	高台 底生上巻	— 底径 4.8	外側：タキ、エビオサエ 内側：ハケナデ	淡褐色	4mm以下の砂 粒を含む (茎)	良好	底部の み		
19	高台 底生上巻	— 底径 4.0	外側：タキ 内側：ヘラナデ	淡茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
20	高杯 (底生上巻) SK-201	16.0 —	外側：ハケナデ、ナデ 内側：ヘラナデ、ユビオサエ、シボリ目	淡茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む (茎)	良好	脚部の み		
21	高杯 (底生上巻) 底径 6.8	—	外側：ヨコナデ後ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	暗褐色	1mm以下の砂 粒を含む (底、茎、壳)	良好	口縁部 1/5		
22	壺 (土器) 第8巻	16.8 —	内外面共にヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
23	高台 底生上巻	15.4 —	外側：ヨコナデ、ハナナデ 内側：ヨコナデ、ヘラケズリ	茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む (底、茎)	良好	口縁部 1/3		

植物番号 固有番号	基 種 由来地	(cm) 口径 法量	開 発・手 法	色調 内面	粉 土	株 構	適 度	備 考
24	完 (土切替) 第 6 層	18.6	外面: ヨコナダ 内面: ヘラナダ	淡茶褐色 明茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1 / 6	
25	河 上	16.4	内外混共にヨコナダ	茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む(素, 石)	良好	口縁部 1 / 8	
26	河 上	14.0	外面: ヨコナダ, タタキ (5 本/cm) 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	茶褐色 暗茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部~ 茎部/4	
27	河 上	14.8	外面: ヨコナダ, タタキ (5 本/1.5cm) 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	不規則	5 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部~ 茎部/1	
28	河 上	14.6	河 上	暗茶褐色	4 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部~ 茎部/4	
29	河 上	12.2	外面: ヨコナダ, タタキ後ハケナダ 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1 / 8	
30	河 上	14.4	外面: ヨコナダ, ハケナダ 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1 / 8	
31	河 上	14.6	外面: ヨコナダ 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	乳褐色	1 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部 1 / 4	
32	河 上	13.4	外面: ヨコナダ, ハナナダ 内面: ヨコナダ, ヒビオサエ後ハラナダ	茶褐色	6 mm 以下の砂 粒を含む (素, 石)	良好	口縁部~ 茎部/1	
33	河 上	13.8	河 上	乳白色 淡茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部 1 / 6	
34	河 上	15.8	外面: ヨコナダ, ハケナダ 内面: ヨコナダ, ヘラケズリ	茶褐色	1 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部 1 / 8	
35	河 上 (土切替) 第 8 層	10.0	内外混共にヘラミガキ	茶褐色	1 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	口縁部 1 / 3	
36	河 上	-	外面: ヘラミガキ 内面: ヘラケズリ, ヘラミガキ	暗茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 2 / 3	
37	体 (土切替) 第 8 層	17.0	内外混共にラミガキ	淡茶褐色	1 mm 以下の砂 粒を含む	良好	1 / 3	
38	腹頭部 (赤牛土器) 第 9 层	1.6	内外混共にヘラミガキ, ハケナダ (10 本/cm), 或は外間に 2 条の凹線を有す る。	茶褐色	4 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1 / 3	
39	口縫部 (赤牛土器) 第 9 层	12.0	内外混共にヨコナダ, ヘラナダ	淡茶褐色	6 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1 / 3	
40	河 上	12.6	外面: ヨコナダ, ハケナダ 内面: 雄蕊の膜状小片	乳茶色	1 mm 以下の砂 粒を含む (素, 石)	良好	口縁部 1 / 6	
41	結合部通渠 (赤牛土器) 第 9 层	17.7	外面: ヨコナダ, ヘラミガキ, ハラナダ (膜状小片), 竹管原文 (口縫部)	茶褐色 明褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縫部 1 / 4	
42	筋葉部 (赤牛土器) 第 9 层	16.0	外面: ヘナナダ, ヒビオサエ, 垂葉 (茎部) 1 条 内面: ヘナナダ, ヒビオサエ, 垂葉 (細部) 2 条	明褐色	6 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縫部 1 / 4	
43	成形部 (赤牛土器) 第 9 层	21.0	外面: ヨコナダ 内面: ヨコナダ, 接合痕 (底部) 1 条	淡灰茶色	2 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縫部 1 / 1	
44	河 上	27.6	外面: ヨコナダ, 斜点文 内面: ヨコナダ	灰茶色	やや粗糲	良好	口縫部 1 / 6	
45	茎 (赤牛土器) 第 9 层	-	外面: ヘラミガキ 内面: ハケナダ (10 本/cm)	灰茶色	3 mm 以下の砂 粒を含む (長)	良好	茎部の み	
46	河 上	-	外面: ヘラミガキ, ヒビオサエ 内面: ハケナダ (7 本/cm)	淡茶褐色 淡褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	茎部の み	
47	河 上	3.6	外面: ヘナナダ, ヒビオサエ 内面: ハケナダ (8 本/cm)	茶褐色 淡茶褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む (素)	良好	茎部の み	
48	河 上	4.0	外面: ヒビオサエ後ハラナダ, 底部に木 の茎丸	乳白色	4 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部の み	
49	完 (赤牛土器) 第 9 层	5.0	内面: ヘナナダ	茶褐色	4 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縫部 1 / 6	

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調査・手法	色調 外面 内面	胎土	焼成	保存度	備考
50	壺 (佐世子郡) 第9層	15.0	外面:ヨコナデ、タタキ 内面:ヘラナデ	乳褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
51	両上	15.4	外面:ヨコナデ、タタキ 内面:ヨコナデ、ハケナデ(4本/cm)	乳褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
52	両上	14.8	外面:ヨコナデ、タタキ(4本/cm)、 横け刺(1本縦第一環部)3条 内面:ハケナデ(10~12本/cm)	乳灰色 乳茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/3	
53	両上	15.4	外面:ヨコナデ、タタキ 内面:ヨコナデ、ユビオサエ後ハラナデ	乳灰色 乳青灰白色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
54	両上	15.4 直径 4.0	外面:タタキ、ユビオサエ 内面:ハケナデ(8本/cm)	乳灰色 乳茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む(「 底、内、石」)	良好	底部のみ 外腹に黒斑	
55	両上	15.0	外面:タタキ、底部中央に刺突孔 内面:ヘラナデ	乳褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	表面のみ	
56	両上	14.8	外面:タタキ 内面:ヘラナデ	淡乳灰白色	4mm以下の砂 粒を含む(「 底、内、石」)	良好	底部のみ 内外側に黒斑	
57	両上	14.4	同上	乳茶褐色 淡褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
58	両上	15.0	外面:ユビオサエ後タタキ 内面:ハケナデ	淡乳灰白色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ 外腹に煤付着	
59	両上	16.0	外面:ヨコナデ、タタキ(4本/cm)	淡褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	11.2cm 有	
60	脚台部 (佐世子郡) 第9層	6.8 5.3	外内共にナデ	弱乳白色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	脚台部 のみ	
61	両上	8.2	外面:ユビオサエ、ヘラナデ 内面:ユビオサエ、ハケナデ(10本/cm)	淡灰茶色	1mm以下の砂 粒を含む(長、 短)	良好	脚台部 2/3	内腹に黒斑および煤 付着

第2調査区

遺物番号	器種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調査・手法	色調 外面 内面	胎土	焼成	保存度	備考
62	小壺 (土器部) SK-103	9.0 8.1 9.0	外面:ヨコナデ、ハケナデ(12本/cm)、 内面:ヘラケズリ	淡褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	2/3	
63	両上	10.4 9.2	外面:ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ、ナデ、ヘラナデ 体部最大径	淡茶褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3	
64	両上	11.3 8.5	外面:ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ、ナデ 体部最大径	淡茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む(は、 れ)	良好	1/2	
65	両上	12.4 7.4 9.3	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ 内面:ヨコナデ、ヘラミガキ	弱褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3	
66	両上	10.4	両外底共にヘラミガキ	淡褐色	暗灰	良好	口縁部 2/3	
67	両上	12.0	外面:ヘラミガキ、複合痕(凹部)1条 内面:ヘラミガキ、ユビオサエ	淡褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	1/6	
68	短縦壺 (土器部) SK-103	13.4 1.1 9.3	外面:ヘラナデ、ナデ、複合痕(口縁部) 1条 内面:ヘラナデ、ヘラケズリ	弱褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/3	
69	窓上 (土器部) SK-103	14.0	内面窓共にヘラミガキ	淡褐色	1mm以上の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
70	大型窓口壺 (土器部) SK-103	19.8	外面:ヨコナデ 内面:ユビナデ接着ヨコナデ	淡褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/3	

植物番号	器種	(cm)	口部 法量 路高	調査・手法	色調 外面 内面	砂 土	地 成	濃度	備 考
71	複合口被藻 (十脚類) SK-103	21.3	-	外面: ヘラミガキ、接合藻 (口被部) 1 条 内面: ヘラミガキ	米褐色	2mm以下の砂 粒を含む (表、裏)	良好	口被部 1/6	
72	葉 (十脚類) SK-103	15.2	-	外面: ヨコナデ、複合藻 (口被部) 1条 内面: ヨコナデ	米褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/4	
73	葉 (十脚類) SK-103	14.8	-	内外面共にヨコナデ	暗赤褐色	2mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 1/3	
74	葉 (十脚類) SK-103	14.2	-	外面: ヨコナデ 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	暗灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/6	
75	肉 上	17.0	-	外面: ヨコナデ、タキキ (3本/cm) 内面: ヨコナデ、ハラナダ	淡褐色 暗赤色	4mm以下の砂 粒を含む (表) 暗赤色	良好	口被部 1/6	
76	肉 上	16.4	-	外面: ヨコナデ、タキキ (5本/cm) 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	暗灰色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/6	
77	肉 上	14.6	-	外面: ヨコナデ、タキキ (7本/15cm) 受ハ タキキ (6本/cm)、複合藻 (口被部) 1条 内面: ハケナデ (10本/cm)、ヘラケズリ	淡褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/6	
78	肉 上	13.4	-	外面: ヨコナデ、タキキ (7本/15cm) 後 ハナナデ (5本/cm) 内面: ハケナデ (12本/cm)、ユビオナデ後ハタキキ	暗赤褐色	4mm以下の砂 粒を含む (表)	良好	口被部 1/4	
79	肉 上	14.8	-	外面: ヨコナデ、タキキ (6本/cm) 後 ハナナデ (10本/cm) 内面: ハケナデ、ユビオナデ後ハラケズリ、 後合藻 (肩部) 1条	暗赤褐色	3mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 1/6	
80	肉 上	14.6	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ、葉底 (肩部) 1条 内面: ハケナデ (12本/cm)、ヘラケズリ	暗茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 1/6	
81	肉 上	12.8	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (10-13本/cm) 内面: 接合藻 (口被部) 1条	深褐色	1mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 茎葉 直 1/3	
82	肉 上	14.4	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色～ 黒褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部	外面に薄付着
83	肉 上	11.0	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面: ヨコナデ、上位ハラケズリ、下位 ユビオサエ	暗茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	4/5	
	体細胞大量 14.5								
84	肉 上	14.4	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (5本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	墨褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	1/4	
85	肉 上	14.4	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	墨褐色	3mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	1/3	外面に薄付着
86	肉 上	15.0	-	肉 上	暗茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	1/6	外面に薄付着
87	肉 上	14.6	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	1/6	
104	葉 (側生・十脚) SK-104	16.0	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (8本/cm) 内面: ヨコナデ、ユビオナデ後ハケナデ	淡褐色	5mm以下の砂 粒を含む (表、 裏、右)	良好	1/6	外面に薄付着
105	葉 (側生・十脚) SK-104	14.6	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面: ハラミガキ、ナテ、複合藻 (背面) 3条	墨灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/6	外面に薄付着
106	肉 上	15.6	-	外面: ヨコナデ、ハケナデ 内面: ハラミガキ、ナテ、複合藻 (背面) 1条	淡褐色	5mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 1/8	外面に薄付着
107	葉 右 (十脚類) SK-103	8.6	-	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ 内面: ヘラミガキ、ユビオナデ後ハラケ ズリ	淡褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	兩部の み欠損	
108	肉 上	8.6	-	外面: ヘラミガキ、ヨコナデ、三方孔? 内面: ユビオナデ、ヨコナデ、複合藻 1条	淡褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	脚部 1/3	
109	小葉 (上脚部) SK-105 KW#	2.4	-	内外面共にユビオナデ (ナテ)	淡褐色	3mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	脚部の み	
110	葉 (上脚部) SK-105	14.4	-	内外面共にヘラミガキ	淡茶褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口被部 1/6	
111	肉 上	14.4	-	内外面共にヨコナデ、ヘラミガキ	淡褐色	2mm以下の砂 粒を含む (裏)	良好	口被部 1/6	

植物番号 出土地点 回収番号	前種 (cm)	口桂 流量	調査・手集	色調		土質	地底度	備考
				外 面	内 面			
112 林 (土壠跡) S.E. 105	17.2 —	—	同上	茶褐色 明褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/4	
113 河 上	32.0	外面: ヨコナデ — 内面: ヘラナデ		淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/5	口部部 外面に黒斑 存
114 小型林 (土壠跡) 八 SK 106	7.4 8.1	外面: ヘラミガキ、体部下半は褐色の為 奥壁不明		茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/5	はほ元 外面に黒斑 存
115 愛弓林带 (土壠跡) 八 SK-106	21.2 —	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ、ユビナデ		茶褐色 淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (長、 角、石)	良好	1/8	口部部
116 林 (土壠跡) 八 SK-106	13.8	内外混生にヘラミガキ		淡茶褐色	1 mm以下の砂 粒を含む (長)	良好	1/3	
117 林 (土壠跡) S.E.-106	16.8 —		同上	暗灰色	4 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	1/5	口部部
119 側の林带 第8号 八	—		同上	淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3	頭部 み
120 重 (根毛土壠) 第8号 八	—	外面: ユビナデ (オサエ) — 内面: ヘラナデ		暗茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 のみ	底部に黒付着
121 八 底径	4.0	— 外面: ユビナデ (オサエ) — 内面: ヘラナデ		淡茶褐色	5 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	底部 のみ	
122 同 上	— 外面: 岩威の為西面不明 — 内面: ヘラナデ			淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 のみ	
123 同 上	—		同上	暗灰色 淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 のみ	
124 重 (根毛土壠) 第8号 八	13.2 —	外面: ヨコナデ、タキキ — 内面: ヨコナデ、ナデ		暗灰色 淡褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好	口部部	
125 同 上	15.4 八	外面: ヨコナデ、タキキ (3本/cm) — 内面: ヨコナデ、ユビナデ		茶褐色 淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (長、石)	良好	口部部 底部/4	外面に黒付着
126 同 上	—	外面: タキキ後ヒビナデ — 内面: ヘラナデ		暗茶褐色	7 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	底部 のみ	
127 重 (土壠跡) 第5号 八	2.0	外面: ヨコナデ、タキキ後ハケナデ — 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ		茶褐色	4 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	口部部 1/8	
128 同 上	17.6 八	—	同上	茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (長、石)	良好	口部部 1/5	外面に黒付着
129 同 上	10.8	外面: ヨコナデ、ハケナデ — 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ		淡茶褐色	6 mm以下の砂粒 を含む (長、石)	良好	口部部 1/8	
130 同 上	15.8	内外混生にヨコナデ		暗茶褐色 淡褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口部部 1/6	
131 同 上	14.0 —	外面: ユビナデ後ヨコナデ、ハケナデ — (5本/cm)、接合痕 (頭部) 1本 内面: ユビナデ後ヨコナデ、ハケナデ (頭部) 1本		暗茶褐色	6 mm以上の砂 粒を含む	良好	口部部 1/4	
132 同 上	13.8 —	外面: ユビナデ後ヨコナデ、ハケナデ — 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ		暗茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	1/8	
133 広口重 (根毛土壠) 第9号 八	16.0 —	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ — 内面: ヨコナデ、ナデ		淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	1/8	
134 重 (根毛土壠) 第9号 八	—	外面: ヘラミガキ — 内面: 上位ユビナデ (オサエ)、下位ハ ケナデ (4本/cm)、接合痕 (体部) 1 本		淡茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (長、 石、角、石)	良好	1/2 底部完 存	
135 同 上	8.4 16.4 12.9 底径 4.4	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ — 内面: ヨコナデ、ヘラナデ		淡茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好	口部部 — 強次 根	体部外側に強次 根

調査番号 試験番号	基 標 (cm)	口徑 法算 距離	調 整・手 法	色調 内面	砂 土	精 度	備 考
136 九	■ (底座上部) 第9層 底座	4.6	- 外面: ハビオサニ - 内面: ヘラナテ	黄褐色 淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好 底部のみ	
137 九	同 上 底座	4.8	- 外面: ハビオサニ - 内面: ハビオサニ後ヘタナテ	赤褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (長)	良好 底部のみ	
138 九	同 上 底座	2.6	- 外面: ハケナテ - 内面: ヘラナテ	明褐色	5 mm以下の砂 粒を含む (端、手)	良好 底部のみ	内面に黒斑
139 九	同 上 底座	4.6	- 外面: ヘラナテ、ナダ - 内面: ヘラナテ	灰紫色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好 底部のみ	内面に黒斑
140 九	同 上 底座	5.0	- 外面: ハビオサニ後ハケナテ - 内面: ハケナテ (5本/cm)	淡灰褐色 暗褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (長、石)	良好 3/5	底部 外壁に黒斑
141 九	同 上 底座	4.8	- 内外表面にヘラミガキ	暗赤褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好 底部のみ	
142 九	■ (底生土層) 第9層 店舗	5.0	- 外面: ハラミガキ、エビオサニ、接合部 - (底部) 1束	暗赤褐色 暗褐色	8 mm以下の砂 粒を含む (長、 石)	良好 底部のみ	外壁に黒斑
143 九	同 上 底座	6.0	- 外面: ハラミガキ - 内面: ヘラナテ	暗赤褐色 灰色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好 底部のみ	
144 九	同 上 底座	4.8	- 外面: ハラミガキ - 内面: ハケナテ (5本/cm)、ヘラナテ、 接合部 1束	暗赤褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好 底部のみ	
145 九	無筋層 (底生土層) 第9層 体部最大径 19.6	12.1	- 外面: ハラナテ、ハラミガキ、口縫部付 - 反応: 錆孔 - 内面: ハラナテ、接合部 (底部) 2条	灰褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好 口縫部 ~底部 1/3	
146 九	■ (底生土層) 第9層 体部最大径 11.3	12.0	- 外面: ヨコナテ、タタキ (4本/cm)、 接合部 (底部) 1束 - 内面: ヨコナテ、ナダ	明赤褐色 淡赤褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好 1/4	体部外壁に保付帶
147 九	同 上 体部最大径 13.6	14.4	- 外面: ヨコナテ、タタキ (3本/cm)、 (12本/cm) - 内面: ヨコナテ、エビオサニ、ハケナテ	暗灰色 灰褐色	5 mm以下の砂 粒を含む (露、 角)	良好 口縫部 ~底部 1/4	
148 九	同 上 体部最大径 13.4	14.2	- 外面: ヨコナテ、タタキ (5本/cm)、 接合部 (体部) 1束 - 内面: ヨコナテ、ハラナテ	暗褐色	5 mm以下の砂 粒を含む (露)	良好 1/4	
149 九	同 上 体部最大径 15.4	13.0	- 外面: ヨコナテ、タタキ (4本/cm)、接合部 (側面) 1束 - 内面: ヨコナテ、エビオサニ、ヨビナテ、 (12本/cm) - 接合部 (底部) 1束	灰褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (露、石)	良好 1/6	口縫部 口縫部外壁に保付帶
150 九	同 上 体部最大径 15.4	14.2	- 外面: ヨコナテ、タタキ (5本/cm)、 接合部 (体部) 1束 - 内面: ヨコナテ、エビオサニ、ヨビナテ	灰褐色	5 mm以下の砂 粒を含む	不良 2/3	
151 九	同 上 体部最大径 16.3	14.6	- 外面: ヨコナテ、タタキ (4本/cm)、 内面: ヨコナテ、エビオサニ、ヘラナテ、 接合部 (底部) 1束	暗褐色	4 mm以下の砂 粒を含む (露、石)	良好 1/3	
152 九	同 上 体部最大径 15.0	13.0	- 外面: ヨコナテ、タタキ (5本/cm)、 内面: ヘラナテ、エビオサニ、ヨビナテ、 接合部 (底部) 1束	明褐色 灰褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好 1/3	
153 一〇	同 上 体部最大径 15.0	14.6	- 外面: ヨコナテ、タタキ (4本/cm) - 内面: ヨコナテ、エビオサニ後ヘタナテ	赤褐色 淡赤褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好 1/4	列壁に保付帶
154 一〇	同 上 体部最大径 16.1	15.0	内外壁共にヨコナテ	明褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良 1/3	
155 一〇	同 上 体部最大径 17.0	14.6	外面: ヨコナテ、エビオサニ 内面: ヨコナテ、ハラナテ	明褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好 1/4	口縫部
				明褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好 1/4	

遺物番号	器種	(cm) 口徑 底径	調整・手法	色調 外面 内面	胎土	性質	測定値	備考
156	甕	16.6	外面:ヨコナギ、タキ、口縁端部にヘ リヤザミメ、接合痕(頭部～底部)2条 内面:ハケナゲ、ヘラナゲ	暗茶褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/3	
157	甕 上	17.0	外縁:ハケナゲ、エビオサエ、口断面部 にヘラキヤザミメ、接合痕(底部)1条 内面:ヘラナゲ	茶褐色 乳白色	3mm以下の砂 粒を含む(裏)	良好	口縁部 1/4	
158	甕 上	19.4	外縁:ヨコナギ、タキ、接合痕(底部)1条 内面:ヨコナギ、ナゲ、接合痕(底部)1条	淡茶褐色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 裏面1/4	背面外側に擦付痕
159	甕 上	15.8	外縁:ヨコナギ、タキ(6本/cm)、接合痕(底部)1条 内面:ヨコナギ、ナゲ、接合痕(底部)1条	暗褐色 淡茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	3/5	内外面に擦付痕
160	甕 上	23.8	外縁:ヨコナギ、タキ(6本/cm)、接合痕(底部)1条 内面:ヨコナギ、ナゲ、接合痕(底部)1条	暗褐色	6mm以下の砂 粒を含む(長、 深、角、4)	良好	4/5	外周全周および内面 下部に擦付痕
161	小型甕 (張生上部) 底付	6.3	外縁:ヨコナギ、ハケナゲ、タキ(4 木/cm)、接合痕(頭部～底部)3条 内面:ヨコナギ、ヘラナゲ、ハケナゲ、 エビオサエ、接合痕(底部)4 条	淡茶色	4mm以下の砂 粒を含む(裏、 角)	良好	2/3	
162	甕 (張生上部) 第9層	3.8	外縁:タキ 内面:ヘラナゲ	茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
163	甕 上	4.0	外縁:タキ 内面:スピナゲ	茶褐色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	背面外側に擦付痕
164	甕 上	4.0	外縁:タキ(4木/cm) 内面:ヘラナゲ	茶褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
165	甕 上	3.6	外縁:タキ(4木/cm)、底部に本の 茎葉 内面:ヘラナゲ	茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
166	甕 上	5.0	外縁:タキ(4木/cm)、底部にヘラ ナゲ 内面:ナゲ、ヘラナゲ	茶褐色	6mm以下の砂 粒を含む(長、 深、角)	良好	底部のみ	
167	甕 上	4.8	外縁:タキ(4木/cm)、接合痕(底部)1条 内面:ヨコナギ(8本/cm)、下部スピナ ゲ	茶褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
168	甕 上	4.4	外縁:タキ(4木/cm)、一部ヘラナゲ 内面:ヘラナゲ	茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3	外周に擦付痕
169	高杯 (張生上部) 第9層	12.4	外縁:ヘリミガキ、四方孔 内面:ヘリミガキ、ナゲ、シボリ目	淡茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む(長、 深、角、4)	良好	口縁部 のみ欠損	
170	甕 上	14.4	外縁:ナゲ、一部ヘリミガキ 内面:ナゲ、シボリ目、底部中央に深 い10mm前後の突起状の隆起をもつ	茶褐色	6mm以下の砂 粒を含む(裏、 石)	良好	3/5	
171	甕 上	14.6	内外面共にヨコナギ後ヘラミガキ	茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
172	甕 上	21.6	内外面共にヨコナギ、ヘラミガキ	茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
173	甕 上	9.5	内面:ヘラミガキ、四方孔 内面:ナゲ、シボリ目	茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 1/3	
174	台付鉢 (張生上部) 底付	5.2	内外面共にハケナゲ	淡茶褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 1/3	内面に黒斑
175	甕 上	7.2	外縁:エビオサエ、ハケナゲ、 接合痕1条 内面:ヘラナゲ	茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	底部 1/2	外周に擦付痕

第3章 まとめ

今回の調査は、対象となる古墳時代前期の堆積層が現地表の面積に比してかなり深いところに位置しているため、事前協議でも安全を考慮するため上面で大幅に掘削面積をとり、法（のり）面をつけて掘削した。しかし、壁面の崩れや周辺からの流水・下層からの湧き水と言った悪条件で「素掘り調査」の限界を感じるものであった。そういうなかでも弥生時代後期末から古墳時代前期の2時期に亘る遺物包含層および生活面が確認できたことは、久宝寺遺跡内でも調査例の少ない当地に新たな知見を加える結果となった。以下、時代毎に調査結果をまとめてみたい。

第1調査区付近で調査区外といえる地点から検出した平安時代後期頃の曲物井戸は、面的にこそ捉えることはできなかったが、これは当地に該期の集落が存在したことを明示するものである。井戸の上層から旧耕土まで層毎に含まれる中世の瓦器類・土器類、近世陶磁器片と壁面に耕作溝とみられる起伏から、鎌倉時代以降近代まで生産域として土地利用されていた状況を窺い知ることができる。おそらく平安時代後期に存在した村落が、鎌倉時代に入って耕地開発のもとに削平されたのであろう。

古墳時代前期の生活面については、西側の第1調査区は遺構・遺物ともに希薄であり、東側の第2調査区付近に集落の中心が存在するようである。それは第2調査区内の建造物を構成するとみられる柱穴（S P-101）の検出、さらにSK-103の大型土坑から土器類とともに生活用具の一部である木製遺物の検出が挙げられる。木製遺物は布巻き具または糸巻き具・腰掛け・原始機なる機織りの部材等そのほとんどが紡織具関係であるが、原形を留めるものはほとんど無く、破損して焼却されたとみられる炭化状の断片が坑内に散在している。木製品は土器や石器とは違い、有機質であるため遺存状態が土質をはじめ諸々の条件において限られ、まして今回のような破損した個々の部材から全体を復元するのは困難を極める。木製品のなかではとくにこの紡織具関係が複雑であり、他遺跡の出土例や民族例からの解説が要求される。今回用途不明とした中の部材もその中に含まれていることは言うまでもない。紡織具以外では農具として大足や転用材の木槌が含まれ、該期の生活様式および生産形態を究明するうえでは貴重な資料と言える。大足については「田下駄」とともに現在まで多くの研究者によって検討^(註10)され、「田下駄」が溼田作業において身体沈下を防ぐために使用されるのに対し、大足は施肥および移植栽培法（田植え）に使用されたと言う見解が一般的とされている。とくに最近では秋山浩三氏が、「『大足』の再検討」と題し、各遺跡の出土例から大足の形式・構造を縦密に復原・分類し、田下駄と対比させながらその機能について究明されている^(註11)。ここで大足に

ついて特筆したのは、その出土が集落付近に水田の存在を明示するものであり、今後周辺における調査については留意しなければならない課題だからである。市教委の遺構確認調査では、本調査箇所の南側においても数箇所のグリッドを掘削し、そこでは遺物は皆無であったが本調査地で検出した古墳時代前期（布留式古棺）の遺構面のレベル値と対応する層位で、水田耕土の可能性がある堆積層が確認されており、南側に水田遺構の存在が想定される。

ここで当該期に関して周辺の調査をみると、本調査地から北東へ約100m地点で当調査研究会が昭和63年度に実施した共同住宅建設工事に伴う第3次調査（E3）では、ほぼ同時期の方形周溝墓1基と土坑1基を検出している。現段階では、この墓域が今回検出した集落と有機的に関連するか否かについて考察するには周辺での調査例が乏しく、上述の水田遺構を含め今後の調査結果を待って再検討したい。

弥生時代後期末の遺構については、第1調査区で唯一土坑1基（SK-201）を検出したが、第2調査区においては残念ながら下層の厚い砂層から湧き出る水等、悪質な土壤条件から遺構を確認することができなかった。しかし、第2調査区では第1調査区とは比較にならないほど多量の土器類が出土しており、くわえて古墳時代前期の遺構内にも該期の遺物が混在することから、集落の中心部がどちらかと言うと第2調査区付近にあった可能性が高い。

（註）

- （註1）・瀬和夫 1987.3「第III章 調査の成果－検出遺構－」『久宝寺南（その2）－久宝寺・加美遺跡の調査－ 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書』（財）大阪文化財センター
- （註2）・成海佳子他 1991「II 墓葬文化財の発掘調査」『13.久宝寺遺跡第9次調査（K H91-9）』『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告書』（財）八尾市文化財調査研究会
- （註3）・坪田真一 1994「II 墓葬文化財の発掘調査」『8.久宝寺遺跡第18次調査（K H94-18）』『平成6年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告書』（財）八尾市文化財調査研究会
- （註4）・田中清光 1986.9「報告2 加美遺跡発掘調査の累果」『古代を考える43 加美遺跡の検討』古代を考える会
- （註5）・尾上実 1983「南河内の瓦器物」『藤原第一大先生記念論集・古文化論集』
- （註6）・守川義・森井貢雄 1989.6「2 各地域の様式編年 1河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編』寺沢薰・森岡秀人 編著 木耳社
- （註7）・原田昌則 1993「II 久宝寺遺跡第1次調査（K H84-1）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告37 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会
- ※本書では中河内地域で概ね弥生時代後期末から布留式新鉢（須磨型山型）に存在する土器類を分類対象としている。
- （註8）・松村透博・下村智 1994「季刊 考古学 第47号」口絵（モノクロ）机のはじまり』雄山閣
- （註9）・西美佐子他 1983「3. 調査の成果」『井手井（その2） 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書』（財）大阪文化財センター
- ※井手井東遺跡出土の大足は、足底の周りに梯子形の木の枠を取り付けた人型のもので、ほぼ原形を留めている。これに類似するものとして、山形市・鶴岡遺跡の出土例がある。
- （註10）・水島輝臣 1978.3 1982.3改訂『大阪市平野区・長原遺跡発掘調査報告－大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32T区の発掘調査－』長原遺跡調査会・改訂版 財團法人大阪市文化財協会
- （註11）・宮本嘉太郎 1952「田下版」「日本社会民俗辞典」
- ・木下忠 1969「おおあし」「民具論集」1
- ・中村後鬼賀 1976「シロフミ田下版の諸系」『国立民族学博物館研究報告』
- （註12）・秋山洪三 1993「II 大足」『大足の再検討』『考古学研究 第四〇回卷第二号（通巻一五九号）』
- （註13）・西村公助 1989「II 墓葬文化財の発掘調査」『6.久宝寺遺跡（第3次調査：久宝寺4丁目81-1）』『（財）八尾市文化財調査研究会報告25 八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会

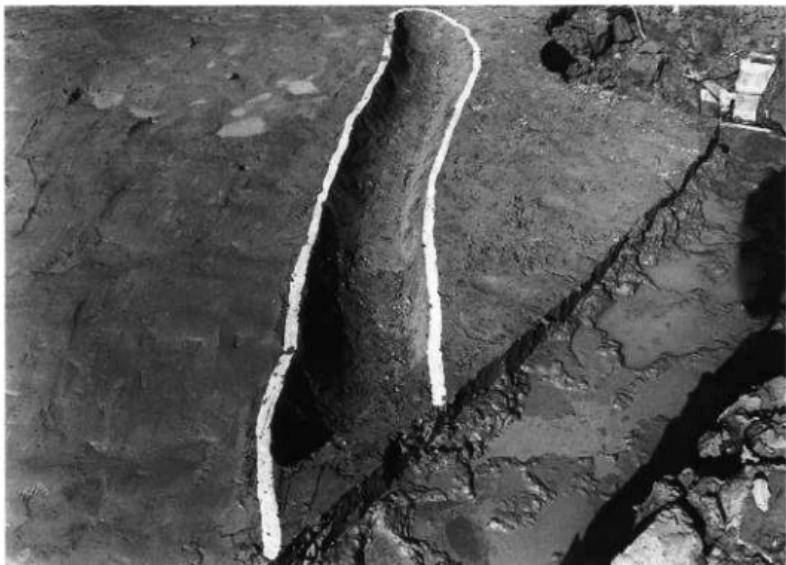
図 版



第1調査区 第1遺構面（北から）



第1調査区 第1遺構面 SK-101（下）、SK-102（上）（北から）



第1調査区 第1造構面 SD-101（南西から）



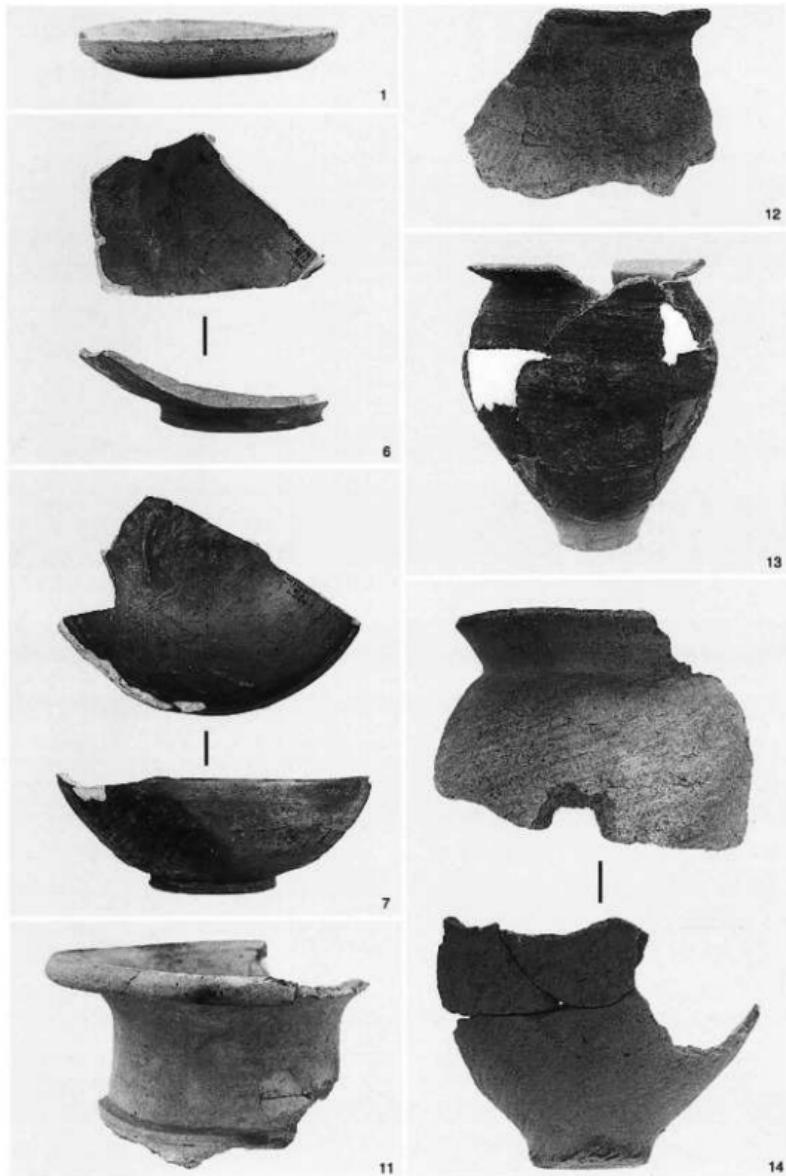
第1調査区 第2造構面（北から）



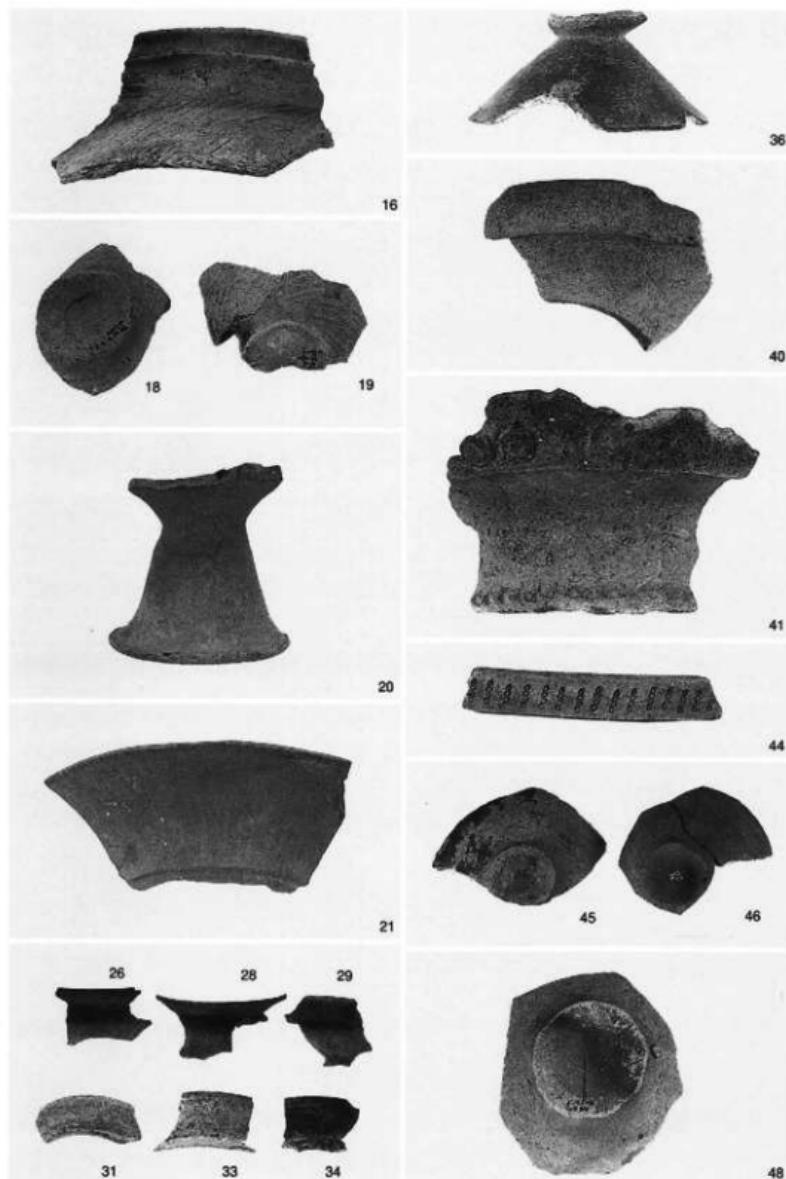
第2調査区 古墳時代前期遺構面（西から）



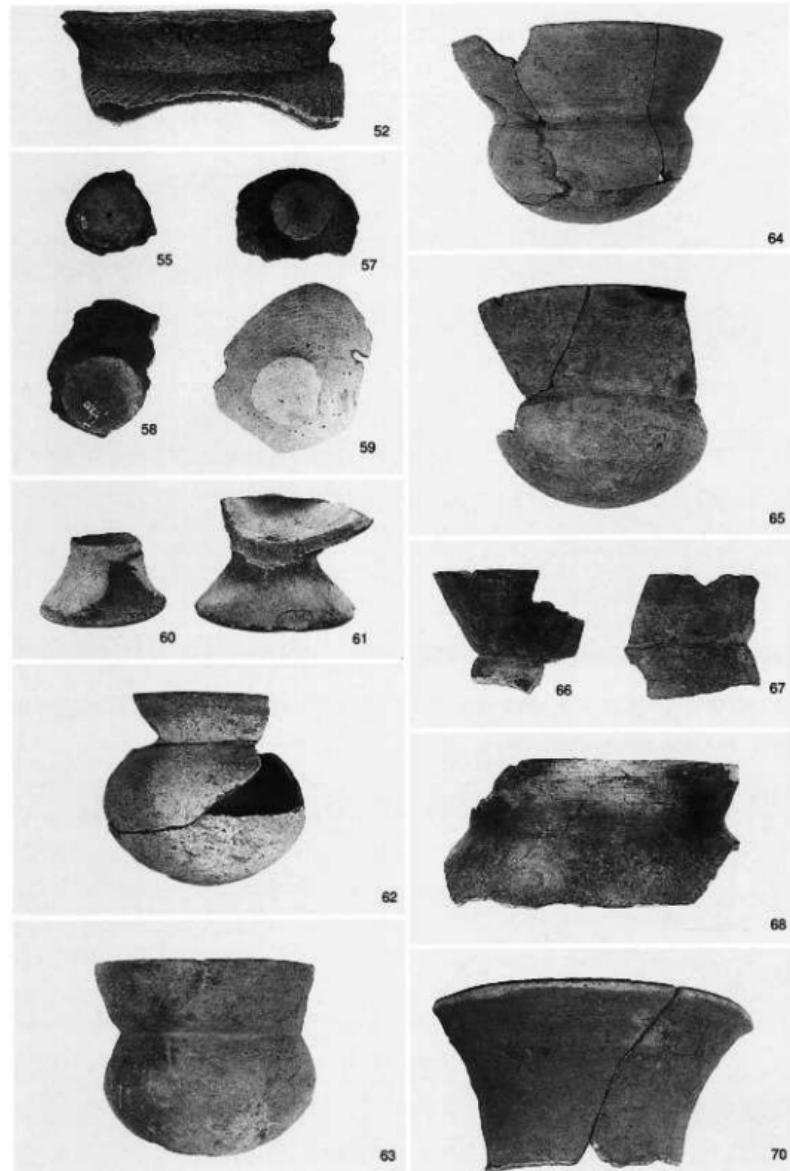
第2調査区 SK-103内木製品出土状況（北から）



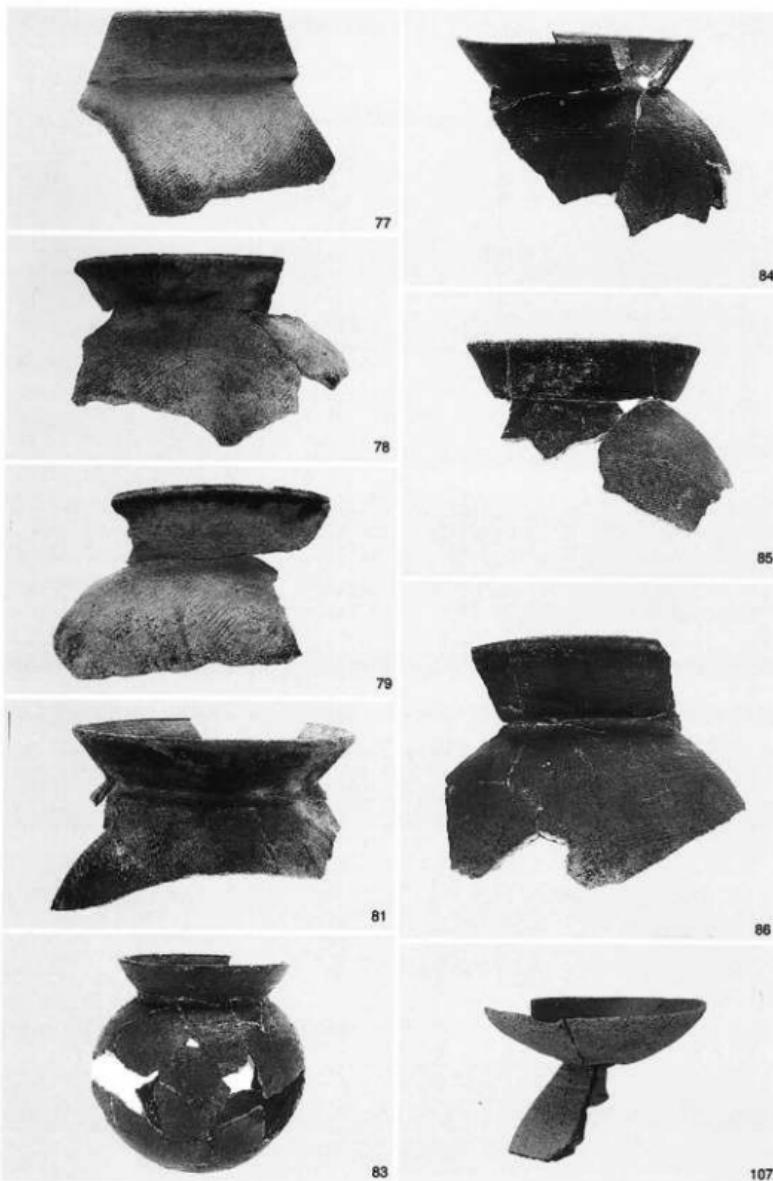
第1調査区 中世井戸 (1・6・7)、SK-201 (11~14)



第1調査区 SK-201 (16・18~20)、第8層内 (21・26・28・29・31・33・34・36)、
第9層内 (40・41・44~46・48)



第1調査区 第9層内 (52・55・57~59)、第2調査区 SK-103 (60~68・70)



第2調査区 SK-103 (77~79・81・83~86)、SK-105 (107)



108



125



114



127

128



116



133



119



134



120



121



122



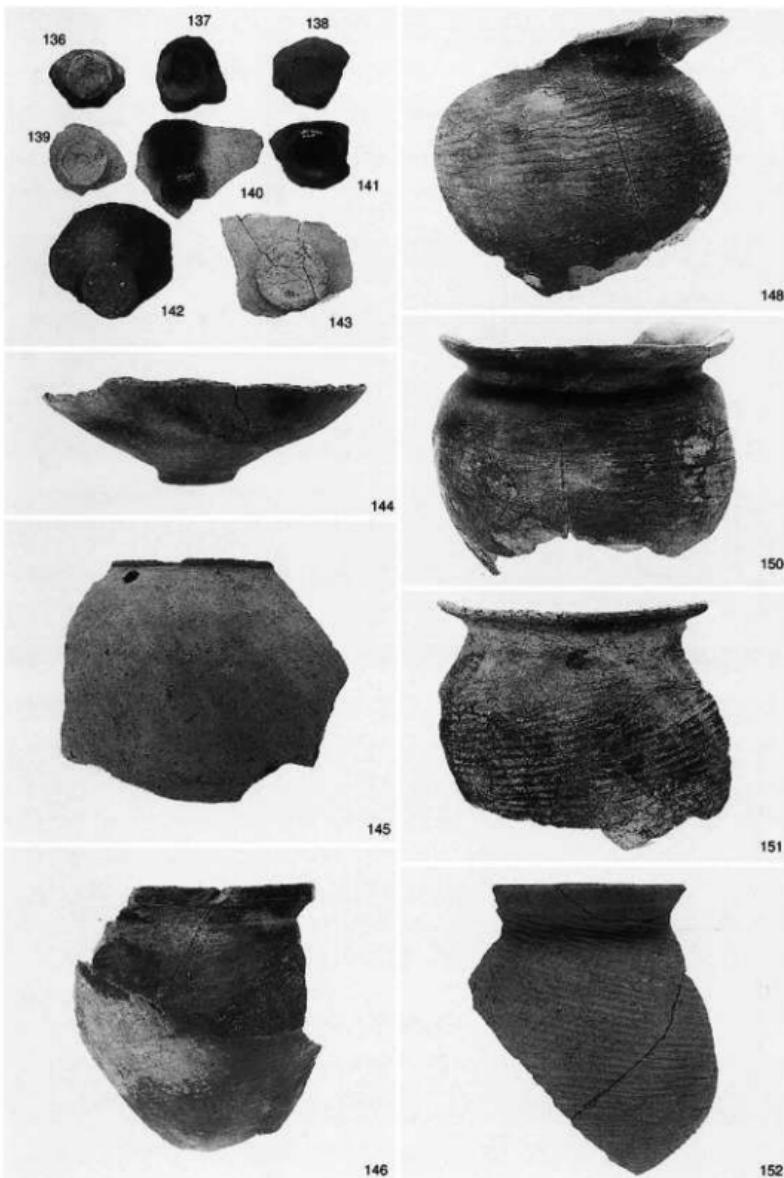
123



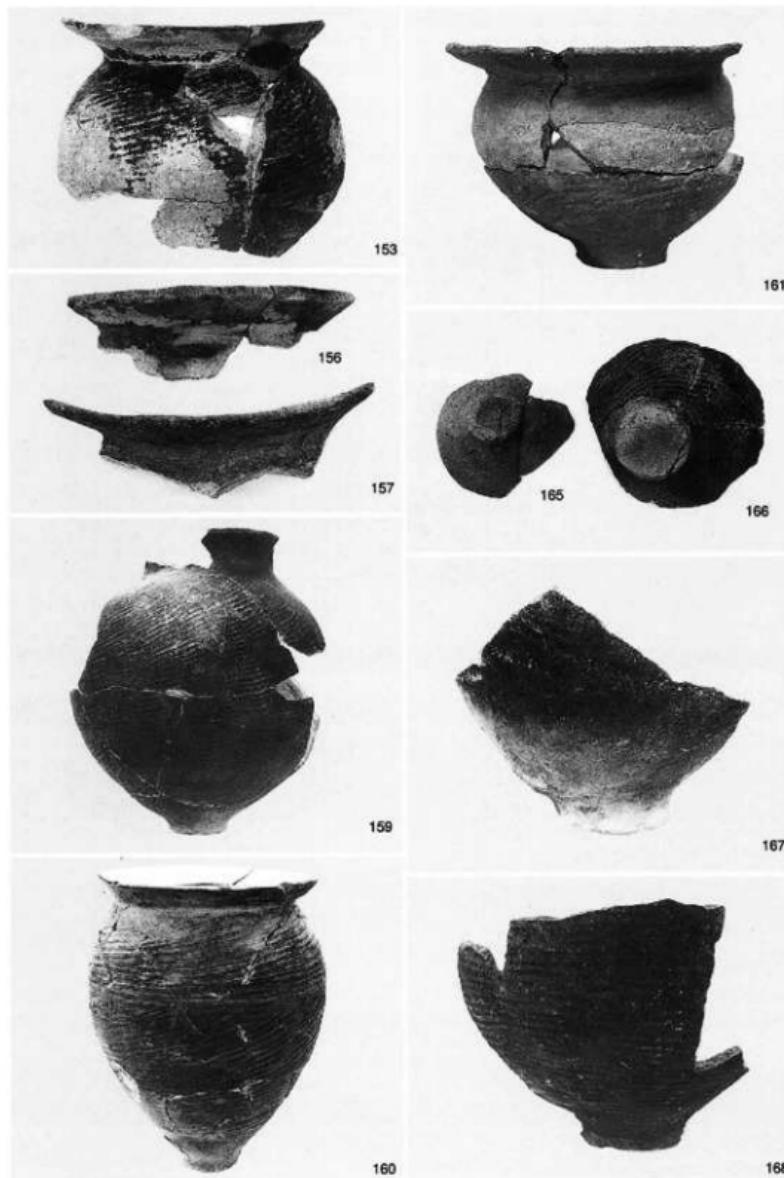
135

第2調査区 SK-105 (108)、SK-106 (114・116)、

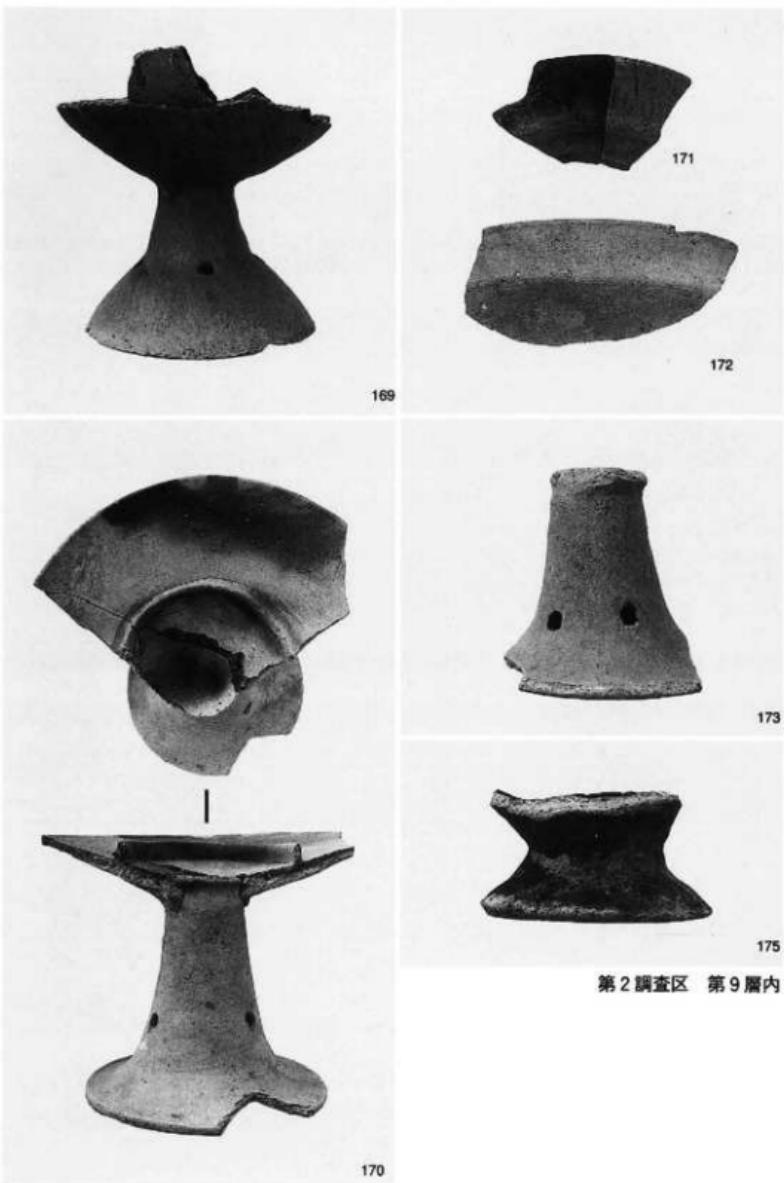
第8層内 (119~123・125・127・128)、第9層内 (133~135)



第2調査区 第9層内



第2調査区 第9層内



第2調査区 第9層内



8



9



89



90



91



92



93



94

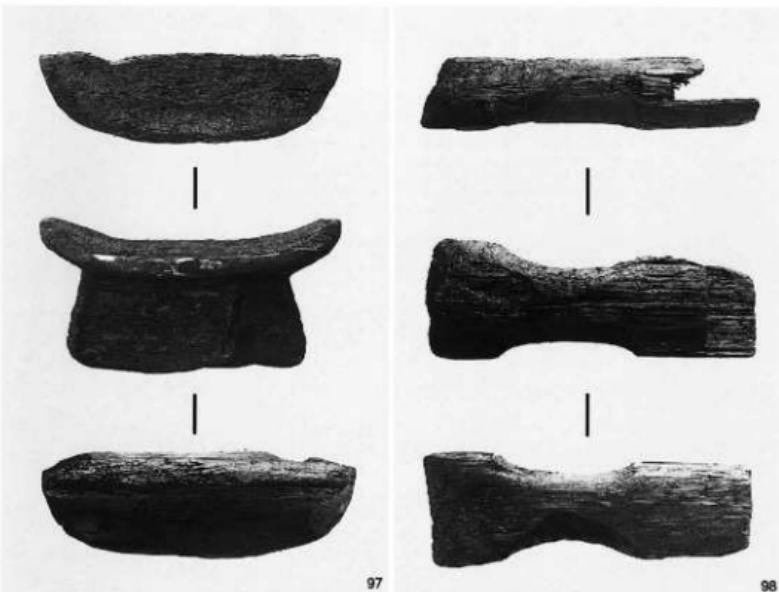


95



96

第1調査区 中世井戸埋土内 (8・9)、第2調査区 SK-103 (88~96)



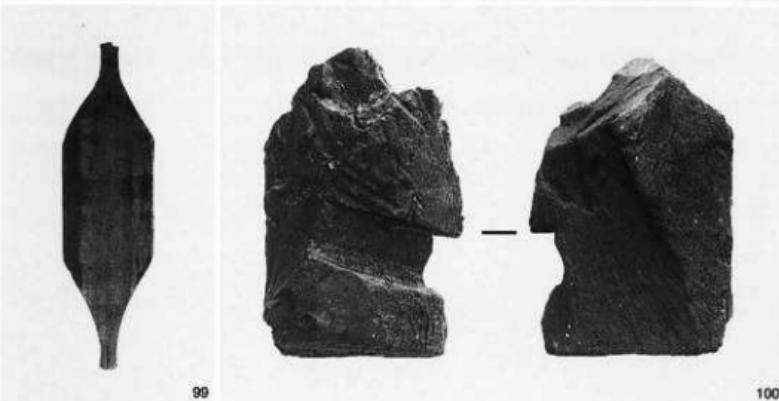
97

98

99

100

第2調査区 SK-103

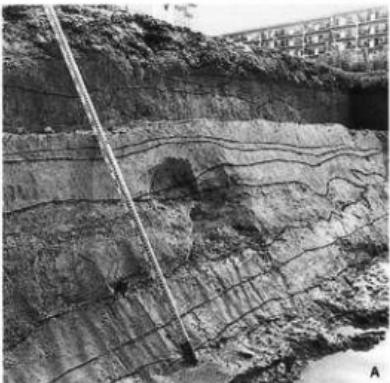




101
102
103



118



A



B

C

第2調査区 SK-103 (101~103), SP-101 (118)

A—第1調査区 南壁(東から)、B—第2調査区 西壁(北から)、C—第2調査区 西壁側下層状況(東から)

報告書抄録

ふりがな	きゅうはうじいせき さいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく55
書名	久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告55
副書名	I 久宝寺遺跡(第8次調査) II 久宝寺遺跡(第17次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会
シリーズ番号	55
編集者名	I 坪田真一 II 関出清一
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581 大阪府八尾市幸町4-58-2
発行年月日	1997年3月31日

所 在 地	所 在 地	コード	北緯	東經	調査 面積 (m ²)	調査原因
久宝寺遺跡 (第8次調査) 2-2-33	大阪府八尾市久宝寺 2-2-33	27212	34度 37分 30秒	135度 35分 30秒	19910620~ 19910727	650 駐内運動場建設
久宝寺遺跡 (第17次調査) 1丁目40番地	大阪府八尾市久宝寺 1丁目40番地	27212	34度 37分 18秒	135度 35分 25秒	19930719~ 19930730	160 遊戯場及び 駐車場建設

所 取 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	物 記 事 項	
					弥生時代後期の単窓城の抜がりを確認	
久宝寺遺跡 (第8次調査)	集落遺構	古墳時代前期	竪穴住居・溝	庄内式土器		
		中世	曲輪井戸			
久宝寺遺跡 (第17次調査)	集落遺構	弥生時代後期	上坑	弥生上器	古墳時代前期の土坑内から出土した木製部材は、当該期の生活様式を端的に示す資料である	
		古墳時代前期	土坑・柱穴・小穴	春雷式土器・木製品(紡織具・農具等)		
		平安時代後期	曲物井戸	瓦器		

久宝寺遺跡
財団法人八尾市文化財調査研究会報告55

- I 久宝寺遺跡（第8次調査）
II 久宝寺遺跡（第17次調査）

発行 1997年3月31日
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市幸町4丁目58-2
TEL・FAX (0729) 94-4700
印刷 近畿印刷センター
表紙 レザック66 <70Kg>
本文 書籍用紙 <70Kg>
図版 マットアート<135Kg>

